

『巨人』の喜劇的付録・翻訳

恒吉, 法海
九州大学言語文化研究院:教授

<https://hdl.handle.net/2324/20019>

出版情報：ジャン・パウル 研究書・翻訳書, pp.1-125, 2011-09-09
バージョン：
権利関係：

『巨人』の喜劇的付録
(第一小巻 1800 年、第二小巻 1801 年)

ジャン・パウル著
恒吉法海訳

恒吉法海・九州大学リポジトリ翻訳研究 5
2011 年 9 月 10 日

目次	
第一小巻	
次の『ペステイツのリアル新報』の告知・・・・・・・・・・	3
一月一日 新年新報・・・・・・・・・・	6
 (中略)	
一月三十一日 ヴィルギール新報 (『巨人』への序言)・・・・・・・・	45
第二小巻	
序言・・・・・・・・・・	48
I 哲学者と詩人についての新たな批判的下級刑罰裁判所宛の招待回状・・・・・・・・	50
II 気球船乗員ジャンノッツォの航海日誌	
第一航・・・・・・・・・・	60
第二航・・・・・・・・・・	62
第三航・・・・・・・・・・	68
第四航・・・・・・・・・・	70
第五航・・・・・・・・・・	73
第六航・・・・・・・・・・	79
第七航・・・・・・・・・・	84
第八航・・・・・・・・・・	88
第九航・・・・・・・・・・	92
第十航・・・・・・・・・・	95
第十一航・・・・・・・・・・	100
第十二航・・・・・・・・・・	101
第十三航・・・・・・・・・・	105
第十四航・・・・・・・・・・	109
訳注・・・・・・・・・・	114
あとがき・・・・・・・・・・	125

第一小巻

次の『ペスティッツのリアル新報』の告知

『ペスティッツのリアル新報』⁽¹⁾の記述者達にとって、諸都市や諸作家がこの新報に対して邪険なのは、夙に長く残念なことであった。新報と記述者は旅行作家や書評家によって漠然と平板に描かれて、ちょうどヴォルテールがかの冗談屋に描かれる按配で、この者はヴォルテールの玄関の下に雪に小便をしたのであった。この客人はかくて老諷刺家の厳格な顔を軽やかな勝手な須臾の図に象ったのであるが、しかし余りに不正確であった。

— いやしばしば奉納の絵は、画家フーバー⁽²⁾が犬を通じてものにした顔のスケッチに似ていて、これはフーバーが背中に置いた一全紙の紙に犬が長いこと噛みつき、ちぎって、かくてぼろ紙に似顔絵が生ずるようにさせたもので、その際フーバーは振り向くことはないのであった。— しかしこれは正しいことであろうか。—

それ故何人かの読者に夙に名の知れた男達、つまり皆注の所⁽³⁾で[*1]で名乗りを上げている男達が一緒になって、協力して、ペスティッツについて流布しているイメージよりもより良きイメージを、それも諷刺的の衣装を着せて広めることにしたのであった。我々の新報のこの舞台は狭小で田舎であるけれども、しかし我々は立派な新聞が皆そうであるように後から何でも取り入れるつもりである。印章学 — 発見術 — 骨学 — 数学 — 錢貨学 — 舞踏学 — 言語学 — 統治者史、それに異教史、要するにすべての学問分野が我々の計画に入っている。見知らぬ人からの投書であれ、切手貼付で、謝礼を求めないのであれば、(宛先は『ペスティッツのリアル新報』の発行所)採用されよう。

人々は月刊誌では批評的ジャーナ同様に正書法の統一を、しばしば思考ですら、それも一人の — 著者の思考ですら統一を好んで守るものである。リアル新報では四人の記者が執筆するけれども、しかし我々は皆同じ文体で書くことにする。我々は最初記事の下の署名を省略して、文士達に汗をかかせ、誰の執筆なのか推測するのに手懸かりがない状態にしようと思った。しかしこのような冗談をすると結果として『学的報知』や『学的ドイツ』諸紙にただ言葉の混乱と論争を招き、ために学的ナイトガウンを羽織った者が怒って、発酵桶と化して相手に飛びかかりかねない。それ故執筆者は自分の頭文字を記事の下に記して、後は推測して貰うことにする。ただライブゲーバーとショッペの文体は共同執筆者達とは全く異なる、しかしお互いは全く似通っている。この文体の顕著な同一性と若干の他の事を勘案すると、すでに長いこと私が抱いていたある推測がますます確実なものに思われる、つまりショッペは実際のところライブゲーバー本人に、かの『花の絵』で姿を消した男に他ならないのではないかというものである。この件については利発な男達の考えを是非聞きたいと願っている。

一七九九年の一月一日より毎日規則的に一枚発行される、これはルター時代の洗礼児のように、その日を司る聖人の名前を借りることになって、つまり九月二日⁽⁵⁾の新聞はアブサロム新聞という具合になる。『巨人』の各巻ごとに一ヵ月間このような日々が発行される。我々は他の月刊誌記者のように、最初の数年後に終刊の憂き目に逢わないことを希望している。カバーの色で雑誌が分類されることは、前掛けで職人が分類されるようなもので — 黄色の前掛けは鞣皮工を、緑色のはガラス工を、褐色のは織物職工を、赤い雄牛

の付いた白色のは肉屋を示しており — それでリアル新報は月ごとに『巨人』の巻そのものが有する趣味豊かな装丁を有することになる。この件については、我々の関知するものではないので、購入者の各人にその整理を任せたい。

— そして今や蜜月で、これについては私が就任プログラム⁽⁶⁾の中で大いに歓声を上げて伝えたものである、この月に私は物語の講座という懺悔椅子から飛び跳ねて、毛製のシャツを脱ぎ捨てて、私の素敵な島バラタリア⁽⁷⁾で軽快に六から八全紙の分だけ踊り、意のままにするであろう、と。とても愛しいイギリス女性の読者の方々、私を一人酒場の男達の許に放っておいて、立ち去って頂きたい。私が蜜月にいて、全く物語的と呼ばれるに値するような言葉を発したら、私はインク壺で溺死させられるがいい。このような事柄の混同、つまり蜜月を先の『巨人』の巻の継続と見なすこと、これはかの市長との多大な類似性を露呈するもので、この市長はラシーヌ⁽⁸⁾の『アンドロマック』の後、直接その『訴訟狂』が上演されるのを見て、悲劇と喜劇とを一つの戯曲と受け取って（例えば『ヴァレンシュタインの陣営』と残りの作品を同じに見るようなもので）、こう不平を言ったのだ。

『アンドロマック』は感動的作品だ、しかしかくも陽気に終わって全くびっくりしてしまった。最初はほとんど泣きそうになった、しかし最後に子犬どもが集まったときには笑わずにはおれなかった」[*2]。

賢者として私は、人は決して人間の半分だけを描いてはならないし、半分の人間であってはならない、これはカトーでしかないかあるいはスカロン⁽⁹⁾でしかない各人が行っていることであるがと述べて自己弁解をすることにしよう。スカロンにはこう言わざるを得ないだろう、我々皆に汝がもたらす悪臭を汝は香煙で和らげなければならない、諷刺は敬意で和らげなければならない、汝の町[パリ]では煮物屋の主人や強壮料理人が悪臭を放つものに浄水を注がずにそのまま不浄な水を流してはならないようなものである、と。しかし例えば私のような別の者にはこう言うことになる。人間については、射手やサソリが単に我らの北半球上を歩くときの部分、つまり上半身だけを描くなかれ、と。

リアル新報の功績は、パテルニアーニ⁽¹⁰⁾派[異端]がこう述べた[*3]別の半分、つまり悪魔が — 悪魔はそもそも周知の低い部分の親方[溝掃除人]であるが — その半分、即ち下半身を作ったと述べた部分を提出している点にある。

この描写された下位部分、人間の一階部分の着衣のために、我々は一一致し、熟慮して一つの — 新報を選んだ。この新聞の編者はすでに一度述べたと思う⁽¹¹⁾が、我々は今や悪魔同様に時間がなくて、まさにそれ故新報を有するのである。

すでに音楽通が気付いているように、我々は今や先祖がアレグロ[快速調]を弾いたようにアンダンテ[緩徐調]をすばやく弾くとすれば、このアラ・ブレーベ[簡略調、二分の二拍子]で人生についても記しており — 我々はすぐに鳴り終わる発条巻きを目覚し時計で — 一日の寿命の蜻蛉ではなく、一瞬間の蜻蛉で — 誰もがその罪を犯すと去っており — 全くパルナソス山の植物で、これらは全体アルプスの植物に似ていて、同じ速さで咲き、熟するのである — 要するに啓蒙主義は我々の人生の転回を半分だけ速めており、惑星のように、太陽に近いものほど速く公転するのである。

このような時代にどのような須臾の人間が、筆を執って、ほとんど持ち運べないような一冊の本を書くことができよう。というのはこのような本を読むことさえ、いずれにせよ誰であれ不可能なのだから。それ故ロムルス⁽¹¹⁾の死後一五〇人の世襲貴族が一年間各人一日

に十二時間ずつ交互に国王となったように[*4]、学者の協会が協力して、各人が数日数全紙作品を執筆して、それにまた読者協会が協力して、各人が読書の日課を選ぶとすると、十五分で（その数が十分であれば）彼らは四つ折り判を読み終えることになるろう、それはトルコ人が一緒に読書でコーランを読み終えるよりも速いだろう。

かくて誰もが枢要なことを執筆するか読了せずには世を去らないことになる。 — このことを私は編集者としてリアル新報協会の名にかけて言わなければならなかったし、言おうと思っていたのである。

フラクセンフィンゲン⁽¹²⁾にて、一七九八年 大晦日

J — n P — 1 編集者

- *1 1) 『巨人』の著者にして同時に編集者、
- 2) ヴィクトル博士
- 3) 検査官ジーベンケース
- 4) シェーラウのフェンク博士

シヨッペとライブゲーバーにも熱心に協力して貰おう。シヨッペの論考はハーフェンレファーを通じて、ライブゲーバーの論考は検査官を通じて十分に入手できるので、それらで我々の新報を飾ることができよう。

- *2 ラシーヌの作品集、第一巻。
- *3 アウグスティヌス、『異端について』、I、85
- *4 プルタルコス ヌマ伝

一月一日 新年新報
報告

聖なる祝日のせいで出版は稼働しないので、リアル新報は発行されない、諸祝日の廃止は、より多く印刷されるが、執筆はより少なくなるという結構な点がある。ペンは世間を説教壇と取り替えて、ただ説教壇のためにのみ清書するからである。 — しかし私には忌々しく思える点があるが、それはトアルド⁽¹⁾がその天候予測表で一月一日をいつも鬱陶しい天気で呈示していること — それに人間はその生涯の毎日を(最後の日は別にして)最初の日よりも容易に生き延びていること — それに同様に我らのリアル新報も余りに貧相に生気なく登場していることである — — — 割礼の真の寒々しい祝日である。

J — n P — 1

一月二日 アベルとセト新報
二重自我

私が目にしてきたような奇形児には他の学者達はもっと早く遭遇していることだろう。ハンガリーの伯爵領コモルンの背後が接合している二少女のことはどの本にも載っている、互いにキスしたり、殴り合ったり、背中で運び合ったりすることは、多分誰もが知っていよう。医者にとってもっと得がたいのは二人の接合されたスコットランドの奇形児で、彼らは単に胃までの上半身のみが対になっていて、残りの部分は一人分なのである。これは勿論より大きな家庭では比喩的に言って逆の場合がより容易であろう。しかしながらこの例や先の例を、ここから一時間ほどの小ペスティッツに住んでいる密着した兄弟メンシュ[人間]（彼らはそう名前を書く）は内容の点で思索者達にとって上回るであろう。

我らの最も偉大な解剖学者スフェックス博士は連結双生児におけるこの解剖学的金脈をすでに十分に採鋇し、空にしており、それで彼の後に調査する者は心理学的鋇脈しか取り寄せられない。彼が私に送ったスケッチによれば、両メンシュは脊椎骨のところ腰神経から仙骨神経まで、それに下の尾骨まで癒着して吻合しており、互いに後頭部を向けて、背中で合わさっている。私は次のような彼らについての予備知識をもって出発したのであった。

両者とも文士である、一方はペーターと言って、法学を修め、もう一方はゼーラフという名前で、雑多な専攻をしている。ペーターは生来確固たる抜け目ない人間で、決して諦めず、結局やり遂げるのである。このようにして彼は小ペスティッツの次席長官に昇進して、目下その職にある。いつも隣に小さな店が運ばれてきており、つまり庶民の店で、そこで彼は民衆本にあるように、あらゆる人気のある様々な品を売るのである。これに対して彼の背後の、一緒に結ばれたゼーラフは、生来悪漢で、ちょっとした悲劇作者、抒情詩人、ファゴット奏者、エピグラム作者、天才で、多くは見られない人間である。ただ彼はある事を学ぶのであるが、人から教わる時ではなく、一段階上がったときで、その事を土台にしているときであった。つまり彼は[上から数えて]第二学級のとき、立派な第三級生徒となり、第一学級のときやっと多くの第二学級生に先んずることになり、大学で高校生に追いつくのであった。しかし試験のたびに進歩するペーターが高く昇って行く一方、ゼーラフの方も一緒に後を追った、彼はペーターの飾り、付属品であったからである。誰も彼を除くことはできなかつたし、自分のベンチに押し下げることでもできなかつた。

世間は皆、父親がその遺言でキリスト教的作品を創ったと言っている。遺言の中で父親は両メンシュ[人間]の間に調停と分割を確定したのであった。というのはこのペアの兄弟はロンドンのように様々な伯爵領と裁判所管区の中にあり、また悲劇作者はその性質上ペーターにいつもフェンシングで突きかかり、宣戦布告や禁止の訴訟で取りかからずにはおれないので、父親がそれぞれのメンシュに一日間だけの立法権を与え、ペーターにその最初の日を与えていることほど賢明なものではなかったであろうと人々は承知しているからである。他方の兄弟が反乱を起こしたら、その遺産の四半期分の利子が — メンシュ達は資産があって — 統治している方の兄弟に帰するのであった。 —

私が着いたとき、ちょうど次席長官が舵を握っていて、王座にあった。彼らは路地から家の中へ滑稽な四本足の歩行をした、その際ゼーラフは昔統治した単なる皇太子として後向きに歩かざるを得なかった。かつて弁髪⁽¹⁾とスウェーデン風頭[短髪]、三角帽と丸帽、羅紗の上着と織機製の上着とがかくも密接していたことはなかったであろう。私と一人の淫婦と一緒に彼らの裁判室へ随行した、ペーターは私を丁重に迎え、ゼーラフは粗野な職人のように対応した。対の二人が二つの写字台のある書見鞍に乗ったとき — ゼーラフは仙骨に乗り、法律家は更に先の方に乗ったが、 — かの淫婦が、なかなか告解しそえないものの、尋問された。小さな葉のミルテに対して山林犯罪を犯した宮廷のある貴族の盗伐者が彼女を買収して、彼女は単に匿名氏という名の通りすがりの文士を子供の父親とし、イギリスの本屋のように著者を隠したまま曝し台に登ったのであった。記録の間、悲劇作者はある牧歌をまとめて、しこたま飲んだ — 彼は、アルカディア全体に張った愛の白く煮た極めて柔らかな綱の上をあちこち踊りながら、鏡の中の淫婦をしばしば見つめた。そして絶えず、赤道[線]のつまり美曲線の熱気を通っていた。記録作成家にとって、自分の背後でゼーラフが飲むたびに、意志に反して繊細な酩酊で霧がかかったように感ずるのはいつも不都合なことであった。このため次席長官はしばしば冷淡な審理の際に悩まされることになった。これは連合した脊髄の奇妙な交感疼痛に由来するものではなかろうか、彼らの血管が交流していることはほとんど証明できないのだから。

ペーターが派生的振り出された酩酊のせいで次第に憤慨し、顔色を変えたとき、ゼーラフは本幹的根源的酩酊で次第に軟弱になっていった。「天使の娘よ」と小声で牧人の歌い手は鏡の中の犯罪人に言って、感動に浸っていた。 — 赤い顔の次席長官は怒って廷丁に言った。「白状するまで、悪女を投獄しておけ」。このようなときにはゼーラフは兄弟に諷刺文を投げるのであるが、その諷刺文では兄弟を愛の電気の火花が落ちるとき、自分のようなフランクリンの避雷針とは違って落ちるのが難しいウィルソンの武骨な[避雷]円柱と見なしていた。

召喚と田園詩は終わった。ペーターは正義の女神の秤の代わりに今や商人の秤を手にとった — 立派な神話学的宗派共同利用である、メルクリウスは盗人と商人を、プルートの⁽²⁾ — は命令と黄金を分配するからである。 — というのは彼は毎日自分の店を視察するのである。悲劇作者はこのような機会には彼の背後にいて彼を喜劇のアカデミーとして研究するのである。そして店の顧客を記録して、喜劇に参加しようとする。「この諷刺には」(と次席長官は言った)「最も頭にくる。この兄弟はいつもは軟弱たんとする人間なのだから」。しかし私は、著作による怒りはまさに内面の怒りを和らげる、作家達には、手品師が毒蛇に襪をかみつかせるように、襪紙をかみつかせて、毒を除かねばならない、

と説明した。ペーターは今や神が自分の背中に結び付けた厄介な鞭について私に不平を言った。この鞭あるいはゼーラフは何も言えなかった、自分の統治する日ではなかったからである。「ゼーラフは」（と彼は言った）「経営者ではない。彼は自分が私にくっついて育ち、ペーターの脚か腕であるかのように大事にされる必要があると得意気である。いや彼はしばしば、自らを射殺して、ペーターが切断されるようにすると脅迫する。彼はしばしば最も利発な仲間といるときに、ある本を読みながらうめき声を上げ、一 どの子供に対しても優しいのに、しかし後ろの私をばちっと打つのである 一 タベの祈りのときによく俗謡や呪詛やとげのある文書をもににする、しかし都合のいいときは賛美歌も歌う 一 特にひどいと思われるのは、請け負わされて貞節について書く場合で、神聖な気分するときでもそうである」と。最後の点に関してはすべての非倫理的なことに同様に彼の言葉を受け入れる、すべては詩的熱狂に由来するからで、このときには両極端が接するのである。Pauson⁽³⁾のようにギャロップで走るミューズの馬の絵を逆さにすると、泥土の中を転がる馬を目前にすることになるからである、一 それにまた穀物は雑草を混入されるとより強力な火酒となるように、そもそも非倫理的な詩人からはもっとも多くの[酒]精や火を搾り取れるからである。

天才についてのペーターの描写はゼーラフにとって都合が良かった、彼は次席長官のような諸天才達を滑稽なものとするために、すべてを書き留めていた 一 というのは天才的な人々は好んで自分の同類を攻撃するからで、猟犬のようなもので、猟犬はすべての動物の中で（兎すら例外ではなく）狐を最も好んで追いかける、狐は自分達犬と最も近くて、とてもひどい臭いを発するけれども。

以上が法学者が支配日のことである。今や彼の受難日がやって来て、その日には再生のときを希望するしかなくなるが、再生のとき⁽⁴⁾には彼をすべての肢体から、つまり排泄器官や髪、胃、それに彼の兄弟から解き放つのである。

翌日悲劇作者はすでに日の出前に次席長官と共に素敵な自然の中へ抜け出していた。私は双子がある丘の上に立っているのを見たが、丘でゼーラフは頭を四本の脚の間に下げて、絵のような脚を通じてすばらしい風景がより良く、細部に至るまで描かれているのを眺めていた。しかし次席長官は子供っぽい姿勢を恥ずかしく思いながら、うんざりして重要な事柄を考えていた。それから彼はゼーラフと共に自然の花の絵、谷の絵、山の絵、葉飾りを旅して行き、この詩人が牧人達の口頭の歌についてまとめた歌を耳にしなければならなかった。それでもペーターは時に 一 それは彼の強壯剤であったが、自分の家畜を外で放牧する一人の歌う牧人を描くことができた。そしてゼーラフが夢中になって 一 野原の中を歩いて歩き始めようとする、彼はそれに逆らって、ゼーラフを差し押さえて、帽子を取ってやると脅すことができた。

つながった双子が家に帰ってきたとき、私に勿論ゼーラフは好き勝手なことを言った。しかし分別ある人々ならば、その言葉を聞きたいとは思わないだろう、一切について人々は想像がつくであろうからで、つまりそもそもゼーラフにはどんなに鬱陶しく思われたことだろうか 一 彼の心と彼の詩心の熱い泉の中でどんなにいつも鶏に熱湯が注がれ、卵が固く煮立てられる定めであることか 一 どんなにペーターは歌をもはや、普段侍従のぼたんの数に従って、あるいはホルシュタインの紋章の釘の数に従って歌の本に載っている、つまり三つの歌[*1]以上の歌を聞きたいとは思っていないことか 一 どんなにゼー

ラフの悲劇的叙情的高揚はいつも次席長官な中へ尾骨を通じて和らげられて伝わり、長官をただ目覚めさせ、陽気にさせることか — どんなにかペーターは彼を苦しめて、どのような創作的敬虔さも本物とするよう、つまり本当の敬虔さとするよう求めるものか、ニュルンベルクでは得点札[計算用貨幣]職人組合は、本物の貨幣は造らないと誓うというのに — どんなにしばしば彼は商取引や競売のとき悲劇を書くことか、しかし何とペーターは彼の朗読で悲劇的同情や驚愕の下にありながら、ブレーメンの友人に鮭を注文することか — どんなにペーターと国家はヘリオガバルに似て小夜啼鳥の舌を聞くよりはむしろ噛みたいと思うことか — どんなに彼は、詩的に照明された世界地図に慣れているために、現実の単なる黒い地図が広げられたとき、突然めくらってしまうことか — どんなにペーターは日々彼のことを笑っていることか、それも真の諷刺で笑うのではなく、残念ながらそのまま笑うのである — ペーターがもっと年を取ることになったら、どんなに忌々しいほど悪化することか、もっと更に悪化するに違いないことか、想像がつくであろう。... これはきっと確かであろう。しかしアベルとセト新報の終わりに当たって、ちなみにその名前はその内容よりもはるかにより類似の兄弟達を結び付けるものであろうが、多分こう質問してよかろう。メンシュの家族の他に、例えば肉体と魂の間の — 男と女の間の — 書評家と詩人の間の — 第一世界と第二世界の間の同盟を除いて、これほど面白い同盟があろうか、と。そしてもし存在するならば、帝国新報に、報道するよう頼むことができよう。

S — s

*1 この三つの歌曲は誰でも暗記できた。その後一冊の薄い歌曲の本が生じ、それから厚い本が生じた。

一月三日 エノク新報

知られざる歓喜の小天国についての朝の考察

エノクの日に、それにエノク新報では、考える人間ならば、天を観察し、仕分けることができよう。エノクは我々を越えて行ったし — ⁽¹⁾そこで彼はまだ途上であるに違いない、エノクはたとえ光速の渡し船で滑るように進んでいるとしても、まだ十九等級の恒星を越え出てはいないからで、まだその光線は我々の下に達していないのである。 — しかし人間よ、単に大きな喜びの天、つまり王座の天蓋、ベッドの天蓋、馬車の車蓋[幌]を見上げるばかりでなく、自分の上の小さな、赤い絹製の日傘を見上げるがいい。すると君はより容易に、小さな、木材を節約している地獄、ポータブルのポケット版硫黄池、タンタロスに座し、耐えることになる。

私も時折厄年からの邪悪な厄瞬間に暮らすことがあって、例えば次のような苦痛を経験する、つまり私はラテン語が出来るようになってからいつもIVとVIの数字のときに間違わないよう改めて考えなければならぬのであり — いつも木材(Magahony)の代わりに木材(Mahagony) [正しい]と言ってしまい — 英語をマスターする前はいつもsの後hを書かずにchを書いてしまうのである。他の人間ならばその体に別の黒い留め針や喪の留め金を身に付けることになる。つまり彼らはバイロイトでバイロイト新聞を全く濡れた

灰色の状態で印刷機から手にする — あるいはベッドから出るとき、ベッドの方を向いたサンダルを目にすることになり、ただ足をつっこむためにうんざりしてサンダルの向きを変えなければならない — 製本屋から届いたばかりの最良の論争誌の場合、動物性の膠でくっついている悪臭をまず何とかしなければならぬ、等々。

かくて最も安いオペラハウスや別荘の前でも一人の出札係、心配とか苦勞とか困窮と呼ぶべき係が立っていることになる。それで例えばそもそも黄金は学問の進歩を邪魔するように、それ以上に贈呈本の塗られた黄金は、偉いさんが一枚一枚頁を開けるたびに読み進む際の迷惑となって、少しも嬉しくない。 — あるいは家に帰るとき、すでに路上で部屋の鍵を手にするのを考えて、階段をずっと鍵を手にしたまま登らなければならない。この癖をやめようとしても、成果は更に少ない。鍵を十回ポケットに戻すことになって、鍵穴には単に一回だけ入れることになるであろうからである。

地獄の川のこのような浅い支流の中で、自分の踵を濡らさざるを得ない人は — これを行う羽目になるのはひょっとしたら、単にそれについての長々しい記述を読むからかもしれないが、 — 次のように考えると良い、つまり同様に樂園の川が岸辺から数歩のところまで小さな温かい源泉を発している、と。その温かい源泉の一つとして考えられるのが、朝の考察をやめたくないのであれば、自他の推測に逆らってそれをやめ、その考察をまず明日のロト新報で仕舞まで無事に展開することである。

F — k

一月四日 ロト新報

歓喜の小天国の続き

ロトの妻の塩から葡萄の房にまで至るロトの歓喜の天国は我々の天国でもないし知られざる天国でもない。

小さな苦難は、人々が鳥のように餌を消化するために飲み込む石としての働きをする。ささやかな喜びは餌である。人生は、オーストリア人のように縮小詞[*1]を愛し、あるいはレット人のように（メルケルによれば）縮小詞の縮小詞の縮小詞を好む。それ故敬虔な読者は（私のことだが）、自分は普段楽しさに気付いていないから楽しいのではないかと鋭く注意するがいい。大学で見たコックのことを考えてみるといい、コックは朝九時にはすでに清潔なテーブルクロスを掛けて — 食器や二個の水差し、ビールグラスを適当な位置に置き、ただ若い神学生ばかりで貧しい食しか摂らないが故に全く不要なワイングラスも少しばかり置き — それから家で食事している殿方達のために注意深くメニューを考えて、かくて穏やかな緊張と弛緩の中で自分の収穫の多い一日を過ごしたのである。自分は選帝侯よりも永続的に気分良く過ごしていることに一言も気付かなかったこの男のことを考えてみて、そしてこのことを自分に当てはめてみるといい。ある快樂が年中続くと、その快樂にはほとんどはや気付かない。歓喜と友人が心にかかるのは単に到着と別離のときだけである。心の中の青空は頭上の青空同様に、数週間続くと、全く灰色になる。いや君は甘美な（それとも苦い）感情を抱いてこの世に生まれてきたのかもしれない、この感情については君は少しも気付かない、それが消えたことがないからである。存在するという素敵な快樂が毎晩七時間口先から引き抜かれるということがなければ、その快樂はほとんど味がしないことだろう、そのためには覚醒が必要だからである。

我々の人生の道は両側に一杯の小木と憩いのベンチがあるので、私はある人が疲れるといふと不思議に思われる。できるものなら、単に普通の夏の日に達成し、誰もが自らの刹那の喜びの花を育て熟させる基となっている諸目的の驚くべき数を数え上げてみるといい
— ただ自惚れてはならないが。

例えばこの朝の考察の植字工は、自分の植字する文字ごとにある目的に達して、かくて小さな（勿論大きくはない）小樂園に達する。さて植字工は一日に印刷工にただ一全紙渡しさえすれば（これを我々は発行所に要求しているが）、単なる文字だけで — 丁付けや句読点、繋ぎ語は見積もることすらしないが — 日々八千の喜びが侵入してくることになる、この喜びの手数料帳、収穫記録をここで植字するときの言いようもない満足はほとんど考慮に入れなくてもそうであり — 甘美に花咲く瞬間の真の、ほとんど見通しがたい温室である。

読者や著者の場合、温室はもっと長い。しかしそのためには計算器や会計局が必要である。しかしまさに歓喜は、票と違って、⁽³⁾数えられることはなく、単に目方が量られる。単に沼地の多い轍のある人生の道で、我々は歩数計を身に付けるが、柔らかな緑の道では付けない。 — 多くの男達や学者達が、他人が自分の名前と同じで、それを印刷してあるとき、自分の名前から汲み出す満足感について見逃していることは普通考えられることであろうか — 更には居住都市の印刷された名前から — テーブルクロスの単なる見本料理から — 自分の職人道具を目にすることから — 錆で緑色の塔から、冬の最中の緑色のブラインドの戸から — 民主主義者であるときフランス人という印刷された単語から、貴族であるときは、同盟者という単語から — 反批判から — 学生であるとき単なる J. J. (ジャン・ジャック[ルソー]) から — 切られたカルタ⁽⁴⁾から、カルタの上ではなく、カルタの中に金貨を得たとき — ドレスデンにいるとき、両方の憂鬱症的に美しく互いに出迎える橋上の行列から — ヴェニスにいるとき手すりのない橋、この凱旋門から — ライプツィヒにいるときドームの上の黄金の文字から — 某のような首都にいるとき民衆の幸福から（汲み出す満足感について見逃していることは普通考えられることであろうか）。

F - k

*1 全く自然なことである。我々自身が小さいのであるから。というのは ⁽²⁾(Modeer によると) 水滴の中には 250 万以上の滴虫類はいないそうであるから。これに対して我々の小さな水球あるいは地球上には我々はすでに 10 億以上いる。それでもまだ余地はある。編集部の注。

一月五日 ジーメオン新報

先の新報に対するささいな付録

ジーメオンは穏やかな祝福する名前である。土曜日（今日である）には人生の休日、休息の地を、それに我々の岸辺をめぐり取る大波を静めてしまう多くのものを思い出す。私は、先の会員がエノク新報とロト新報ではなはだ気まぐれに述べていた意見に、ひょっとしたらその会員の思う以上に賛同するかもしれない。我々は皆強い太陽光線に対して土

塊の背後に隠れるコウラナメクジである。それ故誰も他人が身を潜めている土塊を鋤ならしてはならない。 — 確かに誰もが他人の林苑は大事にしようとするが、その生け垣は大事にしようとし、他方自分の白馬のいる小庭は大事にされたいのである。我々は自分自身には他人に対する正義を命じながら、この他人には — 我々に対する寛大さを命ずる、そして我々は好んで他人に対する恩赦権を放棄しながら、我々に対する恩赦権は他人に拒否したくない。

倫理的世界はどんなに広大でも十分ではなく、物理的世界はどんなに狭小でも十分ではない。ミュンター[*1]は述べている、ギリシア人は将来の楽土を、彼らがより長く旅をし、学ぶにつれて、ますます遠くの世界へ引き延ばしていった、最初はアルカディアの方へ、次にエペイロスに — それからナポリへ — それからジブラルタル海峡の彼方へ、と — まさにそのように人々は現在の楽土のためにますます多くの土地と国々を必要としている。先の新報の立派な気まぐれな著者は浄福の者[故人]の居場所のためにはそもそも一つの居場所、椅子以上のものを求めていない。私はこの椅子すらも求めない。私にとってはこうである。人間の至福のために年ごとに新たな要素を混ぜ合わせて、つまり新たな家具、新たな月光、名刺、コルセット、国々等々を混ぜ合わせて、それで我々の騒がしい子供時代の鎮静用マークグラーフ散薬、ニクラス睡眠薬、この真のミトリダート⁽¹⁾[万能薬]は、薬用のそれに似て、すでにケルススの存命時に三十八の薬から成り立っていて、それからネロの時代に更に二十の新たな薬が加わって — 五つの古い薬が除かれ、 — いやアンドロマコス⁽²⁾は二十八の新薬で — わずか六つの古い薬を彼は外して — この強壯薬の構成物を七十五にまで拡大したが、以上のことが工場や大市で容易に見てとれるのであれば、 — 逆にこの新報の筆者は特効薬を実際もっと簡単に準備する、それはミイラ⁽²⁾からではないが人間からのもので、それも単に人間の — 心臓からのものである。これを与えられる者は — 一つであろうと、この者はそれで死ぬまで保つのである。

*1 シチリアとナポリについての彼の記述を参照。

一月六日 三王来朝新報
欠号[*1]

*1 このことは諷刺的な（すでに夙に苔むした）冗談ではなく、真面目な事実であって、その詳細はここでは適当ではない⁽¹⁾。

一月七日 イシドールズ新報
教区村フーケルムの公設図書館と私設図書館の記述
文芸報知 — 同様の新報 — プログラム — 序言 — ヒルシング⁽¹⁾の図書館情報 — 文学者と書誌学者、これらは以前から（特に彼らが激しく論争しているとき）私にとっては精神的な意味で、犬どもが鉦山の鉦夫にとって美食の意味でそうであるもの、

つまり好物であった。いや私はこのような作品を読みながら、あたかも自分が自らリアル新報のために仕上げたかのような甘い錯覚に陥り、それからそれらが冗談にすら思えるのである。それだけに私はここで自らその牧師のせいでもとても有名な村の文学上の財産についてちょっとした財産目録を記すのに一層満足を覚えるものである。都市に旅行して、都市の言語財宝について生産物カードや地所記録を書き留める学識の欠如している私のような男にとって、村に旅行して、そこで本のように見え、本の香りのする一切のものについて登録することができれば、それで十分であろう。さすれば何ほどかのものがなされて、古い図書について新しい図書がまとめられることになる。

その教区村は学的世界に十分に私の名親、つまり牧師のフィックスラインによって知られている、私とその生活を紹介したし、彼自身がそれ以来発表した[*1]幾つかの立派な作品によって貢献してきた。先年の夏、私はそちらへ寄り道をした。学者にとって一私の人生を描いている場合でないのであれば、一私の名親達が、あるいは代子が、私をどのように迎えたかは全くどうでもいいことに違いない。それ故そのことは脇に置いて、ただこのメモのみを抜粋することにする。フーケルムでは万事は七年⁽²⁾前と同じであった。車道の大きな石、これにはどの百姓も呪い声を上げて、やっとのことで自分の馬車を乗り越えさせていたが、まだそのまま道の中にあつた、誰も他人のためにそれを退かそうとしなかったからである。村の乞食達に対しては長い槍の当番の者が小さな当番の少年と共に巡回していた。フィックスラインの家の者達は喜びで我を忘れていた。(私は書評家達の好意でそのかたもっと有名になっていたのである)。牧師は、いつもは自らの生身の抄録者であるが、黄金のように伸びていて、幾らか似ていた。善良なティーンネッテはいつものように初老に見えた。多くの似通った子供達の中で私は大きくなった代子をほとんど見分けられなかった。その子供は二度ほど求められて躰のいい擦り足お辞儀をした、最初は左足で、次には右足でそうした。裕福さ、陽気さ、家具類は以前より増していた。フィックスラインは私に会計局の資金は安定していると信じて貰えるかと尋ねた。君達善良なる人間は、どの並木道も遠い未来にはますます先細りになって見えるはぐれ鳥の男にとって、どんなにか満足し自足した様に思えることだろう。この世が卑小に見えるだけでなく、諸惑星も卑小に見える詩人にとって何と幸せに思えることだろう。君達にとっては、庭が縮小化された風景であるように、君達の居間が縮小化された世界だ。楽園は養魚池のようなものではないか。この池は常により高い地と最も低い地の間に準備し、掘らなければならないのである。

私は、単に自分にのみ関する私的な事柄は黙って触れずにおくとすでに述べた。一その一つが断りきれなかった小昼[*2]である。食事の間に牧師は語った一妻はその間切り分けていた一自分は現在有する図書について最良の報告を『文芸報知』に載せた、と[*3]。ここで私はフーケルムの図書についてペスティッツのリアル新報に記載する計画を打ち明けた。自分の窓の近くに育ってきている月桂樹の枝に対する窃盗にほとんど驚いたかのように、彼は言った。百姓を相手に大したことは期待できないのではないかと。「大きな百姓達は」(とティーンネッテは言った)「こちらでは粗野で武骨です」。

一「しかしここにそれらの旦那方のためのものがあります」と私は言って、ポケットからフーケルムの司法官の厚い委任状を取り出した、それは私に、すべての家々の一時的、仮の、暫時の火災監視を行い、生意気な振る舞いを忠実に記録し、そのために当地の学校

教師を書記として取り立てる権限を与えるものであった。「この機会に」（と私は結んだ）
「折を見て彼らの個人の図書も視察します」。 —

フィックスラインはそれなら出来ようと言って、前もって文学的記録を見せて欲しいと頼んだ。ティーンネッテは学校教師について言った。「夫妻は自惚れています。私は最近その妻に着古した白い前掛けを贈ったのです。でも彼女はそれを高慢に町で深紅に染めさせたのです」。 — 「そんなに怒るな」（とフィックスラインは答えた）「夫は阿呆だ。しかし貴方に誓いますが、私が職にある限り、生意気はまだそれ程増長せず、自分の上司を模して司祭の外套を着て支部教会へ行くようなことはなかろうと思います」。 — しかし二つの身分の境の者達、境界獵獣にとって理性と謙遜は容易なことではない。薬剤師が医師に対して様々に色を変えるように、また官房書記が弁護士に対して、近侍が身分のある男に対して様々に色を変えるように、学校教師は牧師の双曲線に永遠に接近してくる漸近線であり、この漸近線にまた寺男が接近しようとする。夫の方は動物的植物として教師世界を学的世界と明確な縫い目なしに結び付けようとする。その妻もポリープ花であって、彼女としてはまた教師世界を百姓世界と縫い合わせようとする。これについては広範囲に話すべきであろう。

- *1 しかし彼の最新の『フーケルムの地下世界』⁽³⁾の著者フィックスラインは私の知る限り『エルランゲンの学的新聞』の他にはまだ紹介されていない。モグラの穴が彼にとってカタコンベであり、軽蔑すべきものは何もない。
- *2 人々は *déjeuner dinatoire* と言う、つまり昼食のあるいは昼になる朝食である。貧しい人々は更に *souper déjeunatoire*、つまり朝食となる夕食を有する。
- *3 私は報知紙に、この報告を採用したか否か、いつか明らかにするよう依頼する。

一月八日 エルハルドゥス新報
フーケルムの書誌学の続き

イシドールス新報の発行された昨日から町の教養層は特にエルハルドゥス新報に期待して、幾つかのことを汲み出そうと考えていよう。

実際この世紀では本とその目録ほど大切なものはないかもしれない。というのは — 昔と比べて — 作品が少なすぎるからである。以前本を読んだのは、そもそも本を読む[講義する]仕事の大学講義資格者といった人や、その講義を聴講する別の人々ばかりであった。今ではすべての世界、大陸、それに北アメリカも読む。しかし読者と比例しては著者の数は増大してこなかった。第二に以前はまだ批評する松毛虫がパルナソスの森林を食い尽くすことはなかったが、今や風が吹くたびに倒れる始末である。第三に確かに今は本の洪水について苦情が言われる、しかし昔も洪水と苦情があったが、単に苦情のみが残って洪水は止んでいる。毎年上の方では文学的氷の山、ミューズの山で新たな細氷が出来る。しかし我々は、下の方へ毎年溶けて流れてくるものも測量すべきであろう。第四に、我々の格子垣の世紀ではすべてが短く、小さく縮んでいる、散歩杖 — 人間 — 安楽椅子 — 鉢 — 寿命 — 長靴 — 弁髪 — 活字、しかし特に本がそうである。図書

館の二人の係の者がほとんど引きずることのできない昔の大型二つ折り判の河馬を帳場の秤の片方に載せて、現今の二十折り判、三十二折り判、四十折り判、五十六折り判、九十六折り判のすべての図書を載せたもう一方の秤で先の秤を持ち上げることができないとき、我々の図書の貧弱さはどのような結末に至るのか、分からない。何というより強靱な生命が、かの活版印刷のザリガニには、現今の十六折り判の滴虫類の混沌と比較して感じられたことか。――

私の最初の図書館訪問は学校教師と学校図書館へ行くことであった。両者は留守であった。部屋では一本の鳥銃の横に八本の皮を剥かれたばかりの榛の棒があった。多分学校教師のハルモニカ鐘を素手で鳴らさないようにするための教育用鍵盤であった。私は一台の古いスピネットで楽譜の反古を裏返して作ったコーヒー豆の若干の袋を見て、初見で弾いて、苦勞してそれらの袋を読み取るために回していたとき、ハルス氏という学校教師が、広くて黒い、絶えず上下する眉毛の頑丈な男であったが、右手に薪用斧を持ち、左手にブリズム風に形作られた木片を持って入って来た。この木片を彼は授業中子供の膝に静かに切断する機械鋸としてあてがうつもりであった。私は早速、一時的火災監視の申し出によって彼の憎しみを買うことになった。「そんなのは」（と彼は言った）「奇妙な始め方だ。どんな放火犯も前もって知ることになって、ならず者をただの一人も捕まえないぞ」。

連隊のように村に点在して舎営している学校図書館を私は勿論点検できなかった。つまり幾多の読書協会で会員一人一人が一冊の本を寄付するように、以前からフーケルムのABC協会、綴り方協会、読書協会では会員一人一人が一冊の小本を買っていた、これはその小さな泣き虫の購入者自身が通学する限り、学校所有のものとなるのである。しかし夕方学校が終わると、学童、その図書の関与者は皆、自分の本をまたそれに付属した筆と共に家に持って帰り、翌日我々が何を食べ読むことになるか何も案じないのである。しかし私はこの大学図書館のカタログをより細かく調べてみた――というのは百姓の学校は高度な学校であるからで――一つには百姓はこれを最後に入学するからであり、二つ目には百姓の風習はアカデミックであるからで――作品の中で二つの主要クラスが豊かであることに気付いた。1) 神学的作品のクラスで――つまり多くの（フーケルムでは）珍しい聖書の版で、聖書全体の、即ちカンシュタイン聖書⁽¹⁾の版であるか、あるいは部分的な、即ち福音書や詩編や十戒の版であった。――2) 珍しい教科書の、即ち入門書のクラスで、私はこれらをミラノのアンブロジーアーナ図書館でもゲッティンゲンの図書館でも調査して成果がほとんどなかったものである。図書やアマナズナの貯蔵はその宝物の年輪によって評価される。フーケルムの図書は最も古いもので、そもそも教科書は教師同様容易に齢を重ねるようなものである。――Woide⁽²⁾が有名な「テモテへの手紙1」の第三章第十六節の証明文に関するアレクサンドリア古写本について述べていること、つまりしばしば触れられているため全く剥げこすれてしまっていることを、私は学者達に対してザイラーの教理問答⁽³⁾について報告しなければならない。その証明文は剥げ、汚れ、こすり取られていて、それで教会長老はそれをもはや誓って証拠として提示できないのである。

私は図書館司書のハルスにこの図書施設の読書室を尋ねた。彼は、今の部屋がそうであり、これが読書ベンチで、いや更に綴り方ベンチ、ABCベンチであると言った。私はその一つに座って、見上げながら早速――彼が自分の『学童』の数で私を凌駕しようと思っているのに気付いたので――私の無数の読者数を数え上げた、九圈の中に私の長い読

者数の長いベンチはベンチの脚を広げるものである。かくて彼の顔は、これは長すぎるから Levret⁽⁴⁾ の分娩鉗子でこの世に引き出されてきたに違いないのであるが、更に長くなることになった[がっかりした]。

彼は学校経営には感謝していると請け合った。自分は子供達が本を朗読している間に、百姓達のために裁判の文書を作っている、自分は本を覗く必要はない、皆が暗記しているからだ、と。図書館司書でもその図書を暗記することはまれである。気高い官吏は国家のすべての金脈を自分の手の中を経て流通させながら、それでも私物せず、清貧に甘んずるように、立派な顧問官司書、大学図書館司書は文学的財宝を忠実に自分の手を経て、振りまきながら、自分の頭脳にその中の若干を着服することもない。彼らは、その導線で電氣的明かりを点火することなく明かりに当たる火薬である。 —

学者達に示しておくが、ハルススの推薦でフーケルムでは毎年二十一グロッシェンで教科書が購入されている。勿論私はこのいばり屋にもっと多額のいわば学校資金の金猫[皮の胴巻き]を見せて圧倒した。「これは」(と私は言った)「1 フランケン・グルデンと若干それ以上になり、当地では十分であろう。しかしだからといって、まだ多くの他の土地とは勝負にならない、例えばフォークトラントのホーフでは毎年 2.5 グルデンの学校基金がその学校図書館の維持と増強のために決定されてきた[*1]。このような租税は、友よ、商業の盛んな都市に任せたらよろしい。このような都市にとって、学問のためのこのような助成は容易であろう」。 —

私はここでハルスに、二番目の公共図書館、つまり教会図書館を開けてくれるよう頼んだ。彼はそうしてくれた。

*1 ヒルシグの『図書館の記述』第二巻。 — しかし今や金庫と図書館は当地の校長⁽⁵⁾の熱意ではなはだ強化されており、上述のことはもはや合わない。

一月九日 ユリアヌス新報

書誌学等々の続き

彼は教会のドアを開けながら、こう請け合った。「牧師とはぴりぴりした関係だ、だって牧師には百姓達をもっと別様に叱って欲しいのだ。それに何故」(と彼は付け加えた)「私が教会の礼拝の終わりのオルガンでプラハの戦闘⁽¹⁾を弾いて、右手で下のバスでの太鼓の射撃を指示し、上のソプラノでの小さな銃火を指示すると、それに反対するのだろう」。「そこもと自身の憎しみは」(と私は言った)「全く法にかなっており、規範的なものだ、ハルス殿、というのは教会法⁽²⁾によれば[*1]、司祭に対する俗人の憎しみが予想されているのだから」。 — そこで私は、彼の知っている事柄ばかりを話し始めた。教会で私は彼に言った。彼が教会の窓と呼ぶに違いない二、三のガラスのドアから陽光や月光が漏れてこないのであれば、誰も相手が見えないことだろう、我々二人はまさに教会のドアと呼ぼうと思う別の隙間から入って来たのだけれども。そこに説教壇があったのは、私には好都合であった。私はその喜びを村のプリスキアヌス⁽³⁾に少しも隠さずに言った、これは室内で唯一の説教の場所であろう、と。私は — せっかちに — この聖なる場所に登っ

て、教会のこの斑点のある『世界図⁽⁴⁾絵』の中で少し見回して、より大きな声を出して、下の学校教師に語りかけ、共鳴するか耳を澄ました。上では最近の日曜日の説教部分が開かれていて、それに説教と啓発に役立つ、まとめた説明文があった。私は神聖な説教の積載定規、あるいは歩数計、つまり説教壇時計を逆さにした、多分これは流れ終わっていた。対のコンマ、あるいはコロン、あるいは疑問符を図書館司書に語りかけて、調子が良かったので、私は最後に正式な欠員の、臨時の説教を始めた。これを私は説教集には収めず、次の箇所続けるよう頼むものである。

「敬虔なる学校教師殿

そこも何が何事にも動じないのであれば、そこもとは小石に違いない。しかしまず何に動ずるか私は知らなければならない。私は機知的な頭韻法に関連してこの上で説教について説教できよう — 序論では我らの宗派の序論について触れることができよう — 主題では慣例的な主題を提示することになろう — 第一部においては我々二人は第一部を考察することになり — 第二部では第二部を — 第三部では第三部を考察することになろう — そして各細部は自ら設定し、細分化することになろう、ちょうど近頃の自我が自らの分子であり、分母であり、商であるようなものである。 — 教訓のところでは、そこもが笑うのでなければ、各教訓につき一つの教訓がなされよう、しかし多分そこもとは笑おう。...

私はますます饒舌になって、そこもが居続けるつもりなら、明後日まで説教を続けるつもりである。しかし敬虔なる聴講者殿、今日は共に学校教師達の途方もない悪意について考察することにしよう。私はつまり — そこもが等身大の私の膝上半身像から分かるように — 百もの説教壇に対して低すぎて、 — 説教壇の噴火口から両手も目も見えないようにはできないので、 — もしも学校教師がいつものようにこの聖地に一つの聖地を、つまり説教壇の上に小説教壇を後から運んで据えてくれなかったら、この肉体的歩幅のせいで流暢な演説を行うことができなかつたであろう。

この小説教壇で私は自分の背丈を伸ばせて、教区民の感動のために感動的に枢要なことを講ずることができた。

しかしまさに私が試験説教をある教区民の前で行ったとき、その教区民の選挙委員、教皇選出委員が私を自分達の教皇に選出する可能性があったのであるが、当地の学校教師は私のライバルにオリンピック競技の花輪を、つまり牧師の鬘を周旋しようと思っていて、私には意地悪にも台座の代わりに忌々しいほど細い、一本の建築用材から切り取った小台だけを持ち運んでくれたのであった。親愛なるハルス殿、この有毒な規範的な助力者は多分に、私がこの狭い台の上では一本の脚しか載せられないであろうと予見していたのだ。もう一方の脚は目下の支柱脚、[天を支える]アトラスが麻痺するまで、狭い空中にぶら下げられていなければならない — それからこの支柱脚が伸ばされて、私は休暇中の脚を使う — かくて体全体が十五分ごとに置き換えられて、あちこち揺れなければならなかつたのである。

ともかく私は耐えた、しかし教区民は奇妙な姿勢のせいで後に私を選ぼうとしなかつた。というのは私は新鮮な格言と足場をしばしば同時に頼りにしていて — 前文は高い所で朗読しながらも、後文は壇の中の見えないところで朗読して — かくも狭い演説壇で激

しい情熱を避けずにいて、何度も証明文の中でシナイの山から滑り落ち、干上がりながら、すぐにまた高く身を起こして、かくて陽気な教会の中で、私の脚が片方ずつしびれる他に、人々を眠り込ませることは全く不可能となって、聞き手を私の両脚が失った感覚状態に陥らせることも不可能になったからである。私はそれ故全く荒々しく合唱隊席に向かって言った。敬虔なる忌まわしい学校教師殿、と。...しかし敬虔なる現今の学校教師殿、どうも説教があちこちに飛んでしまっている。むしろ一緒に脱線することなく、数分間合唱隊席に登ることに致そう。アーメン」。 —

*1 『証人について』 C.14.X. それ故聖職者に対して俗人の証人は認められない。

一月十日 あるいは隠者パウルの新報
書誌学の続き

我々は登ったけれども、これはむしろ新たな脱線であろう。というのは私の任務は教会全体の中から図書館のことだけを読者に知らせることであるからである。しかし司書的なことは合唱隊席にはほとんどなかった、小さな、鉛筆でオルガンのリード系の管に落書きされた銘が意義のあるヘルクラネウムの発見となるのは、期待すべきことではないが、単にフーケルムが地震で瓦解して、古物研究者によってまた発掘されるであろう場合に限られるからである。ハルスは私に言った、自分は（まだ宗教改革以前に造られた）フラクセンフィンゲン全体で最も古い神殿と塔に仕えている、と。そして私に譜面の代わりに文字の記されたちょっと昔の賛美歌集の他にオルガンのキーを示した。キーには撞木の当たる鐘のように深い溝が出来ていたが、同様に脚鍵盤の上には浮き彫りの苗床があって、脚鍵盤はそれをすばやく弾く音楽的長靴の長年にわたる靴磨き人という次第であった。床には黄色の薔薇の花と、花というよりはむしろ糸と木材である花束の残骸があった。 — あたかも、それらが育ってきた夏が干涸らびて横たわっているかのように、 — 村々の下で日曜日に見られた夕方の喜びが — それに（ひょっとしたら胸の中のより高い花々と共に）それらの喜びが灰色に枯れ落ちてしまった多くの若々しく息づく胸が横たわっているかのように思われた — 私は、新たに花咲くように衷心より夏とその枯れた喜びをまたその乾燥した樹の導管と共に新鮮な水の中に差し込みたいところであった — その背の高いオルガン奏者の方を見ると、彼はこの件では、直に箒を持って、枯れた「汚物」を半ばかがんで掃き出さなければならないであろうことに腹立たしさを覚えているだけであった。

我々がまた降りてきて、私が死神のように、多くの重装備の石面の騎士とその穏やかに祈禱する高貴な妻の胸の上に足を置いたとき、私は深く、しかし全く快活に、古い過ぎ去ったカトリックの時代を振り返ってみた。この床はその時代の反響ドーム、遊戯場であった。まだ存続しているカトリック教会は陰鬱な重苦しい中世が間近に描かれていて、私の心に余りに重苦しく思われる。これに対してすでに過去のものとなっておれば、暗い絵は楽しく思われ、甘受しながらこう思い描く、何と多くの熱く呼吸する胸がここで新鮮な空気を吸い込んだことか、何と多くのそよぐ溜め息が、何と多くの改善の思いの祈禱がここ

ではなされたことか、何と貧しい、僧院の深い縦坑の中で沈み込んだ人間達が、我々の人生の昼間の楽しい太陽ではないけれども、第二世界の若干の星々を鉱夫のように眺めたことか、と。これはそれでもちょっとしたものである。私は排気ポンプで真空にまで薄められた不信仰の大気の中にいるよりは、迷信の湿気ある霧の中にいたい、真空の中では胸は求めても虚しい呼吸をして痙攣して死ぬものである。――そもそも我々の世紀は錯誤の倫理的源泉よりも錯誤の方をむしろ消してしまった。我々の灰色のそこひは、そこひを目から除くそこひ鉗子で手術されることはなくて、ただそこひを目の基部へ押し下げるランセットオでのみ手術されてきた。ほんのちょっとした激しい動きで忌々しいことにそこひはまた上に昇りかねないのである。

ようやく教会の図書室へ、つまり人類の牧師待機者ベンチ、帆掛け船地球の最深部の船倉、即ち墓地へ赴く時となった。この公の図書館は日曜日ごとに開けられて、その度に学校教師夫人は実入りがあることになる。上級司書のハルスも、下級司書の墓掘り人も、私が予期していたようには、ガラスの目とブリッキ製の管の付いたハンティラーゲの仮面を[*1]、仕事の間着用せず、埃を吸い込んでいた。この珍しい図書館は印刷物や紙類を受け入れず、最古の諸民族のそれのように、骨のように固い物へ記述されている。この緑の花の図書館は多くの立派な真の伝記を有しており――墓ごとに一つの伝記があり、その中では『生きた植物標本集』のように記述された見本があつて――村の歴史、地方の歴史へ寄与しているということを文学者は活用したらいいだろう。全体的にその図書館は文学や美術の図書館以上のものと見なされなければならない、それは多くの悲歌や韻のせいであり、その大部分は大抵の古代ドイツの悲歌や韻がそうであるように、棺の板の許で風化しており、また十字架の鉄の花輪のせいであり、また死者の上にある板の覆いの絵のせいであり、鉄製の天使のせいである。この天使には、人間的天使同様に欠けているのは生命だけである。私はハルスに、彼が若干の髑髏を片付けたとき、何故他の図書館の石膏の胸像よりもより本物で、より似通っている著者達のこれらの胸像をきれいに並べないのかと尋ねた。彼はいつもの鼻息で答えた。教会墓地は多くの教区民にとって小さすぎる、自分はしばしば教区の人々に午後教会でポスティラ[その日の説教集]を読み上げるときや、夕方居酒屋で新聞を読むときにこのことを紹介したのだ。「しかし」（と彼は続けた）「やつらは金を払いたくないのだ。それで我々がここでやつらを鯡のように上下に詰めることはやむを得ないことになる」。

――「そうなのはおしまいだ、フーケルムの名もなき墓地よ」と私は叫んだ。私は熟慮していたことを言いたかったのだ。つまり私は忘れられて、不明のものとなった死者達の間を通過して、斜めになったり、転倒したりしている黒い十字架を立て直して、忘れやすい世間に食刻された長い辞を保っている多くのさびて、ぎいぎい言う金属の小扉を開けたとき、そしてしばしば「ここにAは横たわっている、ここにBは眠る、ここにCは休む」の文を読み通して、殊に姿が整うよりも早くに柔らかな形姿が崩れ去った哀れな乳飲み子について読み、あるいは低い自ら陥没しかかった墓石の上に足を踏み入れたとき、このパリのモルグ広場⁽¹⁾のせいで、逝った者達が通行人に「誰か私を知る者はいないのか」と尋ねて公開されるこの広場のせいで、私の心臓に陰鬱に重苦しい血が流れたのであって、私は心の中でこう尋ねたのである。これらの正確に記述されて、干涸らびていく人間達の一人をフーケルム以外の誰が知るだろうか、残りのドイツやヨーロッパは彼らの一音節だけ

でも知っているだろうか、あるいは誰かベルリン人が、ヴァイマル人が、あるいはピットが、あるいは学的新聞の編集者達が、あるいはライブゲイバーが知っているだろうか。そしてしばしば三週間埋葬がない場合に、冬の間深い雪の中をこちらに渡ってくるものがあるであろうか。フーケルム人は実に気の毒ではなかろうか。 — しかしこの瞬間、またフーケルム人としてもベルリン人やヴァイマル人、ピット⁽²⁾や編集者達、ライブゲイバーをほとんど知らないことに思い至った。「しかし」（と私は快活に言って、辺りを見回した）「フーケルム人は上述の有名な人々と同様にこの青空を周辺に有しないか — 脚下にこの穏やかな緑の大地を — 胸の中に一人の人間の心全体を、そして彼方には自らの神を有しないか — だから広大な、諸世界にわたる創造物の大群の中でどこかの部分にとって孤立というものが有り得るだろうか」。 —

私は好んで読者方の、殊に若い方々の手を取って、その手をこの生命の人間の灰の詰まった境界の塚の前に、つまり死、境界の神が常に若い人々の前で新たに築く塚の前に導きたいところである。そして私は自他に対して — 我々の人生はいつも若干の本が倒れて描かれている銅版面上の図書館に似ているので — 人生の最後の丘の上の金属製の小門を開けて、かくて我々皆が我らの倒れた本の、あるいは倒れた友人達の履歴を通読するようにさせたい。 — そしてこのことを私は隠者パウルの日にしてはならないのであれば、いつそうしていいのか。 — 答え給え。 —

*1 本の埃を吸わないよう司書のために作られたもの。

一月十一日 ヒギニウス新報

フーケルムの書誌学の続き

それから私は小農のファースマンの所へ行った。彼の不完全なカレンダー収集は壁から一本の紐に下がっていた。珍しい作品が鎖の下にあるようなものである。しかしそれは識者を満足させるものではない、残念である。帝国侯爵や帝国修道院長、騎士団長やドイツ騎士団長が学問に対して、多くのもの、つまり — 校正紙や — モットーや — 郵便物の都市名の押印や — 人相書 — 非正書法の作品 — 賛美歌の完全な収集を行い、かくて援助の手を差し伸べるといふ時代がいつか来るならば、我々はこの収集を喜ぶことになって、それを旅行者にこの述べて見せることだろう。「これは我々の侯爵達が文献のために行っているのです」と — ハルスは火災違反に関しては何も記録すべきことを発見しなかった。 —

トライバーの書籍収集では本棚しか見つけられなかった、それらは学生達の許で普通見られるように一時的に錫の棚、食器戸棚として使われていた。しかしここでも違反に関しては注意することはなかった。

トライバーの許に住んでいる退役した傷痕軍人のシュタルヒは、その連隊の図書をドアに打ち付けていた。即刻私は目を通したが、それは彼の — 退役を述べていた。私はこの哀れな奴に一グロッシェンを殺害、必殺[*1]のために贈った。これは老いた兵士には欠かしてはならないものである。

ケンツとシュトロベル、ハールバウアーの図書館では興味深い草稿が手に入った。私はそれらを読むことができなかった、文字が古代ペルシア語のもので数字がアラビア数字であったからである。草稿の所有者、つまり百姓達は確かにハルスと話して、私には読めないことだろう、自分達の子供の綴り帳なのだと語ったけれども、しかしここは学者共和国が間に入って判断して欲しい、フーケルムの百姓達が、私自身が読み解けない古代ペルシア語[*2]の写本を評価し、読む能力があるものか、どうか、と。かくて私は文献学者や人文学者に、休暇中に旅立って、古代ペルシアの文字の写本を視察して、場合によったら百姓達の手からひたたくりたいと思うよう焚きつけたい存念である。

驚いたことに、フーケルム全体で私は 一 集成本やエラスムスが新約聖書の翻訳の際よく利用したテオフュラクトスの注釈や六十二巻のフォリオ判の大きなライプツィヒの普遍辞典、Bir Muhamed と Ben Bir Achmed Chali 著『人々特に君主のために制定された道徳について』四つ折り判で130葉からなるペルシャ語写本を求めたが、その一枚も見つからなかった。というのはいつもは馬小屋や居間で見つけ出していたに違いなかったからである。

火災防止視察は今回全くうまくいった。シュトロベルの所では段のない火災用梯子が見つかった。ケンツは取っ手の革紐のない火災用バケツを有していた、そして若いハールバウアーは何も有していなかった。審判官はすべての違反を記録した。

地方小売商のザイリヒは最大の書籍の宝で我々をびっくりさせた。殊に新刊書が多く、すでにその一部は暖炉の周りに膠で接合されて掛かっていた、つまり四つ折り判使用のコーヒー袋であり、八つ折り判使用の胡椒袋である。現今では、余所の暦が禁じられている国々では手帳の暦はそのケースに記されているように、ザイリヒは立派な民衆新聞を単に商品を付けて供給しており、新聞はそのケースというわけである。一 愛好者達はこのような新聞をフォシウス⁽¹⁾が鬚眉のルカヌスをそうしたように、いつもポケットに入れていて、椅子のところで腰掛けると取り出すのである。すでに古代ローマ人の許で本は季節とその産物の神や商人達の神殿の傍らで売りに出されていた。何故どの出版者も 一 香料商にして書籍取次業者のザイリヒのように 一 本あるいは形式の商売と物質[内容]の商売を同時に結び付けて、互いにかみ合うようにしないのだろうか。

勿論書籍商のザイリヒの許では、気に染まぬことに、多くのカントやフィヒテに倣って仕上がられた作品に関し、また私が求めた学的新報そのものに関し、不完全なものしか見いだせず、多くは全く見いだせなかった。私は彼に答弁を求めて言った、彼のような卸商は、商売に包むすべてに作品の中で全く申し分のない文芸新聞をすべて取り揃えて、アドレスやレットルを記す必要がある、と。

彼の暖炉はいい状態であった。火災防止視察はその後仕立屋の親方リヒターの所に赴くことになり、そこで気付いたのはハルスのズボンで、このズボンに記録係のハルスは時計ポケットを縫い付けたと主張している、時計の代わりにポケットを身に付けるためである。

暗くなってヒギニウスの日も終わったので、審判官は記録を中止することにして、悪天候の中家路についた。

*1 そのようにキューリッツでは一杯のビールを呼ぶ。

*2 それらが古代ペルシア語のものであることを私が結論付けたのは、主に、それらが遠くからドイツ語に似ていたからである。しかしフルダによれば、いやすでにモールホーフとボックスホルンによっても、ドイツ語とペルシア語は近いそうである（例えば同じ比較級、属格等）。文字に関しては、我らはそれをローマ人から、ローマ人はギリシア人から、ギリシア人はフェニキア人から、フェニキア人は最初の人類から得たもので、最初の人類はヘルダーによればペルシアに住んでいた。

一月十二日 ラインホルト新報

書誌学の終結

価値ある図書館は偉大な男達、例えばルターやライプニッツ等の自筆原稿で輝きたいものである。一 私はまだ存命のうちに自筆原稿が求められればいいのと思う。一 村長のイシャーリオト・ゴージェルは自分の図書館の価値を自筆原稿のはなはだ貴重な収集に置いている。それは有名というよりは知り合いの貴族や百姓達のもので、一般的には同意とか借用証書という名前で求められるものである。ミヒャエリス⁽¹⁾、エルネスティ⁽²⁾等々の偉大な言語学者はゴージェルの自筆原稿を他の多くのそれよりも大事にしている。

このような書類束はプリニウス⁽³⁾が貧者の図書と呼んだように、富者の図書と呼ぶことができよう。官吏達が誓って私に請け合っただが、この村長はしばしば千ターラーとそれ以上を彼の目に偉大と思える男の一枚の原稿のために支払ったそうであり、いやある子孫には財産の四分の一で一枚の紙を買い取ったそうである。これは同じようなアントニン・ピカーテルを思い出すと、うなずけるものがある、彼は一四五五年リヴィウスを一枚買うために自分の農場を競売に出したのであった。原稿の集金人は、ヘルクラネウムの銘文同様に、それを誰にも書き写させない、いや彼はこれらの証書を全く神聖なものと思なす。アイヒホルン⁽⁴⁾によるとすべての古代の民が自分達の文書をそう見なすようなものである。

すでに何人かの書誌学者が、誰も自分達が欲している古い本を譲ろうとしないことに公然と涙を流したものである。私もここでゴージェルと彼の家族の恥となるよう大きな声で言わざるを得ないが、私が単に丁重に、書誌学上のことで、彼の許で、筆跡鑑定[*1]の際に利用するために若干の自筆原稿を求めたとき、そして自分はそれらを学的世界の大半に紹介し、およそ古文書学的天分を有するような者皆にそれらに対する注意を喚起したいと誓ったとき、このやくざな村長と彼の家族は、私を家から投げ出し、しばしばホガース⁽⁶⁾が顔を描き留めたという同じ指の爪で、逆に私の顔に印をつけるような表情を浮かべた。学者達はこれに対して何と言うだろうか。

ところで。ともかくすべての図書館司書ははなはだ自筆原稿を熱望しているので、ここに私の名前、それに最も偉大なドイツ人の九人の頭脳の名前で、我々の原稿を全紙一枚ごとに半分の金と引き換えに会計局に申し出るものである。多くの者がそうしているように、我々も二度と原稿を所有したくない。

火災防止視察の片方は、金持ちのゴージェルと共謀しているように見えた。というのはハルスは 一 彼の家庭弁護士で 一 暖炉の小扉をすぐに閉めて、何かを無視しようとしたからである。しかももう片方が、つまり私であるが、小扉を早速また開けて、中へ入り、幸い四本から五本の炭のように黒く干涸らびた木片を明るみに出した。ハルスはこの違反

を記述しなければならなかった。

帰路私は私の代子に出会った、この子供は紙製の凧の尻尾半分を飛ばせるようにしていたが、それは『悪魔の文書からの抜粋』から張り合わせたものであった。... ここでは学的共和国の運命がかかっている。私に黄金の言葉を吐かせて欲しい。何ということか、君達土地の高官よ、管理者よ、警部よ、シュピー⁽⁷⁾スの『貨幣の楽しみ』の中の助言は — これはすでにモールホーフ⁽⁸⁾の『博物学』に書かれているのであるが — 君達の許ではほとんど効果がないのか、それともむしろ君達は両者の本の中で — まだ読んだことがないのか、つまり君達は、行商人やけちなユダヤ人が反古紙を張り合わせて分配しないうちに、前もって反古紙のどんな小片も君達の部屋に持ち込むよう奴らに強制すべきであるということ。君達は公的な反古紙の図書館を設立することはできないのか。まさに古代ローマの作品のように没落していくすべてのドイツ人の作品は、一人のポツギウス⁽⁹⁾によって小売店から、クインティリアヌスのように救出されていいのではないか、あるいは地下室からリヴィウスのように救出されていいのではないか。窓ガラスにはしばしば著者達のはめ込まれ、油をさされる、著者達はもっと高尚な明かりをもたらし得るはずなのである。そして製本工が装丁に使っている本はしばしば装丁された本よりも上等である。

— 先の八月私の仕立屋は私のためにズボンを作る必要があつて、彼はシュレーゲルの『アテネウム』誌からの若干の長く切った紙片で私を測って、この額測定器を腰測定器（シュタインの Cliseometris）に変えたのではなかったか。 — すると勿論後世に残るものは何もない。 — 同じように冷淡さが我々の時代ではフーケルムの内外での下着やジャガイモ袋の新旧ゴート語の文字に対して見られ、どの言語学者もこのようなものを銅版面に刻さない、これはミイラの襦袢紐上のエジプト語の文字に関しては日々見られるものである。そして名のある委員会が撚り糸の球の際かなりの草稿の研究にまだ踏み込んでいない、この球のアリアドネの糸を辿ればこの反古に行き得た筈である。確かにフィクスラインはしばしば告解代のグロッシェン貨幣と収穫祭説教のお代を印刷された紙の中から取り出すことになったが、この紙は中のお代よりももっと価値のあるものであった。

最も私にとって悲しいのは、人々がまさに学的新聞を、つまりそのお蔭で著者達の名前と記者達の胃袋が生命を得ている新聞を、利用しているというよりは使い古している点である。というのは我々著者はそこから我々の不滅性を得ているのであつて、学的新聞が潰されると著者達のじたばたしている[虫]の巣全体が潰れるのであつて、我々は消去されてしまう。それ故単なるジャーナルだけの図書館を設立して、我々文士のうち誰が不滅の文をものにし、誰が全くそうでなかったか、後世が分かるようにするべきではなからうか。

書誌学者と記録係は今度は老いた農夫[アダム Erdmann]レルヒの家の中へ入って行った。最初私は何故居間がアイロンをかけられたシャツのようにきれいに滑らかに整理されて見えたのか、土曜日というのにと説明しようと思ったが、暖炉の脚立には白い下着が一杯かかっている、明日は白いものを着て聖餐式に行くことを示していた。落ち着いた快活な男は座っていて、テーブルの自分の[直接閲覧用]図書を前に両肘をついていた。それは立派な古いルター主義の古写本、ドイツの規範的な詞華集（賛美歌本、彼の妻の結婚の証）それにアルント⁽¹⁰⁾の『純粋キリスト教』であった。この[直接閲覧]図書からこの老人は受難や行為のときの果汁や力を、我々都会人がその豪華な図書や巡回図書館から搾り取るよりも多く搾り取っていた。この老父親は古写本や詞華集の中の多くの箇所を多分ダシエ夫

⁽¹¹⁾ 人 がアリストファネスの雲を読んだほど、つまり二百回ほど多分読んでいたに違いない
— もっともそれは単に自分の雲を追い払うため、 — というのは若干の破れた頁に白い紙が張り付けられているのを見つけたからで、その紙の上には一人の孫がちぎれた角の印刷文字をインクできれいに写し取っていたのである。この男は読書する時間があつた、家を息子に譲った後は孫という仲間達と肥松を冬の明かりのために燃やし、収穫のために藁縄を作ることしかなかったからである。時に必要に応じてこの仲間達をちょっとたたき出さなければならなかった。

彼は火災防止視察の到来に驚かなかった。「火傷をした子は火を恐れる」（と彼は言った）
— 「我々はすでに一度災難に遭っている — 息子が万事きちんとしていると思う、殿方 — しかし神の御加護がなければ、何にもならないものだ」そして彼は張り付けられたドアの火事避けの呪文の方を見た、これには更に私は風避け、土砂崩れ避け、水難避けの呪文を打ち付けたいところであつた。神に対するこうした信頼を知って私のような男ははなはだうれしく思った。私はちょうど棚には一冊の本もなく、せいぜい貨幣棚に『貨幣の聖⁽¹²⁾書』しか見られない世俗の紳士、賢者で一杯の凍った都会から来たばかりであつた。

審判官は何も見いだせなかった。これには記録係が面白くなかつた。彼は屋根裏部屋に登って、肥松の燃えかすの炭を探し出そうと提案した。レルヒはけがれない良心を有し、意地悪な良心を察している者のように微笑んだ。階段で私は、私の前に行くハルスが褐色の指を右ポケットに入れ、すすけた状態でポケットから出すのを見た。私は屋根裏部屋ではいつも彼の背後にいた — 我々は何も見いださなかった — 彼はまた手を突っ込んだ — 暗い角のところで、彼は手をこっそり出して、 — 一つの炭を紛れ込ませようとした — しかし私は背後でそれを奪い取り、十五分ほど火災違反を探して成果が上がないようにし、最後に[ラテン語で]こう吐き出した。「悪漢よ、何故、我らのレルヒを怒らすのか。おまえの炭をすべて取り出せ、悪魔の炭運搬人よ、私も頭にきているぞ」
— 彼は何も言えなかった、ラテン語は彼の本領ではなかつた。 —

我々は後少しばかり残って、老人の言葉に耳を傾けた、老人は青春の享樂を称えたが、老年の不自由をかこつことはなかつた。それから我々は共感的遠足を終わりにした。私は藁屋根の下では苦しみや喜びはより良く保たれていると再び察した、ちょうど藁屋根は石造りの屋根よりも物理的意味で冬はより温かくて、夏はより涼しいようなものである。

暗くなってラインホルトの日は終わって行くので、審判官は、記録するのを止めることにして、惨めな天候の中、家路についた。

しかし翌日私は名親のフィックスラインに司書としての学生財産のカタログを完成させるよう頼んだ。かくて学者達にカタログへの期待を抱かせることにする。私は水の中を馬で行くとき、ハルスの、他人の不幸を喜ぶ割符、つまり黒い板を落下させた。偶然だったか、故意だったか分からない。 — 帰路の間ずっとこう考えた、より高い存在にはフーケルムの個人図書についての綿その真面目な記述はひょっとしたら、真面目な男にとって、子供っぽい図書、ヴッツ風な⁽¹³⁾図書についての記述がそう見えるように、はなはだ卑小な滑稽なものに見えるかもしれない、と。同様にこのような存在は、家でその名誉のためにお祖父さんのベンチと呼ばれている老レルヒの暖炉ベンチと、ルソーやシェークスピアにちなんで呼ばれている路地の間にほとんど相違を見いだせないであろうと思う。

*1 アルドリシウス⁽⁵⁾の『鑑定学、あるいは原稿から人間を推測する技』

一月十三日 ヒラリウス新報

高貴な生活を目指すハフテルドルンの牧歌

(マチュー・フォン・シュロイネス⁽¹⁾氏執筆)

音楽の才のある子供達や詩的な百姓は存在するが、しかし多くはない。それは自然の常ならぬ空想の花である。このような花なのが聖リューネの奇蹟の百姓ハフテルドルンである。乏しい読書ながら — それは詩的散文家モーザー⁽²⁾やゲスナー⁽³⁾、エーベルト⁽⁴⁾を越えるものではないが — それにもっとそれ以上に乏しい食事ながら、彼はしばしば夜、畑仕事の後、カレンダーの間紙から取った一枚の紙に散文の牧歌を仕上げるのである、この牧歌はラムラー⁽⁵⁾が存命ならば、韻文化できるであろうものである。私はその中から四十五編を読んだ。私はその中の一編を — 最良のでも最低のでもないが — 紹介して、宮廷の目と手を彼に向けさせることにする、彼は家畜の疫病以来借金しか有しないからである。詩神の馬の騎乗者は競走馬のイギリス人騎乗者のように空腹に耐えて、かくて減量し、それ故速くなるようにする。すでに古代人の許でも翼ある神々はフォスによればただ奉仕するだけの神々であった。

抜粋した牧歌はまさに宮廷そのものに関係している。即ちハフテルドルンは重い鋤の刃や、馬小屋、打穀のから竿、褐色の収穫の背中を、詩人達がはなはだ称えるアルカディアの要素とは決して見なせなかった。そして一人の青白い柔らかな宮廷レディーが、燕麦を刈り取ったり、積み込んだりしているハフテルドルンを宮廷の窓から眺めて、絵画的な仕事と田舎風な — 休息に心からさわやかになり、何と褐色の農夫がかくて偉大な詩人達や風景画家達の美しい絵画に近付いていることか気付くたびに、この褐色の農夫はむしろ色白い侍従でありたいと願うのであった。それ故彼は自分の牧歌では牧人の生活と黄金時代を単に都市生活や宮廷生活の中で捉えているのである。一つの錯誤であるが、作品の内容そのものを損なうことは少ない。

彼を訪問しようと思う宮廷レディー達に前もって言うておくが、この歌い手は外見的には(他の者達が倫理的にそうであるように)いくらか、ローマ人の食卓上のトロイの豚に似ている。これは内部に料理を色々と詰め込まれていて、その最後には丸焼きの — 小夜啼鳥を有するのであるが、しかし外見は、申し上げたように、一匹の豚のままなのである。

マチュー v.S.

*

ミュージズよ、麦藁笛に一つの穴を開けて、町の男について吹くとよい。 — かしこに宮廷の人々が散策している、満ち足りたアルカディアの人々が、そして彼らは微笑んでいる。仕事もさし迫っていないし、空腹も、戦争もさし迫っていない。農夫は酔うと、ユダが一口食べたときと同じで、悪魔が騒ぐが、宮廷人はむつまじく長い食卓につき、従順に食べる。宮廷人の使う刀は、空気銃の撃鉄や薬池がそうであるように、単に飾りである。誰も他人から抜きんでようとはせず、舗石のように、その上に足を踏み入れる侯爵のため

にただ等しく平らでありたいと思う — これら第一等の人間達は平等である。今は何と彼らは協同して働き、落ちた扇子があれば床から拾い上げることだろう。 — 何と諍いもなく他人の意見に同調することだろう。何と彼らは人間を愛し、その肖像をいつも有することか、彫像として、あるいは半身像として、あるいは胸に胸像として有することか。

ただ彼らの従者、尻尾の従僕のみが、楽園から追放された者達に近くて、少しばかり粗野かもしれない、大根の端のみが猛烈に辛くて、魚の尾のみが大抵尖った角を有するようなものである。

何という永遠に微笑む休息か。日傘の絹の棕櫚の葉の下、そして美しく描かれた暖炉の衝立の横、彼らは四季の移ろいを知らない。最初の両親同様これらの最初の子供達は決して働かない。そして広くて深い仕事の籠は彼らの仕事の小籠からははるかに遠く離れている。困窮や空腹、喉の渇きに苦しめられることはなく、いつも享受しながら未開人のように日中も夜中も長く休み、座っていて、時間を知らない。ほおじろ[*1]のように彼らは照明された夜を過ごしていて、常に何かを摂取している。 — 戦争の大砲や人生の突風を彼らは快樂の中でほとんど聞かない、大雷鳥がつかうとき、銃声を聞かないようなものである。

これらの牧人は、粗い、風のある、埃っぽい、雪の降る自然の中で、自らの詩作する人生を過ごすことはなく、絨毯の許で花咲いているか、[写真用]暗箱の中で覗かれる美しい自然の中で過ごす。粗野な現実の自然から逃れるために彼らは見本料理や絵画の穏やかな自然を眺める。本物の卵を飲み尽くす鶏が、その石膏の卵を残すようなものである。小さな絹製の花、蠟製のあるいは描かれた樹が、彼らにとっては外部のものすべてを代弁している。閉じ込められた花鶏^{あとり}にとって短い縦が外部を代弁するようなものである。そして絞殺された者のように日中の多彩な色彩の後、夜の暗い色彩が生ずるとすれば、彼らは朝方まで起きていて、星空を楽しんだり、昇る太陽を楽しんだりして、それから静かに眠りに陥る。

罪の — ないアルカディア人の許では金は見られない。聖人の僧侶のように彼らは金を携帯せず、戯れに単に染められた象牙をかけて勝負するだけである。

そして牧人の女性達には毎晩羞恥の赤い花大根[夜堇]と無垢の白い花大根が開花する。百合は胸に描かれており、背中ではない⁽⁶⁾。それから牧人の世界全体が愛する。牧人の女性達の許では宝石がきらめき、牧人達は明るい宝石の後を追う。夜、昆虫の雌はほの白く光って雄を誘うようなものである。

この無垢と歓喜は、宮廷の男性達や女性達の牧人世界から消えることはなく、成長して行って欲しい。

*1 ほおじろはいつも角燈で照らされて、いつも食べるようにされる。

一月十四日 フェーリクス新報

懸賞問題と予告⁽¹⁾

ペスティッツのアカデミーは懸賞問題の最良の答えに対して、つまりアカデミーが来年

課すべき最有益な懸賞問題は何かという問いの答えに対して、自らの諸問題の一つに対して答えるならば、通常の報酬、即ち二等賞に対する二等賞を設定する。

ある古典的作品の予告

夙に私は自分に言ってきた。「読者はすでに、最初の全紙をほとんど多くの名前のないまま供給している作品なのに、その作品を予約し支援してきた。専門的に予約者達のために記述されていて、予約者達の名前のみを含むそういう作品が歓迎され、必要なのではあるまいか。読者だって著者同様に自分の洗礼名、姓が印刷され後世に残るのを懂れていないか」。 — さてそこで私はそのような作品を供しようとして申し出、それ故ここに予約の道を進むことにする。その道の強さは予約者達の強さにかかっている。それは絶えず継承され得よう。そのタイトルはこうである。予約者達の完全な目録に基づく予約者達の完全な目録。それは古典的なものと呼んでいいだろう、単にその中の文体、正書法、すべてが正しいであろうからばかりでなく、またおそらく誰もが読むであろうからである。少なくとも人々は、誰もが目を通す本を古典の中に数えることを、天才がしばしば単に古典と称する本を古典の中に数えることよりも好む。ゼムラー⁽²⁾によると規範的本は靈感による本を意味するのではなく、最初の教会で公に朗読された本を意味するようなものである。

一月十五日 マウルス新報

売却され得る新しい諸都市についての予告

ラウズスという名前のまことに立派な市民建築家は今ニュルンベルクで全く時代遅れの状態にある。 — ドイツ人の機械工のありふれたドイツ的運命である。この男はかつて一年間ポチョムキン⁽¹⁾の許で木製の動産の家の供給をしてきた。これらの家はモスクワの市場で売られたものである。そして彼は長いことロンドンで諸病院を作る大工の許で客となっていたが、この諸病院というのは旅行ピアノのように折り重ねて、アメリカへ運送されるものである。十七年前から彼は今やニュルンベルクに住んでいて、諸都市全体を作り上げているが、しかし子供のために小さな玩具を作る多くの轆轤師よりも名前が知られずに暮らしている。彼はそれらの諸都市を材木で作るが、その材木には周知の石の硬皮が張り付けられる。そしてこの諸病院は上述の諸病院のように密に積み上げられる。しかしまだこの造形家はわずかな都市しか売り上げていない。 — 二、三の首都は例外で、これは何人かのフランケン地方の貴族が自分達の荘園が壊された後、引っ越すために求めたのである。 — ニュルンベルクでは帝国都市や他の都市という彼の広い商品倉庫のためには区画や物置が足りない。そのため立派なラウズスは駝鳥の卵ほどの大きさの売れないダイヤモンドを有する教授のように困窮している。今やニュルンベルクの参事官は彼の小屋・精錬所[ヒュッテ・ヒュッテ][*1]、つまり彼の建築物の造船所さえも藁箒の下で競売にし、彼の村落を売り払おうとしている。

しかしそれらの町を必要とし、支払うことのできる侯爵がまだいる限り、ラウズスのような人はそんなひどいことにならないと期待している。ただ彼の品はまだ少しの人にしか知られていない。中でも彼の仕上げたものは — 若干、ただ食指を動かして貰うために紹介したいが — 彼の都市工房の中では、二つの工場都市 — 一つのハンザ都市 —

十五の帝国都市でこれらはユダヤ人路地やフッガー長屋が付いていたり付いていなかったりする。一 城塞なしでも譲る一つの首都 一 それに小さな敷設都市である。モーペルテューイ⁽²⁾の推奨したラテン語の町に彼は現在取りかかっている。彼は可愛い発端都市(フルートの発端[歌口]のようなもの)を有している。この都市を侯爵なら、自分が都市という紋章記、叙爵書を与えた村に接続させることができ、かくて国会の開催できる村が町の張り出し、郊外ということになる。一 今しがた鉱泉が発見されたということになったら、この芸人は湯治場を提供することだろう。

支払いの代わりにラウズスは古い町を受け入れる、古い町は英国庭町で廃墟やゴシック建築として相変わらず求められるからである。

私は必ずしもラウズスの弁護をしているのではない。ただ彼の時代のために一言述べたい。ガリア[フランス]の戦争⁽³⁾同様にガリアの平和のせいで多くの都市が犠牲になったのであれば、新マインツや新ケルン、新シュトラースブルクといったものを造ってくれるような機械工が我々には必要ではないか。一 帝国はとくと考えられたし。一

S - s

*1 砒素精錬所、溶鉱炉等の言い方参照。

一月十六日 マルツェルス新報

男達と女達への諷刺

我々は女性を敬いながら個々の女性を虐待する。そのようにガリア[フランス]の民全体は帝王の権利を有しながら、個々人は臣下であり、白い黒人である。一 しかしその秘密の理由はこうである。女性達は最後のローマの皇帝達のように自らを神々にさせていながら、自らは神々を信じていないのである。彼女達は神聖化された無神論者である。

一月十七日 アントン新報

女性達だけへの諷刺

彼女達はその詩的芸術的光線を放つのは大抵蛍がそのささやかな光を放つ期間のようなものである。蛍は卵を生むと、光を収める。水生植物は果実を付けると、また大地に沈む。

一月十八日 プリスカ新報

男性達だけへの諷刺

イタリアでは何か素敵なのは、それを称える人があったら、その人に呈上される。この慣習を男性達は女性達の場合に前提としている。その引き渡しは法的に行われる。そなたが(悪魔にと諺は言うが、私は男にという)つまり男に髪を一本掴まれたら、そなたは永遠に悪魔[男]のものだ、と。というのはすでに述べたように、引き渡しは象徴の引き渡しであるからである。譲渡されたささいなものは残りを意味しており、削り取られた木端と共に家が譲られる。一 所有譲渡と呼ばれる。一 土壌と共に地所が譲られる。一

土地譲渡と我々は呼ぶ。 — いや単なるウィンクや指示が長期の手の引き渡しというわけである。

一月十九日 ブランディネン新報

人間達に対する諷刺

人間は徳に対することイギリス人が金に対するのと同様である。人間もイギリス人も小さな支出のときは実際現金と徳とで片付ける。しかし大きな支出となるとそれらを代理する紙[証書]である。長編小説や芝居や道徳における魂の我々の執筆紙上、印刷紙上での高貴さを、内面の生来の遺伝的高貴さと取り違えていることを白状したくなかったら、誰も紙上の高貴さにけちを付けてはならない。

一月二十日 ファビアン・ゼバスティアン新報

遊びの物語⁽¹⁾

私の話そうと思う夕べはひょっとしたらニュルンベルクで最も楽しい夕べの一つであったかもしれない。一行は秋の葉のように多彩に混じっていて、同じようにざわめいていた。我々は夕食を燕のようにたた飛び交いながら啄んでばくついた。座ったりカルタ遊びをしたりは目になかった。十三人の子供達が隣室で両親同様悪ふざけをしていた。実にテーブル上に、火で洗礼する洗礼盤が置かれることになった、つまりポンスの天水桶である。そこで炎の舌を有する酒精を浴びた者達によって、何かが企画されなければならなかった。少なくとも私にとって、神経のすべてに炎が回っていながら、そして脳内で孵化してうごめく観念の卵巣を有しながら、硬直して座っていることほど、そして宮廷の食卓の炎の柱につながれて、蛹化した青虫のようにテーブルの下で下半分しか動かせないことほど、大きな嘆きはないのである。それでも私にはベッドに行くこと、そして頭を蟹座のこの夏至と共に沈めることは更によくないことに思われた。

そこで私はこの聖霊降臨祭の集まりに人気の遊び、つまり遊びの物語を提案した。周知のように、これは一人が物語を語り始めて（聞き手はその人の周りに座る）、絶えず中断しては次々に一個の見知らぬ、当てはまらない、角の多い石を貰い受けて、その石を物語の中に取り入れなければならず、そのため物語はしばしば全く歪んでしまうというものである。この遊びの採決がなされた。

筆者は満場一致で短編小説家に選ばれるという栄を賜った。「有り難い」（と私は言った）「私はすでにしばしば、それにもっとひどい聞き手の前で自らカエサル、サルスティウス、ラパン⁽²⁾、ギボン⁽³⁾、ヴォルテール⁽⁴⁾、ボシュエ⁽⁵⁾、モイゼル⁽⁶⁾、シーラハ⁽⁶⁾、それにシュミット⁽⁷⁾と称したものです」。私は心の中で物語のための広大な平野を設定し、若干の策略を準備して、かくて私の物語を攪乱しようとしている他人の策略の前に物語の平野を差し出した。聞き手は私と私の妻の他には、ジーベンケースとその妻 — V. ケーケリッツ氏 — 救貧院説教師のシュティーフェル — ベルリンのユダヤ人女性、彼女の繊細な、精神的、燃え上がる、感傷的な心は硫酸ナフタのようなもので、野外で遠くに落下しなければならないときには、完全に揮発してしまい、それでグラスとスプーンしか残らな

いのであった — それにハンブルクの商人、彼は余り語らなかったが、大いに食べ、思索していた — うんざりした表情の痘痕のある財務記録係 — ドレスデン出身の一人の画家 — 最近この画家のモデルとなったおしゃべりな女優 — 彼女の難聴の夫、これは七番目の恋人である — 教養のある下級砲兵士官 — 三人の可愛い、背丈の低い、しかし幾らか平凡な娘達、この娘達は三人の[季節と秩序の]女神⁽⁸⁾達という名前で通用しそうである — ぼんやりした一人のレディー — 薄くて白い髪の毛、青い目の、青色の服の騎士団騎士殿、この方は無限に退屈さらされていて、今晚は三人の女神達、七番目の恋人の妻、ぼんやりしたレディーを恋し尽くして、今やユダヤ人女性の許に心が留まっていた — 決して帽子を持ち上げなかったライプツィヒの痩せた学生 — ラシュタットの暗号解読者 — それに子供達である。

私は集会に対し、円陣よりは方形に座って欲しいと頼んだ後、方形に沿ってあちこち歩くことの許可を願い出た。さもないと遊びの習慣に従って一人の聞き手の前に立ち留まらざるを得なくなると、何も思いつかずに全く混乱してしまいかねないからである。

そしてようやく私は始めた。

一月二十一日 アグネス新報

遊びの物語

フラクセンフィンゲンの侯爵夫人が国よりも別の状態に、つまり身籠もった状態になり、そしてこの国が彼女の無事の分娩をすべての教会の祈りの中で念じ上げたとき、宮廷は — どういう事態になるか分からなかったので、 — ある別の宮廷と（今私はそれをシェーラウの宮廷であったと言えるが）一人の夫と一人の妻を通じて胎児の子供のために（というのは性別は生まれた後に分かるから）差し当たり交渉することを政治的なことと見なしました、単にこの政治的天体で衝[敵対]よりは合朔あるいはせめて三分の一対座にもっていくためでありました。貴方らが皆存じていますように、この点でフラクセンフィンゲン側ははなはだ時が足らず、同時にまた進んでいました。こんなことを言うと（わけもなく思われることだろう）私は抜け目ないやつだ、と。殊に私はしばしば冗談でこう言ってきたのですから、成年認知は皇子の場合十八歳でも得られるし、一歳でも得られる、従って胎児の場合少なくとも思春期には得られる。いや国王は死ぬことはないのであるから、従ってまず生まれる必要もなく、すでに前もって存在しているのである。イギリスの帝国法で付与されている生来の成年認知は取り急ぎ計算にすら入れない、と。

さて今肝要なことは何でしょうか。下級砲兵士官殿。「口をつぐむことだ」（と彼は答えた）。その通りです。しかし私が馬車を用意させることを両国に隠しておく[口をつぐむ]ことは難しかったので、私の退去の口実を見つけなければならなかったのです。私は自ら口実を見つけました。誰もが知っているように、乞食のラブル⁽¹⁾の神化のために四万七千ターラー[*1]集めることは、ドイツの作家、例えばレッシング⁽²⁾の神化のためにそれほどのグロッシュェン貨幣を集めるよりも容易なことです — 作家であって勝利を収めたときよりも、イギリスの雄鶏や競走馬で勝利を収めたとき、もっと公的な榮譽を（記念像となって）受けます。しかし国民の作家が一つの霊廟、一つの彫像、あるいはその類を強いて取ろうとすると、生前にそれを求めて出立し、自らドイツ中を旅して回り、さながら

乞食袋に靈廟のための石を集めなければなりません。「面と向かっては」(と私は考えました)「誰もが汝の彫像のために寄与すべき二、三ポンドの砂石を拒めないだろう」。

—

かくて私は同時に自らと侯爵の代理大使としてフラクセンフィンゲンの狐門から出発しました。しかし公使館書記殿、何と私が追いついて見た最初のものは —

「ラシュタットだ」とこの悪漢は言った。

しかしそれは四分の一エレ以上ではありません。残りの町は小屋に覆われて、また葉飾りや、魔笛の家畜、雷や雨の仕掛け、つまり巡業中の俳優達はその馬車に積み込むもので覆われていました。私は一座の荷物に追いつき、その一座の監督はまさにここに座っておられるコープ氏であったのですが、この一座は平和の祭典のためにラシュタットを舞台にした作品を上演しようとしていて、すでにこの町を、その四分の一エレが馬車の梯子枠の上から覗いていたけれども、書き割り画家の手で積み込んでいました。君達の旅は余りにゆっくりだ、しかし単に私にとっての話だ、と私は考えました。カール大帝は劍の柄頭で押印しました。しかしそうすると単に平和の反対を捺印するだけで、劍の先で初めて肝心の印を押すことになります。

私の御者が森で止められたとき、私は幾らか嬉しく思いました、お嬢さん(ユダヤ人女性)誰が止めたかという、 —

「ユダヤ人」

それでこのユダヤ人がくれたのは — お嬢さん(最初の季節の女神)

「とても沢山のサフラン」(何と平凡な考えか)でも何故でしょう。そのユダヤ人はドイツ人とは違ってまさに趣味のいい厚い作品をはなはだ読み込んでいて、つまり私の作品をよく読んでいて、薄い作品は好まず — それも単に貸本屋から自分のグロッシェン貨幣と引き換えに十三全紙よりは三十六全紙を、軽い本よりも重い本をつまみ出すのを好んだからというわけです。それ故知人としての私に催眠作用のある薬味を託したのです。彼はきっと当てこするつもりはなかったと思います。単に、安息の燭台が準備される前に、私の夜営所に届けることができなただけです。夜営所の朝方の献堂式にその薬味は考えられていました。私は喜んで素朴な焼き菓子のためのこの色染めの薬草を馬車の脇ポケットに収めました。しかし私は頭をポケットにもたせかけて、自分とサフランのことを忘れて — このキッチンの阿片の許で眠りました。

目覚めたとき、何と驚いたことでしょう、学士殿、何と —

「何と皆既日食だったのです」(このライブツィヒ人は全体に銜学的というよりは臆病兔であったが、臆病兔を通じて銜学者を演じていた。例えば捕鳥者が兔の皮でまことに器用にフクロウの頭を作って、それで沢山捕まえるようなものである)。

そう、最初はそうです — ただお聞きください。小夜啼鳥はその歌曲を飛び回りながら空にさえずっていました、大規模な日食のときのようにです — 日中の花は閉じていて、夜の花が開いていました — 冷たく霧が降っていました — 私の夜営所には安息の燭台がはめられていました — その時突然月が輝いて、私は多分自分と学士殿が見えなくなっていて、太陽は食ではなかった、少なくとも太陽は月によってではなく、地球によって見えなくなっていたのだと察知したのです。要するに単なる夜だったのです、学士殿。 — その時突然私は叫んだのです — 何と叫んだでしょうか、騎士殿。

「生まれ、ラスムス[御者]」（こう言って彼は自分がデンマークに通じ、滞在したことがあることを示そうとした、デンマークでは御者をラスムスと言う）。

「ラスムス、生まれ、そして行くがいい、私は後から歩いて行く」と私は言いました、それは何の生まれの女性を見たからでしょうか、ナターリエ。

「高貴な生まれの — いや盲目の女性」と彼女はすばやく考えた。

その通り。盲目のアグネスが明るい小川のほとりに座っていました。その晩のことは忘れません。小川は遠く、湾曲した谷の中にまでほの白く輝いていました。星々と幻月が盲人の足許できらきら輝く波の中に揺れていました。両岸には茂みが小夜啼鳥のための花冠で飾られた農舎として続いていました。私が近寄ったとき、 — — ヘルミーネお考えは。

— 「盲女に一人の女友達が月光の中トムソン⁽³⁾の『四季』から読んで聞かせていたのをあなたは耳にしたの」 —

まことに愛らしく、しかし若干小声で朗読していました。私の声で、盲人は耳で顔が分かるので、見えないながらも容易にまた私と分かって、私を彼女の女友達に紹介しました、彼女は早速その長いヴェールを引き上げました。私はこの女性とすでに一度会っています、どこだか貴方は御存じに違いありません、救貧院説教師殿。

「ある僧院です」 —

— 皇帝が後に廃止した僧院です。現在のすべての神父の中でミサを最も速く読むことのできる一人の神父[*2]を私が紹介した相手の司教の僧院長を訪問した際に、食堂に行く機会があって、その食堂のすべての太りすぎている尼僧達の中では、尼僧でもなければ、というのはまだ修練女であったからで、太りすぎてもいない女性だけが気に入ったけれども、それがまさにこの盲女の女友達でした。その優しい、青ざめた静かな顔の女性が一人で扁豆で一杯の木製の皿を前に座っていて、禁欲しようとしていた情景を私は忘れることができません。それ以来、それ以前と同様にほとんど私は扁豆に手をつけていません。

我々男性はそのように奇妙なものです。私は一人の美しい女性が余所の男への実らぬ恋のために苦しみ、あえぎ、赤い目で泣いているのを二日間喜んで見ている方を、その女性が私のせいで惨めな[灰の中で焼いた]菓子とか、卑下の服とか責苦の胴着に耐えたり、あるいは三マイルの嫌な歩行に耐えたりしなければならないことよりも好みます。

ヘルミーネ、残りを語って欲しい。残りは私から聞かされているだろう。

「あなたが更に語ったのはただ、アグネスの方がもっとその尼僧よりも陽気で、好んで彼女の不幸に言及したということ、その不幸についてはあなたは触れようとなさらなかった」。 — というのは、いいかい、女達は受難について語るのを好み、男達はそうではないからだ。私どもは人生の長編小説の中ではいつもまず最初に喜びの銅版画と最後の章を求めてめくるものだ。しかし続けて。

「盲目の女性はその見えない目の上に黒いヴェールをかけていましたが、単にその友達を思いやっただけのことでした。彼女はあなたが話すたびにあなたの方をいつも見ましたが、単に声を求めていたのです。あなたは彼女に、彼女は何という自然のイギリス風衣装画家か — あなた自身の言い回しです — あるいはそもそも何と素敵な夕べかと仰っていました。彼女は言いました、自分は快活な一日を他の女性同様に楽しんでいる、と。風はより純粋に、より新鮮に吹いてくるし、小鳥達はより明るくさえずり、小川と葉はより素敵にざわめいて聞こえる — そしてこれらすべてが自分の聞き耳を立てた魂に入ってくる

と、なぜだか知らずに、自分の内奥が喜ぶ、と」。

私のような者は、すでに闇の日中にいても至福を感じている満ち足りた情緒の持ち主を前にして、ぶつつき言う不平をまことに悔い、恥じて遠ざかざるを得なかった、不平ではしばしば二、三の曇天がもたらされる。物理的にも倫理的にもそうだ。 — しかし盲目というものは — 日中のない極の冬であって — 穏やかにし静めるという意味でも夜に似ている。盲人というのは自然という母親によってより深い憩いへと暗く造型された子供だ。雲の上のかなたのモンゴルフィエ⁽⁵⁾氏 軽気球の中の人間のように隠者のような盲人はただ声だけを上で聞き取る。しかし混乱した多彩な現在、低級な、憎まれ、憎む形姿達、傷跡と傷で一杯の形姿達が下のその密な雲の間に見られる。

*1 それだけの額がゴラーニによるとすでに一七九〇年に貯えられていた。しかし十万ターラー必要である。

*2 より高位のカトリックの聖職者はこの点で、プレスティシモ[極めて速く]、つまりすばやさを評価する。これはすべての転換[化体]に必要で、舞台上の転換から手品師の呪文[ホークス・ポークス]、それに「これは私の体である」に至るまで必要で、この最後の言葉にホークス・ポークスは由⁽⁴⁾来するそうである。

一月二十二日 ヴィンツェント新報
遊びの物語

単なる偶然であるが、先の新報がまさにアグネスから名をとっていたのは予言であるかのように私には嬉しい。アグネスは私の魂の前にその目の面会格子の背後でいとも敬虔に乙女らしく立っていた。私はそのことに後になってようやく気付いた。

私は今や俳優のコープを前にして質問し、夜営所のツェーンアッカーを前にして語る段取りになっていた。さて彼は本当にあの晩馬車にラシュタットを積んで後からやって来た。彼は難聴であったし — そのせいで彼は大抵単にわめき立てる暴君を相手に、あるいは七人目の恋人として単に言葉数の多くない、ほとんど遠慮のない侍女を相手に共演していて、 — それに遊びの全体に関して余り耳に入ってきていなかったのも、遊びを中止させないよう次の質問では声を弱めて、そして最後の単語だけしっかり強めた。

それで、と私は言った、私はその晩どんな具合でありましたか、ツェーンアッカーでは。

「ツェーンアッカー」 — (そう彼は頷いて言った)「そこはよく覚えておる、私がコープという名である限りはな。そこでいやはやすんでのところ打ち殺されるところであった」。ここで彼はすべての遊戯の詩の技法に反して、報告し始めた、 — 自分が月光の中、近くの小森の角の樹の所をロマンチックな気分であちこち散策しようと思ったこと — 一本の笛を拾い上げて — そしていつものように習慣で(彼も平土間もいつもそれ[笛、口笛]で一座に合図を送るので)何度かそれを吹いたこと — するとその後(それは悪漢の笛で)次第に多くの背の高い、粗野な、残忍な目つきの者達を呼び寄せてしまったこと(彼らは彼を劇団員とは別の一味の者と思ってしまったからで)、そして大胆に。背後から射撃されかねなかったのも、ずらかろうとしたこと等であった。

私はすぐに財務記録係に向き直って尋ねた。私が台所で見つけたものはというと、

「ろば[木馬、刑具]だ」 —

それは夕食をもっとすみやかに煮立てられるよう解体されたもので、立派な乾燥した木製の⁽¹⁾もので、シェーラウから運ばれてきていて、シェーラウでは罰を受けるために軍人がその上に犠牲の羊として、曲馬の馬として乗らなければならなかったものです。シェーラウが第五場の使節として私にこの木馬をさながら馱馬の継ぎ換えとして添えてくれたのは余り嬉しいことではなかったのです。

私は — この盗賊の巣窟はすべての政治的新聞を人相書故に保有していたので、本屋が学術新聞を有するようなもので — またシェーラウの新聞を見て元気になろうとしたところ、私はその紛失物の欄で、 — 何を見たかという、コープ夫人 —

「一つのハート」 —

それは第三位の宮廷女官のもので、至純の混ざり気のない — ダイヤモンド製でした。正直な発見者にはある補償が約束されていました。

私はその所有者をすでに復活祭の市以来存じ上げていて、彼女がそのハートを購入したとき、アウエルバッハの館に居合わせました。彼女は今年を重ねて、何度その中年のときに肉のハートを失ったかもはや覚えておれないほどなのです。その肉のハートはまさにただ不実の発見者のみがまた返してくれました。ただまだ彼女がはっきりと覚えているのは多くの若いときの無垢な心で、それを得意に思っています。すべての年寄達が間近な出来事は忘れてしまうのに、ただ早期の子供の頃の出来事だけは思い出すようなものです。

善良な女官のハートが、ビール・ジョッキのように、旅館の脱靴器のようにチェーンにつながっていたら、失われることはなかったことでしょう。そのとき不思議なことに出会ったのは — どうした状態のものでしょうか、(ぼんやりしている) 御夫人。 —

「両腕を伸ばしていた、でも誰」

一人の女優です、でも演じているのではなかったのです。私と演じていたわけでは決してない。彼女はこの交差点の宿場の家中を行き来していました、役目からではなく、両腕の下の二つの瘤のせいで両腕を持ち上げていたのです。

一晩中私は私の霊廟に関する夢に振り回されました。それはバビロンの塔を見えなくするもので、すでに完成していました、しかしどこでしょう — 画家殿。 —

「支那だ」 —

そのようにスウェーデンの素敵な別荘は呼ばれていまして、そこではどの床の絨毯も唐草模様も支那の模刻で、フランスでは石盤にインドの植物の模刻があるようなものです。霊廟と不肖私がスウェーデンに移っているのは心理学的にまもなく説明されます。というのは支那王国では存命中に素敵なニス⁽²⁾の棺を仕上げていないことほど大きな恥辱はないからです。しかし私は碑銘を探しました。

まだ夜が明けないうちに私はかなり急いで旅立ちました、お嬢さん(二番目の季節の女神に) —

— 「パイロイトとアンスパッハへね」

そこから、あなた(三番目の季節の女神に) —

— 「ブランデンブルクへ」(善良な女性達は必ずしも地理に明るくなく、かの町や侯爵領をさながらブランデンブルクの間近の召使家屋、分農場、農舎と見なしていた)。 —

つまりスウェーデンの支那から出発したわけです。しかし勿論夢の中の旅行から覚めて、まだ[南中国の]泥棒島に休んでいたとき、寝過ごしたことで御者と共に腹を立てて、かっとした勢いで御者に言いました。 — プラスト殿（ハンブルクの商人） —

「おい、ヒンペルハンペル」 —

つまりラテン語で、ジーベンケース殿

「鱈科[大西洋鱈]、背びれが三基あり、尾びれはほぼ三角、また尻びれの鱭条に突起あり」[*1] —

この短い、しかし力強い語りかけは御者と馬車にはなほだ効果があつて、私は二度と鱈科等々言う必要はなく、すでに五日後には — 私がどこに着いたか、v.ケーケリッツ殿貴方は御存じです。 —

— 「こんちくしょうのこんこんちき」 —

そう何人かの者はシェーラウ庭園のことを言っていました。私は結婚と霊廟について交渉するために当地に着いたのです。 — しかし皆さん、すべての方に質問しました。しかしまだ私の像は立っておらず、侯爵の胎児は結婚していません。 —

遊びの仲間は喜んで同意してくれたが、私はまた最初から始める、つまり問うて回ることになった。これは外交団にとってすでにありふれたことである。

*1 カブリアウあるいは干し鱈[あほんだら]の博物学的定義。

(*Morrhua Gade tripterygie cirrate, cauda subaequali, radio primo anali spinoso*)

一月二十三日 エメレンツィウス新報

遊びの物語の続き

シェーラウ庭園は、皆さん（と私は続けた）、完全な公園で、英国風庭園あるいは中国風庭園です。イギリス人や中国人がその宮殿や神殿に人為的荒地を周りに置くように、シェーラウ庭園では至る所人為的砂漠が別荘を引き立てています。果樹はシェーラウ庭園でも先の二つの庭園でも好まれません。中国風庭園ではまばらな半ば焼け落ちた家々が、シェーラウ庭園では沢山作られていました。

郊外でほとんど馬の下に私が目にしたのは — 何でしょうか、お嬢さん（季節の女神ディーケ）。

「坩堝にがちょうの脂を持った少年」。

それを少年はひっくり返してしまったのです。早速驚いたことに一台の貸し馬車から十一人の繕われた服の人々が、大人も子供も降りてきて、浜辺[収穫物]権利を活用し、その贈り物[脂]で靴や長靴に塗ったのです。靴を履いていなかった二人は馬車に残って、うらやましく十一人を眺めていました。坩堝の実直な拾得者、給費生はまた上がってきて座りました。彼らは、丸一日むなしく市門の前で馬と並んで止まっていた御者によって一つの保険会社にまとめられ、馬の入場許可代⁽¹⁾を払い、自分達自身のユダヤ人通門料を — それはライブツィヒの場合と同様に一人につきグロッシェンを越えないのであるけれども — 負担することになりました。

私の使節参上は三台の馬車で行われた。一 前には分配や商業の当事者達の車。一 後にはラシュタットやラシュタット人の車。一 真ん中は私自身がそうであるところの外交団の車です。

私は、救貧院説教師殿、旅館に泊まったのでしょうか。一

「勿論」一 どの旅館でしょうか。一 「まあ『世界の七不思議亭』

ひょっとしたらこの看板の横で私の頭ほどに機嫌のいい頭はなかったことでしょう。というのは下の広場を横切って行く学生達の数を数えていたからで、さながら私の凱旋車を造り仕上げてくれるであろう車大工や車匠のギルドに見えたのでした。こういう次第でした。つまり私は五日間の旅の途中別人の名前で私の霊廟をあちこちで話題にしたのでした

一 私は死んだと請け合い。一 長いこと誰も名が上がらずに寄付金を集めることがなくて、バーゼドー⁽²⁾が最後の男であろうと述べ。一 多分また集めることは近々ないだろうと推定しました。しかし誰もひっかからず、戦争があると誰もが言って、万事高くつくようになって、いずれにせよ故人は趣味の悪い男だと言いました。一 「パラゴニーアの皇子なら」[*1]と明敏な頭脳の者が言いました、「その彫像をより容易に建てることができよう」。まことに霊廟の粘土のモデルの費用とか単なる銅版画の費用を集めるより、大審院税、教会上納金を集める方が私には楽であろう。

私は立腹して言いました、それなら何かの方がもっともつとましではないかと、ライブツィヒの方、何でしょう。

「背中に瘤のある方がました」

一 ちょうどパリのカンカンボワ通り[*2]で、ただ自分の背中の瘤とその上での記述で生計を立てていたあの男のようなもので、彼は背中の瘤を写字台、書棚兼用机としてミシシッピー商店の株式仲買人に差し出したのです、人々が怒って契約書に署名しようとするからです。まことに執筆する人間は、自分の上で執筆させる人間ほどにも実入りがあることはしばしば少なく、得るものも少ないのです。大きな瘤は大きな頭よりも利益が多いのです。

でもシェーラウでは私は、申しましたように、生き返りました。というのはそこには大学、つまりこの批評家達の世襲本拠地、養蜂場、雀蜂の巣があったからです。能弁な大学へは書籍商達は本の文書の上級審用を準備します。それはフェンシングの教師がいつでも同時にフェンシング術や剣術を教えるように、精神的師匠も同時に議論術や批評術を教えるからでありましょうか、いやそれとも（こちらがもっとそうらしく見えるが）新入りいじめ⁽⁴⁾は、ミュージズの息子達から父親達に至るまで、路地から。一 印刷紙上に追放されたから、本来その巣であるところに追放されたからでありましょうか。書評家というのは新入りの角を叩き折り、その前に角を出し、遍歴学生の歯を折り、木製の剪毛器で新入りの髭を剃り、新入りをろばと呼び、最初の年は帯刀を許さないしごき屋であります。

さて私がただ『シェーラウ学術新聞』の五人の執政官の一人の許にでかけて。一 私の名前を永遠化するために名前を名乗らずに。一 広告代と同時に嘘の広告を学術新聞用に渡して、非凡なる敬称略云々の J. P. は三十一日逝去されたとしたとき、実際私はほとんど無料で学術新聞紙上に立派な霊廟を、あるいは豪華寝台を得たのです。それは新聞自身の続く限り続くものです。

しかし執政官達の許へ出掛ける件のもたらした混乱した展開をお聞きください。かなり

暗くて、点火されていないランタンが日光からはね返すわずかな明かりは役立ちそうになかったのです。私の前をグレーの礼服の人間が歩いていました、彼は両腕に大きな鬘の箱を運んでいて、頭には三色の記章をつけていました。彼の後を忍んでいたのは脚の長い黒っぽい走行虫野郎で、そいつは前方の者の帽子をつかみ取ると稲妻のように路地を下っていきました。「この野郎、悪漢め — 帽子をよこせ — 何ということだ、旦那ちょっとの間私の箱を持っていてください、それにそのステッキを拝借したい、やつを懲らしめてやる」、とそのグレーの男は言いました。私はすばやく対応して、彼は走っていきました。私はしばらく大きな箱を抱えていました。すべては静まりかえっていました。とうとう私は注意深く保管品を持って影の長い路地を下って行きました。何も聞こえず見えません。ちよつとぎよつとしたのですが、やっとな箱は自ら少しばかり動き、重心がずれることに気付きました。私は箱を持って路地から月光で一杯の角地に来て、すでに前祝いの如くそこに若干空気穴があることに気付きました。私はそれを地面に置くと、両脚の間に挟んで、その覆いを開けました — 中では鬘の代わりに仕上がった少年が四肢を伸ばして、私は最初蠟人形と思いたくなりました。...すると赤いやつがずり落ちてきて、ふざけました。それはその心臓部分ではないとしても、蠟製ではなかったのです。

その藍色の目を請うようにして、差し込む月光に逆向きにしている甲殻類をそのまま残していたら、私は鉄の心臓の持ち主であったに相違ありません。私はそのレグルス⁽⁵⁾の樽を — レグルスは外部にありましたが — 再び閉じて、その雛を帰路養子にして、影の歩道を通して、その帰り荷を「世界の七不思議亭」に運びました。勿論両腕にロレットの小家⁽⁶⁾とその幼子イエスを有する内密の大使の帰還は少しも輝かしいものではありません。 — 私は確かにその小家あるいは飼い葉桶[揺り籠]を運ぶ天使ではありましたが、しかし相変わらず独身の奴、ヨーゼフで、その者の接ぎ枝は人目を引くのでした。

後に私は私の保管する特別の収穫物を考えることがよくあります。「今や汝は得た」(と私は言いました) — 「もはや学術新聞も霊廟も何も必要ない」。 — 二度とそのことを言うことはなかったのです。そもそもドイツの作家で、生長しながら、ヴルカンの戦車の像のように進み、至る所それ自身に自分の名を持ち運んでくれる戦車の像ほどに立派な像を墓の隣に有する者がいるのでしょうか。それ故詩人や侯爵はいつの時代でも自ら造型家としてそのような立像を、そのようなピグマリオンの像を手ずから置いて、少なくとも自分の形姿を、自分の名前とは言えなくても、伝えようとしたのではないのでしょうか。その少年は実子というよりは養子として私の四分節の名前に関与することになって、私と同じ名を署名します。今や私はその少年に私の流儀を教え込んでいます。将来私の模倣が出現したら、出版者はそれを J.P.F.R.の作品と称してよろしいのです。その小さな拾い子がそれを書いたのですから。

翌日私は侯爵の許に参上しました。不思議なことに、いいですか、奥様(ぼんやりした女性に)私は気付いたのです、侯爵が有しているのはただ —

「頬髭だけ」

それも片方だけなのです。というのは、別のほど打金膜で固着していなかったもう一方を侯爵はまだ手にしていたからです。私は私の宮廷の友好的思いを伝えました。侯爵の返事は当然ながら、お嬢さん(イレネ)

— 「自分の得るであろうもので満足である」 —

ー それは確かに自明のことでしたが、しかし「七不思議亭」の主人には嬉しくなくて、私に七倍高く請求したのです。私としてはこの七倍賭けにはフィック⁽⁷⁾氏の『旅行者へのポケット版』が教えている策を弄して、(フィックの助言に従って)接待に満足している振りをして、彼のいる所で第三者に対して、自分はまた立ち寄るつもりだとうわべだけ言ってみたのです。何の役にも立たなかった。主人はアダム、つまりユダヤ人の先祖に由来していて、ドイツ語を話す人でした。ドイツ語はどの言語もそうですが、ヘブライ語の娘に当たります。それ故誰もがその流儀で一種のユダヤ教に帰依しており、穀物[品位ある]ユダヤ人、あるいは本のユダヤ人、あるいは砂糖[秘蔵]のユダヤ人としてユダヤ人ぶっています。

宮殿では四日目に、つまり三日目の晩に、ある特別な災難に遭いました。私が目を覚ましたとき、ケーケリッツ殿、私が窓際に見たのは ー

「ある女性だ」。 ー

しかし前段を話しておかなくてはなりません。私は明かりを持たずに部屋から出ました。そしてこっそりと戸錠を触って戻りました ー 七番目が自分の部屋だと私は言いました。 ー しかし日中残念ながら描かれただけの戸錠を一つ多く数えていまして、そんなわけで八番目の中へ入ってしまいました。突然温もりの消えた氷のベッドのことをどう考えていいのかよく分からない状態でした。しかし寝入って、月光が差し込んできたときようやく目覚めました。羽根飾りをつけたレディーが、v.ケーケリッツ氏の言われたように、窓際にしっかりと立っていました。私は言葉を発し、あれこれ試みましたが ー 彼女は黙ってこわばったままでした ー 私はとうとう五回ベッドから誓って言いました、このまま続くのであれば、礼儀に反して遠慮なく立ち上がり、自分の前にいるのは誰か調べてみることにしたい、と。 ー 私はその通りにして ー 人形に近付き(それはレディーであったから)してその近くで踏んだのは ー お嬢さん(オイノーミアに)

ー 「ガラスよ」 ー

裸足で ー そう見えたのですが ー しかしガラスではなくて、コープ夫人。

「またダイヤモンドのハートね」。

まさにそうです。 ー それは先端を上にしていました。この輝かしい、内部の心[ハート]の南京錠を、この光る球を新聞に掲載させた三番目の女官の寝室に私は寝ていたのであろうと合点が行き始めました。

私はがさごそと私の本当の七番目の部屋に戻りました。心[ハート]のせいで傷付いたわけではありませんが、確かに硬いハートには傷付いていました。勿論私の夢は八番目の部屋の中をさまよいました。 ー 翌朝は、どのようにしてかは分かりませんが、世間が皆そのことを知っていて、このニュースは天から神与の食物[マナ]のように宮廷に落ちてきて、二十四時間宮廷の餌食になりました。このマナはイスラエル人に気にいるような具合に宮廷の人々の気に入って、まさに各人の好みに合っていて、ある者には生蜜のように、他の者には[酒の]香気のように、三番目の者には焼いたしぎの臓物のように、四番目の者にはあぎ[悪魔の糞]のような味がしました。宮廷には宮廷新聞がありさえすればいいのです。すると宮廷は満足いたします。

別のニュース、自然発生物を有する私の化粧箱に関しては、七不思議亭の主人は第八の不思議として客人に紹介しました。

食卓では私は例の部屋とハートの所有者からテーブルの角で離れていましたが、私が話の糸口のために借りたのは、貴方（騎士殿）。

「扇だ」

その上には幾つかの流行の扇同様に、小さな遠隔通信がありました。私はじっと見て、じっと見てくれるように頼み、長く遠隔通信を操作して、造作なく自分は彼女のハートを有すると教えました。彼女は化粧の縁のところか幾らか赤くなりました。翌朝の午前私はポケットのハートを彼女に供しました。驚いたことに彼女はそれをまた私に返しました。彼女の言うには自分は一つなくしたけれども、それとは違うということで、そして私を奇妙な、疲れた、優しい、熱い目で見つめていました。これには驚きました。 — 私は早速、この拾得物の形と場所に対する、私の喉元から出かかっていた一切の遠回しの両義的暗示を差し控えて、彼女が私の最初の暗示に対して、愛は拷問だと答えたとき、その比喻を法学的に展開して行きました。「宮廷の愛は勿論拷問に似ています — 両方とも単に一時間続くだけで — 両方とも目隠しされます — 人々は縛り付けられます — 両方とも観客を排除します — 同じ時[夜]に行われます — 第三段階は炎です。未成年の者、老人、虚弱者は拷問されません — 口頭あるいは現実の拷問脅迫の見せかけが現実に残りて行われます云々」。 —

— しかしハートを彼女に掛けさせることはできなかったのです。 — 「それでは」（と私は誓って言いました）「あの健気な J.P.F.R.に与えよう」、つまり小さな奴です。その後しばらくして、女官の一人が私にヒントを与えました、彼女達は甲虫のように柔らかく生まれてきて、野外の大地の中で早速硬化するものです。「箱の中に先祖の肖像を博愛的に受け入れた私の行いがレディーの心を捉え、勇気づけたのです。従ってその虫に対する扶養料の一つとして税を払い、寄付しているのです」。 — そうだろうか、と私は考えました、断じて否です。

*1 彼のグロテスクな彫像のモザイクは ⁽³⁾ Brydone によって知られている。

*2 ヒュームの『雑録』。第三巻。

一月二十四日 ティモテウス新報

遊びの物語の終わり

しかし、公使館書記官殿、陛下は私の申し出に何と答えられたか、とすでに私は尋ねました。

（私はこの暗号解読者はまたいたずらをすると前もって知っていた）

「 — フランス人が町から去らないうちは、もっと快適なことは余り考えられない」。

—

これらの悪魔どもは勿論近くにおいて、陛下が去るよりも早くやって来たのでした。当時奴らはポンペイウスのように即座に自らの軍を作り出すばかりでなく、余所の軍を大地に沈めたのです。記章の羽根はこの熟したアザミの毬の翼であって、その種子は大気中を遠くまで飛びました。包囲のせいで宮廷は多くの不愉快な時間を過ごすことになりました。侍

従長は爆弾が教会の屋根に激しく跳ね返ることになると、初めて喜んで宮殿の教会へ行ったのですが、それは祈るためよりは呪うためだったのです。宮廷の女性や政府は高いドーム状の宮殿地下室に赴いて、私も地下室の階段を下りて行きました。私がそこで何をしたか、今正直に言えることでしょう、ヘルミーネ。 —

「あなたはまた上がってきて、宿の主人の子供を連れて来たわ」。 —

地下室に帰るとき、私が一緒に運搬したのは、画家殿。

「放たれた虎」

更に運んだのは、 — 記録係殿。 —

「それに一頭の熊」 —

それに、下級砲兵士官殿。 —

「それに一頭の鱈」（この偉大な自然観察者は鱈は獰猛な陸棲動物とっていたのである）。

七名が、つまり銃装弾係、礼拝堂の従僕、宮廷財務書記、四人の給仕人が、この動物園、単に剥製であったのですが、これをやっとの思いで運びました。一個の爆弾が、博物館の博物標本の棚の近くで爆発し、早速古い侯爵家の花嫁衣装や戴冠服を駄目にしてしまい、外国製の剥製を救出できて安堵していたのです。

皆様に告白しなければなりません、結局宮廷は地下室を私の思っていた以上に味わうことになりました。極めて酸っぱい酒瓶も最後のグラスはまあまあのもになって飲めるものです、一方喜びの杯は一種古代ドイツの大杯に似ていて、これを飲み干すと、跳ね上がる熱狂者が生ずるものです。人々は前もって地下室に博物標本検査官を送っていました。この人はすべての地下室の蜘蛛⁽¹⁾を食べたのです、本人にとっては真の固形ブイヨン、小夜啼鳥の餌でした。発汗浴、これで野蛮人がその客人をもてなすばかりでなく、宮廷ももてなすのですが、つまり礼儀作法のことですが、このためには場所や控えの間が欠けていました。宮廷の女性陣がこの狐の巣の回廊の奥に控えており、我々男性陣は手前の方でした。一日中蠟燭を点さなければならず、その明かりのせいで、自分はようやく夕方七時に起きたという快適な錯覚が生ずることになりました。 — 誰もが好きなだけワインを取り盗むことができました。すべての慣習に反して貯蔵室管理人だけがそうできなかったのです。 — 私どもにとってこの地下世界を楽土で一杯の神話的世界へと標示し、育てることになった枢要な収穫は、しばしば恐怖の余り私どもの毛が逆立ったということでありまして、あたかもギャリック⁽²⁾がハムレットの役を演じて、幽霊に敬礼したとき、髪の毛を高く逆立てるときに用いた頭のとっぺんの人工的機械を隠し持っていたかのような按配でした。かくてすべての世界は一気に官庁の地獄から解放されました。この地獄は洗礼を受けなかった子供達の地獄のようなもので、これはスコラ学者達によるとすべての苦痛と歓喜が全く欠如しているのです。と申しますのは、誰もが不安を抱えていたからで、不安があると芝居に関心が集まり、忌々しい退屈が消えてしまったからです。侯爵夫人ですら包囲の間はヒステリーが止まりました。これはいつも三つの気分の針金で編み込まれているもので、つまり女性的、侯爵夫人的、ヒステリーの気分からなる一種の鞭なのです。

最も私どもを地下室で陽気にさせたのは、コープ氏で — 彼はまた後を追って来ていました。貴方は何を（と私はこの耳の遠い芸術愛好家の耳に叫んだ）シェーラウの包囲の間演じましたか。

「耳の遠いフランス人大使だ」。 —

何の作品かと聞いているのです。

「平和だ」。 —

彼の一座はちょうど暗記したばかりだったので、かなり上手に演じました。宮廷は十三回繰り返し上演させました。外部のコーラス付きの戦争悲劇を忘れるためです。その際更に私どもの有していたのは、お嬢さん（ユダヤ人女性に）。 —

「最上の眺めね」。 —

下の縦坑でそれを有しました。すべての木々、外国の木々さえもありましたが、木陰道に、海、俳優達が書き割りとして馬車に積んでいた一切を私どもは地下室で立てて、上下に据え付けて、宮廷がかつて食卓に見本料理として載せたのより大きなポータブルの自然を満喫しました。月光を私どもは極地の人間のように一日中有しました、つまりイタリア風透視画として有しました。

さて結局 — 今や三度目の質問ですが — 私の主君の申し出に陛下は何と仰せられましたか、プラスト殿。

「よろしい、と」。 —

しかしそれは勿論フランス人達のもっとひどい申し出を受けた後だったのです。彼らは幼い皇子と皇女を人質として要請しました。シモニデス⁽³⁾は言っています、ただ神のみが形而上学を理解している、と — と申しますのは、フランス人とかイタリア人は悪魔のエコー以上のものではないのですから。まさにそれ故私の役目は私にとって荷が重かったのです。幸い侯爵はフランス人の申し出の後すぐに私のフラクセンフィンゲンの申し出に応じてくださいました。侯爵が人質のペアを胎児[結婚の神]と婚約させたのは、単にペアが — 危機に陥っていたからであり、いつもは平和の刀が結婚の際に大使によって分離のために[妃との]間に置かれたものなのに、今や戦争の刀が結合のために置かれたと邪推するのは誠意よりも世間知を示すものでありましょう。

幸いフランス人達を妨害したのは何だったでしょうか — うまく言ってください、ジーベンケース。 —

「君の夜営所の悪漢の一味だ」、

まさにその一味で、監督殿が笛を吹いたとき、絞め殺そうとしたあの一味です。これらの悪魔は — 国が禿鷹の頭のように禿げ上がっており、まさに禿鷹をむしり取る他むしり取る相手がいなかったので — 霧の朝、遠く離れた前哨の者達を撲殺して、その代わりに務めたのです。哨兵達は離れていたため彼らの表情や服で味方とってしまったからです。かくて攻囲兵の間で空騒ぎが生じました。しかしジーベンケース、私が思うに、彼らが去ったのは単に、雨蛙同様に空所ではしがみついておれないからです。真空を恐れ⁽⁴⁾て動きが生ずる、とスコラ学者は言っています。即ち兵士は片付いた土地を好んで去るので、兵士の運動はしばしば蠕動運動です。 — — しかしかくて私が終わりとしたのは、ナターリエ —

「取り決めと遊び」。

そうすることにしましょう。

J — n P — 1

一月二十五日 パウロの回心新報

片頭痛によるパウルの回心

どこかの男が、最も惨めな生き物が有し、何人かの者にあつては年金生活者や偉いさんの場合のように全面的に発展している結構な怠惰力が衰弱しないままかびてしまうとするならば、これは残念ながら私の場合に生じていることである。私は朝ほとんど頭を枕から上げられなかった。あたかも私は宇宙に控えの間や、競売の広間、ペムブルック⁽¹⁾の陳列室、奔流となって流れ込むそうした部屋を差しだしている按配である。およそ理念とか思念と考えられるものが、神経液上を帆走してきて、下船して、(通常理念の門閥主義に従って)その母方の親戚とか父方の親戚、同名の者達、壁やドアを接している者達をその下位の対極者達と共に連れてきて — かくて数分後には見回してみると、全世界に近いものが脳内には出現しているのである — すべての選帝侯集成、侯爵集成 — 聖なる団体それに聖なる願望⁽²⁾ — 学説彙纂、住所録、モイゼルの人名録からのタイトル — 兆もの言語からの兆もの単語を有する大辞典 — 証明事項と八十のうろさい異端についてのドームを有するエピファニウス⁽³⁾ — 十八世紀のわにの結論とか他の結論 — 基本道德者の名刺 — 基本不道德者 — 教皇大使職の争点を伴った教皇大使 — 悪漢、例えばニッケル・リスト — 祝祭学士 — 私が笑える思いつき — 幾つかの法律上の恩典 — メディチ家のヴィーナスにすら見られない立派な尻 — ほとんどまともに生きていない跳ねる点[有精卵の心臓] — 本来は死んでいる瀕死の剣闘士 — 悪魔に、黒人女性、悪魔の祖母、あるいは乙女エウロペそれに読者と私自身、それにこうした一切についての意識が出現しているのである。 — —

大宇宙が小宇宙に乗っかってきて、小宇宙を圧迫しているのである。 — それから更に全くもって加わるのは、私がしなければならないことで、無数の手紙 — 漫遊 — 訪問 — 身だしなみ — 抜粋 — ハウバー⁽⁵⁾の『魔術文庫』(これを利用して私は大きな明かりとなるものを書きたい)、それに言うまでもなくまだ挙げていないが、他の人同様に私が目を通さなければならない有名な大学図書館や他の文庫がある。

このような状況のとき正気に戻り、このような梱や周辺の諸世界を越えて行くことは、最良の頭脳にも期待できないことであろう。これらの諸世界をすべて掃き出す何ものかを有しなければ — つまり頭痛を有しなければの話である。

頭痛を有すれば別様に行く。

一度頭痛を有すれば、私は執筆せず、読書せず(そうできないので)、あちこち歩き回り、半日自分の自我と生涯の周りを歩き、この静かな天の下、深く内面の静かな海の中を覗き込み、その緑の野と、夙に沈んだ昔の船に至る。決意よりはその理由が新たにされ、確固と生き生きとしたものにされ、かくてその理由によって自分が行動の奔流の中、若々しい力強さで運ばれるようにする。というのは自分がまだそれに従って行動している最良の原則というものは、疲れて見栄えがしなくなる傾向があつて、時々新たに生まれる必要があるからである。

それ故私はかの永遠に前へ前へと突き進んでいく男達、大臣、将軍、商人、つまり自分達の倫理的カレンダーに静かなキリスト受難の日、灰の水曜日、安息の日を印付ける必要がなくて、心の中で安息日を守らない者達を遺憾に思うのである。急速な奔流は最も不純なものであつて、より静かに流れるようになって澄んでくる。どの人間も、生涯には多く

の天狼星[シリウス]が支配しているので、絶えず一日のシリウス日[土用]の休暇を自らに認めるべきであろう。大きな病が、飽食の昨日の後の長患いの疲労のように生じて、我々はこのような灰の水曜日の必要性を感じ、時にこのような日が全生涯を整理し、支配する。大抵の者はこの水曜日を、静かな別荘や灰色の髪を得るであろう時にまで押しやってしまう。しかし何のために憩のベンチをまず休息の大いなる深い地に隣接して置こうとするのか。むしろ途中で一つベンチが欲しいものである。

魂がより自由に、すべての魂がより活発に、人生がより多面的に解放されて感ずるのは、長い仕事の、例えば四つ折り判の完結した後の日、新たな仕事をまた始めることのない日を措いてない。 — ひょっとしたらまさに女性達のより静かな生活が彼女達のより純粋な倫理的形を造るのかもしれない。すべての規則的な結晶はただ平穏さの中で形成されるようなものである。

片頭痛に関して更に私の気に入っている点は、それが男性の心の胼胝[角質]に長く作用して、その胼胝を剥ぎ取り、心をむき出しにして、心が何に対しても軟弱になるようにする点である。私は、片頭痛が私同様にすべての男性に対して長く冷たい硝石の針をその北側から搔き落とすものか知りたい。しかし、本来、それに生理学的にみて、病気というものはいつものそうするものであろう。病気というものは常に軟化させ感動させる衰弱性のものの一つであるからである。部屋をあちこち歩くとき、何という甘美な時か — 明かりの幾人かの天使が共に飛び — そして心が何の傷もなくますます高く舞い上がり、胸がはなはだ名状しがたい感動に満ちて、自分が泣ける対象を有していたら嬉しいだろうと思うとき、何という至福か — 結局何か類似のものを見いだして、心ゆくまで堪能することになる。 — 子供らしい思い出の何という誕生祝いが行われることか。 — 今や空想は何という別荘やアルプスの牧人の小屋をその離れた山々の頂に環状に築いてみせることか。 — 何という高貴な人々や好意的な人々が我々の下に送られてきて、かの離宮から下ってくるのか、あるいは現在の間近な庭園から来ることか。 — 妹を有するならば、妹に必要なことをより小声で要求し、頼む。妻を有するならば、妻を有することに神に感謝する。ピアノの単なる和音が今やハイドンの⁽⁶⁾天地創造となる。そして何か古いもの、素朴なものが、例えば「私はただイスメーネだけを愛した⁽⁷⁾」が私の指にかかると、私は止めることをしない。

カント主義者はこの軟弱さを肉体的なものとして誹謗しないで欲しい。軟弱さが救出する対象の硬化も肉体的なものだから。 — しかしこの甘美な神与の食物[マナ]は同時になお薬でもある。自らの軽野戦病院(救急車)とならずに、この軟化を長く持ち運べる男がいるであろうか。この男にとっては一切が、温かい浴槽から上がる者のように、生ぬるい日常の気温が氷のように思われるに違いないのであるし、そしてそのときには人間に対して愛し耐えるように教えているものしか、人間をより素敵にするものしか、好ましくないはずなのである。五年前のこのような片頭痛の午後に、その時私は突然六千年前からの人間の無数の錯誤や異端が — 様々な大陸やその支部の島々において — 様々な民族の許で — 様々な宗教の許で(一人のフランス人はそれらの宗教の中から一八四の宗教を受け入れ、それぞれの宗教がまた一八四の異説を有している筈で) — エピファニウスの言う八〇の異端の許で — 更に様々な学問の許で(私は哲学者達について驚いた)思い浮かんだのであるが、ただそれらをひっくるめて概算することができたのではないか。そ

してこの微積分をしながら、突然（それ以前は頭にきていたが）倫理的快癒期の病人となつてこう言いながら穏やかに腰を下ろしたとき、頭痛を有していたのではなかったか。つまり「かっかしている者よ、汝は錯誤の光景のこの軍を見ながら、文芸新聞やフォークトランドで見られる十六や十七の錯誤のことで危急太鼓を打ち始める気なのか、考え直した方がいい」と。

全面的病的融解は人間に何ももたらさないと仮定しても、しかし二人、伝記作者と夫は別である。伝記作者達は頭痛の中、自身の胸の奥で、より柔らかな心、つまり女性の心を研究する。かくて彼らの言うには、女性の心はいつも、より柔らかい、女性の全生涯が一つの衰弱[*1]であるからで、かくて女性は数百回涙の準備をしているが、ただ涙の対象に欠けている、と彼らは言う。 — 同じ考察がエジプト人の夫にも見られる。エジプト人の夫は更に付け加えるであろう。夫達がしばしば乱暴に扱う女達の軟弱さは従って我知らずのものであって、すでに健康な日々にも見られる。その上病的な軟弱さが加わるとなると、女達は雑種の小夜啼鳥に似てきて、不思議な思いがする、この鳥は単なる部屋の煙で倒れるもので、この鳥はこっそりと籐竿でとらえないとくちばしから血を流すのであり、一体どうしてつかんだらいいのか分からない鳥である、と。 —

この種の立派な男達は — 私もこの部類に入るが — こうなると二つの要素を見せる磁器となる、一つは確固たる、溶解しない陶土の部分で、もう一方は柔らかい、火の中で溶ける — 珪石[*2]の部分である。

J - n P - 1

*1 それ故ヒステリーの発作の時とかその後、分娩の後、等に無限の軟弱さが見られる。

*2 頭飾りと頭痛は二つの壁を隔てた隣人である。それ故私は、快復後にどうして永久に頭痛とおさらばしたか、両方を有する女性達に教えたい。私は半年間絶えず単にみつがしわの煎剤だけを温かいまま、冷たいまま、思いついたときに、他の治療を交えずに飲んだ。片頭痛を有し、軽減したいと思っている人々に発作時に勧めたいと思っているのは、温かさ — 食事 — 休息か長い運動 — 肉食 — すべての強壯的な苦い飲み物で、勧めたくないのは、酸っぱいワイン — 頭と足の部分の冷え — 反ブラウ⁽⁸⁾ン主義者の忌々しい下剤や溶剤 — それに私の本である。

一月二十六日 ポリカルプス新報
フィヒテ哲学あるいはライブゲーバー哲学の鍵

一月二十七日 クリゾストムス新報
鍵の続き
一月二十八日 カルル新報
鍵の続き

一月二十九日 ヴレーリウス新報
鍵の続き

一月三十日 アーデルグンデン新報
鍵の終わり[*1]

*1 一般の求めに応じて『鍵』は別刷りにしなければならなかった。哲学者にあつては胎児と同じく目の方が心[臓]よりも早く現れ熟すので、そして哲学者は、目よりは心に配慮する詩学とは余り付き合いたがらないので、哲学者は『巨人』やすべての詩的な莢果を控えること、ちょっと昔の哲学者が植物の莢果を控えたようなものである以上、『鍵』を独自に提供しなければ、哲学者が『鍵』の滋養分の多い肉汁の食事に取りかかることはないであろうと人々は思うであろう。

一月三十一日 ヴィルギー⁽¹⁾ル新報
『巨人』への序言

私は序言を最後に書く、最初に序言を読まれないようにするためである。私は世間の人々を二時間三十三分三十六秒[*1]私の仕事に拘束したかしないうちに、世間の人々をまた解放することにする。私の方はそれだけの年月を世間の人々に尽くしたのであるが。ただ三言述べること、つまり七つの最後の言葉⁽²⁾を述べることを許して頂きたい。

最初の言葉は、読者が子供達のように食卓では噛みつきたくなかったパンを後から食さなければならなくなつたという喜びである。つまり諷刺のことである。同様の技で私は読者を将来私の鞭打ちのドームに追い込むことにしたい。というのは今やこのような付録なしには一冊の本も現れないであろうからである。 — 付録を先に出して作品が後という場合は別であるが。 — この尾を短く切られた彗星の世界ではすべてがその付録を有するのではないか。『一般ドイツ文庫⁽³⁾』は最も高価な付録を、カレンダーは最も安い付録を — ロベスピエールはその尻尾⁽⁴⁾の一味を — 一七六九年の彗星は四千万マイルの尾を — 範疇は論理学の四範疇を — カントはフィヒテ達を有するのではないか。

第二の最後の言葉は、読者に対する依頼で、私が『巨人』の提供を弱々しく始めたか始めないうちに、読者は『巨人』に対して、二、三百の結論を出して欲しくなく、第二十卷⁽⁵⁾の完結を待つて欲しいということである。この作品は月のように判断されたいのである、月は赤褐色に膨れて、霧を帯びて昇ってくるもので、月が上の昇った軌道上で澄んで、白く、明るく見えるためには、ただ夜中の半分の時間の猶予を必要とするのである。近頃の長編小説はすぐに第一巻で最大の声望を得やすい、翌朝のことを、つまり第二巻のことを考えていず、現在を享受しているからである。つまり一本のプランというよりは — かくてプランの休止にあたるエピソードも消えてしまっているが — 小説を様々につなぐ一万ものプランを有するからである。かくて作品は、製本屋からまず受け取ったとき、立派な効果を上げ、一つのまとまりを有している。ちょうど民衆には行列蛆は十二エレの長

さで回転してくるように見えるけれども、それは単なるガガンボの幼虫の一インチの高さの行列に他ならないようなものである。これに対して私の酔の中の滴虫類は小さな一個体であるが、しかし巨大な蛇に育つのである。 — しかしこれも同様に不思議なことである。

三番目の言葉。どの叙事詩にも、一つの寓話以上に道徳が一杯に詰まった総巻が揃っている。しかしこれは現実の話と異ならない、現実の話は道徳の娘ではなく母親であって、この母親を相手に誰もが好みの娘をもうけることができる。私は無限の者が記す諸伝記の中に、この諸伝記の主人公が、つまり我々哀れな阿呆が出版へと送りつける諸伝記の中に見いだすよりも多くの詩文を、多くの詩的正義と動機付けを見いだす。神々しい伝記はその上ささやかな芸術作品であるばかりでなく、また無限の偉大なる芸術作品の一部分でもある。我々は皆我々の軌道にしっかりと結び付けられていて、かくて人は九八八乗の自分の人生の外サイクロイドの一日のカーブから、人類が静かな無限の者の周りで描く楕円を計算できることになる。別の言葉で言えば、人は（大胆な言い方に聞こえるだろうが）自分の午前中の出来事から新聞での次の出来事を大いに推論できるはずである。

四番目の最後の言葉。相変わらずイェナ⁽⁷⁾、ヴェーニゲン・イェナ、イェナ・プリースニッツ、それに周辺の土地で次の命題が弁護されている。つまり詩人たる者は蚊のように透明な紗の羽根で飛ばなければならず、極楽鳥の厚化粧の翼であってはならない、と。読者は、比喩なしで続けるならば、飛ぶことや運ぶことすらできない。ミューズの馬[ペガソス]は荷馬ではなく、ましてや詩的翼はかの天使の翼⁽⁸⁾のように目を有してはならず、せいぜい孔雀の尾の目が許されるだけである。 — それ故私は最近ではモーツァルトの『魔笛』で立派な答えを得ている、つまり次のような質問である。「しかし皆さん、オペラではどうでしょうか。 — オペラでは1)すべての楽器の天才的協同作業が、それからすべての俳優の同様に偉大な作業が、2)彼らの視覚的、そして3)聴覚的物真似、それから4)詩的作品そのもの、そして最後に5)華美な飾りが一度に把握され享受されなければならないのではないのでしょうか。五つの柱式の上の一つの建物が君達には繁茂する葉形装飾の一つの柱式よりも容易でありましょう。一度に五人の賢い乙女達の方が一人の愚かな乙女よりも君達をより賢くするでありましょう。 — そうではありませんか、イェナのロマン主義者達よ。しかしこの厳しい寒さの中⁽⁹⁾無事家に帰って書いて欲しい」。

—

売り言葉に買い言葉で、かくて第五の言葉、それに

第六の言葉が生じているので、かくて両言葉と共に請け合って言うが、今日は私の最後の、第七の言葉を話すことになり、私にとっては十字架を発案する日ではなく、十字架を除去することになるのである。今日はヴィルギールの日ではないか、そして第一巻と最初にして最後の冬の月が終わる日ではないか。 — というのは私にとって明日は春のさきがけとなり、つまり二月一日で、聖燭節の前日だからである。すでに何人かの凍えるドイツ人達が私と共に如月に春のアウローラを、少なくとも日が長くなっていくことで見いだしたに違いない。冷たいエーテルの中にすでに最初の春の歌が、つまり最初の羽ばたく雲雀が見られないか。今やミツサザイが、日差しの下、滴る黒い枝の上で、滑るように踊って、明るい光線で温かく金色になって、その冬のソロをさえぎっていないか。 — 移っていく太陽はまた私の執筆する本を黄金の小口に製本し、隣人は蜜蜂の巣箱の引き戸を開

けて、軽い蜜蜂が狭く鬱陶しい牢獄から元気よく、花ではなく陽光で透かし彫りにされている新鮮な緑野に飛び出して、野外に威勢良く這うようにしていないか。 — ヴィルギールよ、汝の聖名祝日を今日祝うが、汝の⁽¹⁰⁾墓では今では人々は単に偽りの月桂樹の枝を折り取るだけである、しかし四季の諸々の塚の上では永遠に新鮮な枝が萌え出てくる。

—

この今日という日、私は長い諷刺的な喧嘩と氷の月の後、再び時代と和解すべきであろう。私の最後の第七の言葉は「平和」ということにする、ちょうど七つの言葉を私の書斎机よりもひどい木材の許で発した男の人も語ったように。

「時代との和平」としばしば人は自らの心に呼びかけるべきであろう。我々は苦しい日があっても我々の人生の希望を見失わないように、苦難の世紀であっても、我々が遠い未来を描くときの希望を失うべきではないだろう。時代のピラミッドはエジプトのそのように上の方が尖っているように見える、狭いか、鋭いか、あるいは完成しているように見える。しかし登ってみると、頂上は広々とした平原となる。

一つの目標が神々しく見えるときには、その軌道もまた神々しかつたに違いない。軌道は目標であったし、目標は軌道となるからである。我々は、無限の者よ、我々が思っているよりも、皆、我々は御身の間近にいるのであろう — というのは御身だけがそのことを知っているのだから。 — 我々は御身によって生きているだけでなく、御身の中でも生きている。ちょうど我々の地球が、単に遠くの方で太陽光の周りを動いているように見えるけれども、太陽の大気圏の中[*2]を動いているようなものである。 —

*1 人は一秒間に六十文字読み通せて、それ故普通の八つ折り判は十六秒で、また一アルファベート[24 全紙]⁽⁶⁾は一時間と四十二分二十四秒で読み通せると計算される。私の本は1.5アルファベートに当たると仮定した。

*2 黄道光は地球が太陽の大気圏の中に入っていることを証明している。

第一小巻の終わり

第二小巻

序言

喜劇的付録のほとんど全体が海路ではなく空路の旅行者の話で占められている。荒々しいこの人間本人が話を記して、我々にその気球船から見た地球や天体の章道や光行差の表を大胆に率直に告げているので、私は分別のある読者よりは分別のない読者の方に、時折気球船員ジャンノッツォの意見と私自身の意見の間に区別を設けるようお願いしたい。この性急な衝動的ジャンノッツォは、神権政治の欠けた散文的世紀の代わりに、そして人生の代わりにドイツ語に翻訳され — お互いの嘘と奸計の普段に見られる横行にまことに激怒して — すべての党派間の変動する中途半端な賛美と、単に隠された結び紐にすぎない弛緩した同盟に大いに腹を立てて — すべての無気力に反吐を感じて — すべての粗野な力を崇拜しながら、両手を自由のエーテルの方へ差しだして — この人間は、深い牢獄の空気と路地の空気に飽いて山上の空気へと押しやられ、余りに劣等な人間を見たというよりは余りに多くの人間を見てしまって、大群の中に打ちかからざるを得なくなって、かくてしばしば全く見当違いのことになっている。しかし彼の腕は私の腕とは区別されるべきである。フォントネル⁽¹⁾が古代人はその神々に正義なしにただ強さのみを与えたと述べているように、私は今や新たなその崇拜者達にしばしば同じ思いを抱いている。力の後では力の制御ほどに気高いものはない。内部の人間は、プラトンの詩作によれば外面の人間がそうであるように男と女に分けられる。その完成は力と穏やかさとの再統合にある。愛は強さを与え、強さは愛を与える、しかし愛が最も豊かに与える。

にもかかわらず私は大気の荒々しいこの船員にたっぷりと言いたいことを言わせた、作者はいつも主人公同様に考えるという散文的な仮定にはお構いなしだった。この話が単に作り話[詩]であつたら、これに私は口を挿んではならなかつたであろう。詩というものはまさにより高度な話として単にそうしてのみ個人を人間性の範疇に高めて、かくて最上することなく個人の前で人間性を展開させ、人間性のすべての諸力を個人の前で分離して、弱体化することなく戯れさせることになる。しかしまさしくこの航行は[大気からの]作り話ではなく、実際に大気の中で生じたのであって、私は中に隠されている。

ひょっとして私が正当化されることにもっと難しいであろうと思われることは — これは蠅にとってクヴァシア[苦い薬]がそうであるようにすべて力強いものが毒と思われるような党派の人々を前にしてそう思われるのではなく、何の詩心も哲学心もない精神の人間が忌まわしくてならないジャンノッツォの友人達を前にしてそう思われることであるが — それはつまり私が、ジャンノッツォが単に N.N. (ニコライ派の者達)⁽³⁾と呼んでいるこうした忌まわしい者達への攻撃を大胆にも消し去ったことで、かくて勿論無邪気に、ひょっとして両方の党派の人々の歡心を買えるのではないかと期待している次第である。しかしながら、『一般ドイツ文庫』に対する強烈な攻撃、例えばこう彼は言っているのであるが、つまり文庫はすべての詩的精神に対する残忍さにもかかわらず、単に然るべき憎しみ故にホメロスの頭を額の上に置いているが、それは家畜を屠殺できる家々がニュルンベルクではまさにもその故に家畜の絵を玄関の上に描いているようなものであると言っているのであるが、隠さずに告白すると、立派な、由緒ある、全く大抵のジャーナルや周期的雑誌の精神でまとめられた作品に対するこうした攻撃を外してしまった責任はいつでも私が負う覚悟でいるのである。

十分であろう。 — 気球船航行の前に私自身がしばらくドイツの書評制度についての

ささやかな論文と共に現れる。これが書評勅書と見なされると嬉しいことであろう。これは何の役にも立たないであろう — というのは風評の女神の批判的トランペットは、それがどんなにぴかぴかに磨かれて、縋を付けられても、生来の調子をやめるわけに行かないからである — それに党派の者達の役に立たないであろう — というのは批評家に対する戦いは普通青虫や鼠に対する訴訟や行進同様効き目がないからである。 — しかしすべての現今の制度に対する私の反吐を弱々しく表現することになろう、敵も同様に見込みもなく自分達の反吐を表明しているようなものである。情けないのは、目下二つの敵に対する勢力に分断されて、個別の個人の精神の代わりにただ団体全体が行動している点である。バイエルンのズボン競争の時のように[*1]、例えばメルケル⁽⁴⁾のような頭脳と一般ドイツ文庫司書とが一緒に単なる一組のペアとなって競争路を進んだら、何と緩慢に真理と詩への競争が行われることになってしまうだろうか。誰もが相手を邪魔する。精神は自由を必要とするが、平等は必要としない。

今序言を述べている筆者についてはしばらく前から思考されるよりはもっと多く言及されている。イエズス会の学校喜劇では学童はしばしばドイツの全地方を演じなければならぬように、何人かの書評家達は、今や紙上に一度に全ドイツの圏を、いやそれどころか後世全体を演じていると思っている。これには腹が立つ。それでも私の友人達は私を叱りつけてこう言うことだろう。このような人々に対しては気位から黙って去らずにそうしていかないことは恥ずかしいことだ、と。しかし私はこう言い逃れる。このように本当の名前を挙げることは諷刺的個別化に的確にかなっており、それに第二版が期待できて、第二版では彼らは消えているであろうから、虚構の名前として売り出し、新たに供出できるのである、と。

そこで天は我々皆に、多くの血が流されると共にはらわたの煮えくりかえる時代に、冷たく穏やかな血を与えて欲しいし、互いに若干の丁寧な態度を教えて欲しいものである。

ベルリンにて 一八〇一年復活祭初日

ジャン・パウル・Fr.リヒター

*1 二人の競争者のうち、それぞれが一本のズボンの片方に収まり、かくて走る。

I

哲学者と詩人についての新たな批判的下級刑罰裁判所宛の招待回状

私は何故この批判的裁判所法をもっと長く印刷機を前にして書記局に隠しておくのか理由が分からない。この法はすでに一年にわたって文芸新聞やゴータ新聞、ライプツィヒ文庫やベルリン文庫、エルランゲンの文芸新聞の最良の美学的同志の間で手から手に渡されていて、将来私の「下級刑罰裁判所」（そのように私は私の新たな研究所を命名したいと思うが）で働きたいと思う人々の名前と共にまた私の許に帰ってきているのである。私の刑罰裁判所と共に特に私は新たなミューズの山の山岳党に侵攻して、彼らの作品の多くを磨きたいと考えていた。ちなみに私はその際編集にしか眼目を置くつもりがなく — 他の編集者同様党派心を抱かないようにするために — その際は儲けにしか関与しないよう敢えて行った。ここにその回状が続く。

第一項

より良い人間は年をとるほどに、あるいはより静かに敬虔になるほどに、一層生来のものを神聖なものに見なす、つまり感覚とか力を神聖なものに見なす。一方多くの者にとっては獲得したものが、熟練や学問が、至る所できらびやかに侵入してくる。獲得したものは、一般的に、またそれを有しない者にも理解されるからであり、生来のものはそうはいかないからである。薄明かりや月光の中では恒星は姿が消えてエーテルの中に退くが、しかし間近の地球のような惑星はいつでもその借用の明かりを売りに出すようなものである。人間というものがもっと沢山いて、人間になるものがもっと少なかった初期の諸民族は無限なもののすべての贈り物に対する、例えば強壮さや美しさや幸運に対するより子供らしいより謙虚なセンスを有していた。それどころかすべての恣意的なものが彼らにとっては神聖なもので、予言であり、靈感であった。それ故子供達のおしゃべりや、狂人達、酩酊者達、夢想者達の夢占いが見られた。

第二項

地球は、地球によって変えられることのない人間によってのみ変えられる。人類はそのすべてのアカデミックな位階を単に、個々の風変わりな精神の支配者の手からのみ拝受してきた。群衆は群衆を育てられない、犬が一匹の犬も調教できないようなものである。百万の水銀の滴による百万の方向はまとまって唯一つの方向とはならない[*1]。しかし唯一人の力強い精神がすべての滴の山腹として、岸边として立ちはだかっている。人類は最古のエジプトのように神々によって支配される。ルターの新教主義 — ライプニッツやフィヒテの観念論 — カントの批判哲学 — ルソーの自然主義等々はさながらただ一人の女王の生誕であって、この女王は千もの性別のない労働人間によって養育され成長させられて、最後に新しい女王が出現し、古い女王と労働人間達とを別れさせる。所謂人気のある有益な作家階級はかのゲーニウス[精霊]達がいなければ、つまり時代を執政官に従って数えるように、ちなんで数えることになるゲーニウス達がいなければ、何も講じられないだろう。しかしこうした有益性のため、ゲーニウスの朝の[新郎の]贈り物は、この贈り物を彼らは結局自分達の持参金と見なすのであるが、再び次の贈り物に対する堰

とされる。

*1 集団生活にもかかわらず諸民族の全体が、つまり中国人、アラブ人、未開人が動物同様に数千年変わらずに同じ位階に止まっている。

第三項

ゲーニウスは単にゲーニウスによって理解される。高貴な性質は単に高貴な性質によって理解される。しかし同時に高貴な性質は高貴でない性質をこの高貴でない性質自身よりも更にはっきりと認識する。単に目の見える者のみが盲人を理解するが、盲人は目の見える者を理解しない。しかしながら天才的な力と天才的なセンスはしばしば不平等な強度の中で共存している、いやこのセンスは力を欠いたまま存在し得る。

第四項

単に哲学と詩だけが天才的楕円の両焦点である。それ以外のものは[*1]博識のサークルである。哲学と詩を裁くのは類似のセンスであり、博識を裁くのは類似の知識である。会話の口頭上の裁判官でさえこの幅の広い境界の区別は見分けている。偉大な言語学者、歴史学者、自然科学者等々は仲間の中でその権威を通じて支配する — 異なる似たような仲間の中ではそうもいかないが。 — しかしながら最も深遠な哲学者といえどもより高次の内面の世界への自らの信仰を述べるに当たって、また最も偉大な詩人といえども、その内面の世界への自らの観照を述べるに当たって、極めて平板な口の者からの異議を遠ざけるわけに行かない。ここでは訓練ではなく生来のセンスが裁判の秤をもたらし、保つからで、誰もがこの秤を有すると思うからである。それ故、近習にとっては英雄は存在しないが、しかし偉大な言語学者、歴史家、地理学者は存在する。いや天才に対してはどんな卑小な頭脳でさえ時に卑小な正しさを有するが、しかし偉大な学者に対しては有しない。

*1 例えば歴史はそれ自体芸術作品とはなり得ない、無限の者それ自身の作品である全体の歴史は別である。歴史の肢体は、芸術作品へと組織されても、建築同様に必要と自由の不純な結合を有しており、歴史的な長編小説は長編小説的歴史とは単に段階が異なるに過ぎない。

第五項

私は批判的研究所について、その協会の諸君、もっと詳しく検証することにする。その判決が最終判決でありたいと思うなら、そしていつでも本の価値について何事かを教え、決定したいと思うならば、そのことが — なされ得る作品ばかりをその裁判所管轄区に引き入れることである。これが可能なのは単に学的作品ばかりであって、これに関しては書評は同時に裁判官の自己書評となるものである。ゲッティンゲンの『学的報知』⁽¹⁾は数学者や旅行記者等々の立派な天国と地獄の裁判官である。しかし何と哀れなあら探しの裁判が詩人について（少なくともその他に）哲学者についてなされていることか。すでに詩

人達の表題が裁判官達からの治外法権を認めている。学者達の公会議はある学的作品についての判断の際、不可謬である。しかし天才的な作品についてはしばしば一人の教皇の方が公会議よりも正しい、例えばドイツにおける全面的学的フランスに敵対するシェークスピアについての判断である。

双子宮における天才的な太陽は単に天才的な目によってのみ捉えられる。――民衆のポリプの肌では薄暗く感得されるのであるけれども。――しかしどのような編集者が天才的な党派の天才的裁判官のためにその事務所で募集の太鼓や連隊旗を有するであろうか。協力者殿、こう述べて反論しないで欲しい、つまり批判的会員はそれぞれが静かに自分をそのような有能な裁判官と見なしており、――とても滑稽なことだが――シラーの言葉、⁽²⁾「卑俗なものから人間はできている」は高貴な自意識を伴いながら棧敷席全体の拍手を受けている、結局卑俗のものはその名の通り卑俗[共通]なのだから、と。というのは各人が天才であると仮定しても、天才は他の何らかの天才にとっての最終審ではないからである。シェークスピアについてのヴォルテールの判断、ラファエロについてのミケランジェロの判断――フィヒテについてのカントの判断――テュンメルとハインゼについてのシラーの判断⁽³⁾を考えてみるといい。力の雷雲が批判的磁針の上を通り過ぎると、磁針は指す能力を失う。

しかし結局誰が永遠のために判決を下すか。別の言葉で言えば、何がこのたゆたう現在の世界を高めて、力強い後世となって、かくて一つの世紀のうちに現在についての仮の決定と過去についての最終的判決が発せられることになるのか。――単に天才的な多数の発言のお蔭である、これがそれぞれの卑俗な多数を支配するのであり、これは事の性質上単に大きな時間的間隔を経てのみ集められるのである。

第六項

学的刑罰裁判所、筆者はその編集者となりたいと願うものであるが、この裁判所は今や私が裁判所をどうしようと思っているか分からず、哲学と詩が除かれるならば、哲学と詩の分野で裁判所が判断するに当たって、残っているものは何かと私に尋ねることだろう。まさにこの両者の学的分野であると私は答える。つまり現在の詩あるいは脱肉体化した詩であり、脱霊化した哲学である。――ここで我々の裁判所は他のよりもっと片付け整えるべきである。

私は現行の哲学については短く済ませる。有り難いことに私は、このような哲学を敬い、一般ドイツ文庫、つまり天才性のこの『蟹小本』⁽¹⁾に対して、天才的な求心力に素敵に対応する遠心力を捧げている男達を目の前に有するからである。現行の哲学は、啓蒙哲学――民衆哲学――非正統派哲学――ベルリン派哲学――有益な哲学――一般ドイツ文庫の哲学であるという善なるものを有する。この哲学の本質は、哲学を必要なものとするところにある。一方天才的な哲学（フィヒテ哲学、そしてそれ以上にヤコービ哲学）は政府や教育同様に自らを余分なものにしようとしている。現行の哲学は自らを非党派的と見なし、宗派心を免れていると思う。それはヴォルフ的精神を諦めていないからであり、年老いた人々が自分達のファッションを変えないでいると、すべてのファッションの流行を免れると思うようなものである。この哲学は自然の本の判型や全紙の数、印刷地、出版社を挙げて、その本を説明し、書評とする。同じやり方で今度はまた宇宙のこれらの書評

家達が容易に書評され得る。彼らは（例えばプラトンやヘムステルホイス⁽²⁾のように）質というよりはむしろ量であるので、彼らは学者の秤に落ちて、容易に否定され得る。しかしこの哲学については編集者の私は若干の巻での短い分析を考えている。

第七項

同様に現行の詩というものがあって、これはジャーナリズム界、アカデミー、すべての神秘的団体に必要なもので、こうした世界に大抵の現行の魂は住んでいる。この詩は超越的な雄弁であり、あるいは第二の効力の散文である。フランス人とかゲレルト⁽¹⁾、アルクシンガー⁽²⁾、ニコライ⁽³⁾あるいはその他のアーデルング風詩人といった人々を評価し、彼らの許から — 癒えるというよりは彼らの許で癒える人、また商売人としてこのような機会詩的なシャルマイ[オーボエ属]をさながらより高貴なパイプのように吸い尽くす人は、ここで大方は私に目を通して、私がこの詩を私の下級刑罰裁判所でわざわざ特徴付けをし、更に援助しておくことを願っていることに満足されることだろう。プラトンのような所謂天才的な詩は千人もの商売人にとっては無趣味で、荒涼たるものであり、暗い。しかし人間というものはいつでも自分の詩を要求するものである。誰もが自分の桂冠詩人を欲し、新年ごとにミューズ年鑑が要求され、どの平板な地方も辺鄙なミューズの山を欲する。人生の辛酸に対して現行の詩の白い溶けた石灰を飲み込もうと思っている官房書記は、なぜ単により高い詩という石灰の上に塗られた Fresco 画のみを渡されるべきであろうか。 — 彼はどんな最低の詩人によっても高められはするのである、というのはこの詩人はたとえ最も低い枝の上でさえずっっていても、常に読者よりは高い所に止まっているからである。読者は下の根の上に座っていて、上方に耳を向けているのである。年鑑の詩人がその年鑑のパルナソス山、ブロッケン山で巻き起こす詩的雲は冷たく濡れたもので、形が崩れていても、しかしその麓では散文家の幹部が上を眺めていて、この幹部は陽が沈むとき、雲が赤く染まって、陽光に満ちているのを見いだすのである。 — その際、黄金の年鑑の昆虫から音楽の羽根[譜面]を取り出して、飛行と歌とを交互に何のものにも勝るものとしたら、私は私の比喻をまだ一度として見失ったことがなく、三、四枚のたたまれた翅鞘から引き抜くことのできる甲虫の羽根をまだ書き付けていなかったことになる。

第八項

編集部としては、回状を送る栄を頂くこのような担当判事は、ひょっとしたら現行の詩の擁護によって、天才的なセンスの代わりに、教養ある確固たる趣味を称揚することができると信ずることだろう。ここで明瞭に述べることができる。センスというものは（私は女性的、あるいは受動的天才と呼びたいが）肉体的触角同様に人間全体に住みついでいて、単に一冊の本の観照を決めるだけではなく、宇宙の観照を決める。センスは単に詩的精神のみを求め、詩的な不具の体の中であっても、その精神を見いだす。センスは、趣味とは違って、すべての民族を、精霊のすべての変種を尊重し、同時にプラトン、アリストファネス、ダンテ、レッシング、ゲーテ、ハーマン、シェークスピアを尊ぶ。センスは現実という粗野な前景の傍らにより高貴な愛や宗教、予感の神聖な背景を与える。センスはそれ故天分のようにただ生まれつきのものである。それに引き換え、趣味はすべての古典作家の読書によって学習され、発展させられる。それも学習され得る物の許で発展させられる。

韻律学や、詩句構造、綜合文構造、長音節、幅、比喩の近さ、統語法（飾りの統語法並びに他の統語法）、要するに詩的な体の部分全体で、これは精神的肉体的去勢男のボワロー⁽¹⁾ [*1]でさえ測定測量できるものであり、本来教養ある趣味にとっての解剖室である。この趣味は、現行の詩の木製の関節にほどその分割する焼き兔取り分け器をより正しく当てることができない。教養ある趣味の刑罰裁判官は威張って恥をかかせる。誰をも趣味の欠如の思いに、教育の欠如の思い同様に強いるからであって、容易に比較によってこの段々の欠点は指摘され得るのである。これに対して天才的センスの欠如（様式の一欠点）が、第六感、第八感同様に感受されることはいかに少ないか、ドイツの批評に大いに貢献し、その寄与が私のより低い[死罪を含まない]刑罰裁判でも不可欠である男達と話してみると、言うまでもないことと言えるであろう。すべての天才的センスが全面的に欠けていても、機知や趣味、勇気の著しい段階を排除することがいかに少ないか、文学についてのメルケルの商業書簡を見てみると頷けるといふのはすべての立派なドイツの裁判官にとって喜ばしい現象である。この書簡を魂のない魂についての自筆の診断書と見なすであろう人と論争するつもりはない。私や多くの他の人々にとってこの男は、多くの塵を掃き出し集め、それ故自分だけが路地に残っているという神の町での元気な袋小路清掃人である。私は、彼がその紋章授与古文書を時に現行の執筆者達の他に真の天才達にさえも贈り、騎士の城の小人となっている、つまり中に一人の巨人がいることをホルンと告知で知らせて頂銃眼の上に出てくる小人となっていることに異を称えない。これは彼の趣味の間違いというよりは彼の時代の間違いであろう。彼がもっと早く生まれていたら、彼はゴットシェート風の規則性の長所をクロプシュトック風の無規則に対して取り逃がすことはまずなかったであろう [*2]。

*1 フランスのすべての真の詩的月桂樹（例えばラブレー、モンテーニュ、キノー）のこの哀れな樹木陵辱者がかつて一廉の詩人と見なされたこと — あるいは単にポーブと並ぶものと見なされたこと、詩人の許でポーブが立っているよりも更に低くポーブの許で立っているのに、そう見なされたことは、— ルイ十四世の工場黄金の世紀は完全にドイツ文学のアーデルング風の燻し金の世紀に達していたことを証している。⁽²⁾しかし彼は古代人に対する趣味を有したが、センスは有していなかった。ヴォルテールがパスカルに対するセンスを有しなかったようなものである。パスカルをヴォルテールは天才的作品のすべての書評の手本と永遠になり、なり続けている方法で書評した。

*2 敵の党派に対する彼の有益な党派性にもかかわらず、彼の頭がしばしば十分に詰まっていないのは残念である。それで例えば、第10の書簡⁽³⁾ではこう白状している、自分は夜が — 地理学的夜のことと私は思うが、精神的夜となれば七十年間続くこともあるから — 単に二、三時間続くところを知らない、それも私信ではなく公に私に尋ねている。この長さの夜はすでにティトリス山で見られ、極地ではあらゆる長さの夜が、大学の学期に相当するまでの夜が見られると、彼でもギムナジウムでは知っていたであろう。

— より高次の種類の、例えば彼が何度か踏みつけている五人の男⁽⁴⁾達についての彼の無知はよりましなもので、むしろ彼を勇敢に気位高くしている。シラーとゲーテの比較（批評家らしい比較）、これを彼は両者の詩の基となっている様々な文字の上に築いているが、

様になっている[第 5、と 6 の書簡参照]。逆にジークフリートや見霊者、アマトンテ、ヘスペルスをそれらの著者と一緒の一つのランク表に記しているときには、最も似合わない観念を容易に並べるといふ機知的頭脳が目立っている[第 25 の書簡参照]。

第九項

ゲーテ⁽¹⁾は正當にも一冊の本が人間を変えることは少ないと主張している。しかし一私が付言すれば一恐らく複数の本は変え、殊に複数の人間は変えることだろう。というのは結局諸時代の須臾の精神世界を解き放つのは大抵本の世界の他に誰であろうか(そしてその逆である)ということになるからである。部分の部分に対する効果は、殊に皆反抗しているので、分かりづらくはなっている。一同様に共時的(単に通時的ではない)読者は全体として一つの天才的センスを有するよう見えるが、しかしこのセンスは個々人の多数派としては明瞭に証明されにくいものである。

というのは第一に昇る朝日のように昇る天才は世界に作用するからである。すべての批評家はくしゃみし、模倣者達は創り出す[*1]。皆が新生児の気分である。第二に天才は気候の静かな全能と共に働き続けて、モール人を洗って白くする。『批判的⁽²⁾森』の著者が青春の作品の中で発案した冬穀は、当時は幾つかの荒い批判的群れがその上に足を踏み入れたけれども、今や完全に実っている。ただ現今しばしば刈り手が種を蒔いたと称している。そもそもこの精霊は一はるかにゲーテ以前に書いていて一まず散文の翼を解き放ち、天才の鷹を紐や目隠しをつけずに飛ばせた。それ故編集部としては、天才がいつまでも永遠にそのエピメニデスの⁽³⁾洞穴に眠っていたとはほとんど信じがたい。貧しく冷たい時代がかつてハーマンに「下に」おれと言った。しかし今や彼は暗い星空に向けられていた自分の世界を次第に太陽の方にめぐらせている。優雅な世界は容易に古びて、教養ある時代の子供とした直に更に教養ある時代の犠牲となる。これに対して人類は天才的作品を越えて自らを形成することはできない、天才的作品は人類そのものをすでに自らの裡にすべて有するからである。

私はこうした意見を通じて、どの書評も何らかの天才的な統治下で書かれているという刑罰裁判官達にとって重要な真実に導きたいと思った。公的到着のための使節のように、精霊は単にお仕着せを複数持参してきて、当地でまず借用していた必要な数の人々に着て貰う。例えばヴォルフがハレから一去ったときに、若いフィヒテ主義者達が生き合わせていたら、彼の持参したお仕着せを着用するような人間には不足しなかったであろう。一本の象牙から容易に全世代のための義歯のセットが加工されるものである。

統治するどの天才の下でも一哲学であれ詩文であれ一さながら免除の年、安息の年が見られる。その年には種蒔きは許されず、奴隸や貧乏人、動物が自由に収穫できたのである。ミューズの山の新たな山岳の⁽⁶⁾長老とか反教皇が、古い、就任者のいる王座に上がることはないよう今や善良なる批判的元老が見張ることになる。それ故駆け出しの天才はドイツの皇帝に似ていて、この皇帝はかつて、自分達の被る三つの王冠の中に聖遺物の釘からできた鉄製の王冠も得ていたのであり、あるいはまた十二世紀の教皇に似ている、この教皇は三つの異なる王座で戴冠したのであるが、そのうちの最初のものは便座であった[*2]。『一般ドイツ文庫』とすべての立派な書評の古い騷霊の隅を、一レッシングの書評は別にして一覗いてみさえすれば、批判的元老がヴィーラントやヘルダー、ゲ

一テ、クロプシュトックの戴冠式の際にできるかぎり利用しようと思っっている便座や鉄の冠が目に入ることだろう。今では勿論男達のはるかにましな風に座らされ、被されている。

しかし精霊の最初の子供達を十字架にかけるといふ、ちょうどかつて伝説によればユダヤ人達が毎年キリスト教徒の子供達を十字架にかけたようなものである批評家達のかの性癖を私は十分に正当化できると思う。下級刑罰裁判所としては私が記念帳に記入したことを応用するのを許して頂きたい。つまり人間というものは毛虫同様に迷宮の中の進路に糸を引いて来るが、未来の道に糸は引かず、それ故単に過去についてのみ賢明であるにすぎない。同様に天才は批判的アリアドネの糸を単に背後に有するのみで、前方には有しない。天才を自ら明らかにする、あるいは他人の天才を明らかにする天才はいない。天才は薄明かりの中間色を経ずに突然出現する。しかし趣味はその対象よりも早く出現することはなく、まず対象を通じて対象のために成熟する。我々にはその逆のように思われるが、しばしば類似の作品が類似の作品のために趣味を育ててきているからである、例えばホメロス以外のギリシア人のために趣味を育ててきている。しかしすべての美学的前半の永遠と似ていないことがそれ自体作品の生き生きとした精神のために必要であるとき、例えばユーモア的作品のときには、この作品がやっとなつて敵の趣味を味方の趣味に変える。アリストファネスが ― まず最初に気に入る人間はいない。それ故模倣者は金箔の葉形模様が付いた立派な鈍く磨かれた天才の鏡としてほとんど評価されない。五番目の鏡は批評家に第四の鏡からの色褪せた太陽の像を与え、第四の鏡はもっと強い像を第三の鏡から与え、それが続いていって、最後に結局実直な裁判官自身が大胆に太陽を覗くことになる。それ故模倣者達がすぐに二回目の大市のときに自分達の鏡を立てて、一人の作家の許での自分達の仕事を終えたら、鏡台を持って更に旅して、新しい作家の光を弱め、反射するというのは結構な仕掛けである。

しかし例えばソフォクレスのように著者が一般的に評価されている場合には、その著者を真似ることは滑稽であろう。

これは同時に、年を取って ― 多くの読者のいる一人の天才を評価するすべての裁判官にとっての保護状となるべきものである。

*1 周知のように突然の光は鼻の神経と生殖器に作用する。

*2 『風俗云々論』、ヴォルテール、四十八章。

第十項

美学的水成論者として詩的世界を水で形成させる批評家は、そのために火を援用する火成論者に対して、明確さと正当力の点で永遠に勝るであろう。というのは炎は、天才的な炎であれ、量れはしないが、多分水は量れるからである。以前から批評家達はヘボ作家、現行の作家に対して最も強力に働き、輝いている ― その作家の詩的花々に正しい番号板を張り付けて ― 彼らは真っ直ぐな美曲線を測定し、厳しく非難し、あちこちでヒントを述べ、願望を言い、天才はやすりをかけなければならないと言う ― その天才は第二版では磨きをかけて現れ、磁石のようにやすりくずで覆われ、その序言で書評の長柄鍬に対して謝辞を述べる ― 批評家達はまた二回目の書評で著者の自分自身に対する高貴

な厳しさを大いに称えて — かくて高度な通俗学校ではあらゆる種類の昇進が必要な放校処分と共に進行する。 — まことにこのせいで水成論者は高められる、そして水成論者は — 全く事の性質に反して — 自らが、選出された不滅者、例えばかつてライブツィヒの水成論者達によって高められたニコライやアルクシンガーと同様に不滅である。

第十一項

編集部としてはその批判的裁判員達が以前の裁判所からの若干の無邪気なドイツ的援助を維持しているのを見るのは嫌ではない。若干の援助を名付けてみる。その一つに明々白々な事柄を述べることがある。(例えば著者に続きを拒むことはできないとか、著者の意見を奪うことはできないとか — 小巻あるいは付録はほとんど巻そのものと同じ厚さだとか著者の滑稽な奇妙さの一つを挙げることである)。というのは人間は自分達が正当に肯定できたり否定できたりするものを読むと、自分達の力を秘かに感じて元気になるからである。 — 同じように無邪気な類似の援助と私が見なすのは、正書法や文法で著者に出勤することである、その点での優勢はどれも疑い得ないものであるからである。思うに — サルマシウス[*1]によると、古い、改行なしに書かれた見本にアクセントや区別の記号を入れていたという少し前の批評家達に近世の批評家達を近づけるのは、正書法の植字工持参金を措いてないだろう、本の中の引用した表題や箇所挿入文の操作の際彼らはこれを利用するのである。人間は皆正書法や文法の指摘にはびっくりする、この指摘で直接、学校の長椅子と教壇の間の昔の屈辱的間隔が新たになるからである。

編集部にとっては、その仲間が、より良い施設でもよく見られるように、惨めな、無名の著者達を相手にすれば好ましいことであろう、少し前の法学が醜い者達や若造達をまず苦しめたようなものである。それについては三つの理由がすべての編集者達にすでに知られている。1) 裁判官は判決のとき同時に判決理由を承知しているとき、自分や読者に偉く思える。しかし単に、読まれない全く惨めな作品に対してのみ意見が一致する。平凡な作品に対しては意見は変わりやすく、最良の作品に対しては意見は敵対する。2) 謙虚な裁判官は傑作については自分が賛同していいと思うに至る前に、聴衆に皆投票するようにさせる。ちょうど全くローマの最下層の市参事会員は大多数の票の決した側にのみ立脚することが許されたようなものである。ローマの行列のときのように、すべての奴隷の後で最後に司令官が登場する。3) 最後に私が気付いたのは、すべての裁判所で書評家は、著者が惨めなものであればあるほど、一層惨めなものであったということである、どの黄金をも単に同じ重さの試金針で調べるようなものである。文学的法廷はひょっとしたら — 軍法会議や陪審を除いて、 — 立派な古代ドイツの風習、つまり誰もが、どのように意味のない著者であれ、自分と同等の者によって裁かれるという風習の名残がまだわずかに見られる唯一の法廷かもしれない。私は惨めな作品が幅をきかせている最後の理由を挙げるとはなはだ無礼なことになってしまうということを幾つかの裁判所の立派な関係者に打ち明ける必要はないであろう。

最後に編集部として願うことは、司教区裁判所が年に数回はあれこれの立派な著者にすべての心の壁についてのシェークスピア風認識と多くの繊細な世間知を高いレベルで見いだしたいということである。 — これも単にこうした長所を見いだすには自らこうした長所を所有せずにはできないことだからである。これは裁判所全体に有益なことである。

*1 モールホーフ『博物学』第七章、手稿について。

第十二項

編集者としては現行の執筆とフランス趣味の貴き保険会社に対してここで早速こう覚悟していると述べるが、つまり自分は — 現在支配的な裁判所の多面的な非党派性と楔の判決に歩調を合わせるために — 秘かにミューズの山党の何人かの鉱夫を雇い入れる、この者達は会社がつなぎ合わせているガリア[フランス]風小綺麗な容器を同じジャーナルの中で再び砕く者達であると述べることにする。欠点はほとんど恐れるに及ばない。幸いどこの田舎町にも、人類のネーデルランド派に属する何人かのかつての⁽¹⁾学生と、それにまたこの大学にもこの派の学生自身がいて、彼らが今や、イタリア派の何人かの者が余りにしばしば卑俗な性質に憤激しているので、同じように激しくイタリア派に対して — しかしこれははるかに利己心を有せず、自らの自我を立派に軽視したやり方で — 攻撃し、イタリア派をさらしものにしていく。

これらは善良なる⁽²⁾猿で、精霊の火の周りに、温かい思いで座っているのであるが、薪を追加するのを忘れていく。これらは天才自身の縮小化された複製あるいはむしろ恣意的な記号で、ちょうどエジプト人が(Paw⁽³⁾によると)同じような具合にミネルヴァの代理を、甲虫で行っているようなものである。すべてのゲーテの子供とか他の子供の無垢の受胎を信じているこうした美的フランシスコ会修道士達はイスラエル人達の才能を有していて、つまり彼らにとって神与の食物[マナ]はちょうど自分達の望む味がするのである。彼らはそれ故、意図的に極端な賛辞か罵倒を述べたいと思うどの編集者に対しても確信をもって仕えることができる。彼らの行為全体はフィレンツェの無関心主義者達[*1]のかの遊びの極めて機知豊かな模倣である。偉大なるシビレあるいはシビローネが思いつくままに一語を発するか書いたとする、するとこれらのフランシスコ会修道士はすぐに解して、世の人に問うのである。まさにこの偉大なシビレの他に永遠に正しい答えを出すものがあるだろうか、と。 — その際フランシスコ会修道士は匂いのきつい石鹼で残りの世間を洗う、というのは小綺麗という良い匂いほどに忌々しいものを知らないからである。

いや編集者は、正しい編集者を見いだせない場合、自分自身を（普通は必ずしも自分の本分ではない諷刺心から）演ずることができる、というのは数年前から「傾向、自由な反省、宗教、素晴らしい、珍しい、空想的な、すごい」 — 等々の単語の僧侶ラテン語の方言辞典、専門語辞典のために、大いに収集してきたので、自分は多くの劣等な詐欺師同様にかのイエナ言葉[*2]を解すると信じていいほどであるからである。

*1 このアカデミーではシビレと呼ばれる少年が説教壇に立っていて、人々は彼に何事かを尋ねる。すると彼は偶然の一語を発しなければならない。すると誰かがこれを、質問に対する正しい解であると機知的に説明する。 ゴルドーニの『自分自身についての伝記』第一巻。

*2 シュヴァーベンではそのように、ほとんどすべての言語からの寄せ集めの悪漢の語を

呼んでいる。ヘスの続刊されている（全く卓越した）『飛行紀行』

第十三項

更にある遺言、つまり下級刑罰裁判所の知性新報に関して一言。出版者達は周知のようにこれまで、文芸新聞用の知性新報上で、自分達の品物がドイツ文庫、ゴータ新聞、エルランゲン新聞で全く好意的に、あるいはその逆に、受け入れられたということを知らせるように強いられてきた。しかしまさにこの知性新報を有しない者は、称賛については何も知らなかった。我々の知性新報はすべての書籍商が、新刊について拍手で受け入れてくれたすべての学的報知紙の書籍商的な報知で埋めるためにのみ記載されるのである。これはある作品の称賛の告知を自らまた告知するための最も簡単な方法である。

そしてこれらは仮の記事であって、この記事について私はすべての学的新聞の月曜日派、火曜日派、水曜日派、木曜日派、金曜日派、土曜日派の人々の意見を期待している、彼らが天才の至聖派、日曜日派を攻撃したがつているのであれ、あるいは単にフランシスコ会修道士達の暑い土用派を攻撃したがつているのであれ、期待している。

*

以上が私の回状である。 — しかし私に対して一人の仕事仲間も応募してこないのみならず、更に嫌なことを経験する羽目になった、つまり全ての裁判所が現行の著述業の更なる発展のために私が苦勞して仕上げた提案を秘かに自ら我がものとして利用し、私からわずかばかりの編集者としての小銭を横取りしたのである。この小銭はいとも正当に私の計画ということで私のものになるはずであったのである。しかしこの横取りが正当であるかどうかは後世が決めることになるろう、後世はきっと、誰彼の別なく、我々すべてのうちの盗人の⁽¹⁾指の骨も執筆の指の骨も、思い出も名前ももはや残っていないある時代について厳しく裁くことだろう。

II

気球船乗員ジャンノッツォの航海日誌

第一航

気球船のドック — ある幽霊の至福 — ライプツィヒ

君達があるとき地上で緑色の外套の黒髪の人に遭い、しかもその男の首が折れていたら、その男の名は教会点鬼簿にジャンノッツォと記入し、その男の気球船日誌を『然るべき船員のための年鑑⁽¹⁾』という表題で出版して欲しい。まことに私がシェークスピアのような世紀に一人の人間であれば、凡庸な人間達、平凡な者達はその汚れた目で私を読んで接触すら許されることに私は怒り狂うことだろう。最初のキリスト教徒やギリシア人、エジプト人は我々最後のキリスト教徒が卑俗な本を禁止するよりももっと正当な権利があって、聖なる諸本を禁止してきた。しかし私は勿論劣等な暦の月聖人として、私の下で青く茂り、根付く月ごとの大根や、飛び去っていく私の眼下の五月甲虫[こふきこがね]、六月甲虫[すじがねこがねむし]、七月甲虫[こがねむし]や、下院の議員達と俗に交わり、汚れていいし、一般に読まれても害はない。しかしその際私が期待しているのは、かくて平凡な者達を憤慨させることだ。しかし君達、私の心の兄弟には、この船員年鑑を結社の杯として残すことにする。君達が友のジャンノッツォが首を折ったというので、長い喪章を着け、まとうのであれば、その杯から気付けの酒、葬儀の酒を飲めばいい。

同志のグラウルよ — ただ今は君が私の気球船に同乗できたらと願う — グラウルという名前は君の最後の名前、ライプゲバーよりもはるかにいい。 — 君はきっと私の気球小屋の輿の扉を大きく開けて、両腕を冷たいエーテル浴の中に突きだして、目を寂しい青空に向けることだろう — いやはや。君は今気球船がざわざわと飛んで行き、十もの風を追い風に、雲が両側で隊列として、霧の塔としてゆっくりと移ろう様、下の方で百もの山々が一つの巨大な蛇にまとまって育ち、その溶岩の流れや雪崩という毒と共に人間達の蟻のような集会の間に横たわっている様 — この上の静かな聖なる場では、下界の騒動には何も気付かない様に喜びの余り足で踏みならすことだろう。

— 同志のグラウルよ、ここに君に私の気球船日誌を若干の敬意と共に捧げることにする。ここの上空での私の決算書は以下のようなものである。

君はパリでの我々の化学の夜を覚えておいでであろう。それらの夜から私にとって化学の昼が精錬された。私は二重窒素（この名前は許されたい）を発案した。かくて気球船造りは一般的なものとなって、他の造り方は軽視されるようになっていく。どの子にも分かるように、はっきりと詳しく、二分間で、メカニクな装置を含めすべての化学的処方箋を — 軽く風が吹いても操舵は容易だから — ここに書き留めて、私の気球船が水滴のごとく、人類の重々しい、一つの音色と湾曲のために溶け合っている鐘の熔金の鑄穴に飛び込めばいいと思っている。 — いやはや。何と柔らかな塊は千もの尖端や物音に碎け、高く飛びだそうとすることか。それでは、諸君、半ポンド受け取るがいい。...

余白の編集者の筆。しかし我々のすべてを折ってしまう時代にあっては、少なくとも一般的平和が見られるまで、この革命的処方箋を提示しないことがきっと正しいことだろう。次のように言うと化学者にはヒントとなろう。ジャンノッツォは全く新しい、倍軽い窒素の気体を所有しており — ガス測定器がもっと多くの燃素[可燃性気体]を告げたら、上空であっても彼はこの軽い窒素を引き出すのであり — お茶を沸かすときのようにいつもナフタの炎が燃えているようにして — バラストという撤退金を投げずとも、しばし

ば球を高く上げさせ — 気体の貯蔵庫を有し — 球の直径は、もっと少ししか運べない他の球の半径に過ぎず — 球は（それを見たライブゲーターの私宛の手紙によると）絹で覆われた上品な見知らぬ革でできている（多分雷避けである） — しかし十分である。以上編集者。

*

君はこの処方箋に何と言われるか。 — この際私の革の立方体は、これはすべての六面に窓を有し、床にも窓を有するが、上の十二月の寒さの中で、（下界は六月で三千フィート下にある）私に全く温かい思いをさせている。壊れた瓶が胡瓜の茎を覆うようなものである。私はそれどころか極楽鳥のように雲の上での眠りを期待して、前もって大気の中で停泊する。雲が同時にぶつかり合うと、ほとんどいつも相対立する風が様々な高さの中で吹き渡ると夙に言われてきた。さて、この敵対する奔流の間では静水学の法則に従って全く中性的な静かな大気の層が静かに保たれるものである。そこでこの層の中で私は通常眠ることになる。

昇天ということを最初に思いついたのは幽霊[revenant]という言葉によってであった。偶々誰かが私の前でその言葉を述べた。私は幽霊になるという至福を考えてみた — そこで空想のパンドラの箱、アイオロス[風の神]の革袋が開くことになった。君達精霊よ、何と境界石をずらして、不当な不動産を収集したくなることだろう、そのことによって精霊の仮面の自由を得て、不気味な姿で徘徊し、気に入った悪漢に出会うたびに、その者の顔をけげんな観相学的字謎に変えることができるならば、何とそうしたくなることだろう。あるときは私は兵站将校の前で穏やかな鮫となってあくびすることにしよう — あるときは衰えた悪漢が聖会法違反をしている最中に巨大な蛇となってラオコーンのようにその首を絞めることにしよう — あるときはブロックコートの輩が、その甲虫の触鬚の褐色のパイをすでに当てているとき、このパイから生身の濡れた恐ろしい女身怪鳥となって出現することにしよう — そしてほとんど毎日、精霊と宗教を欠いたこれらの端役の小都市的十八世紀人がそのパンのための学問、パンのための執筆、パンのための生活を宮廷で追い求めている最中に何か超現世的なもので（例えば天使として広間を過ぎる[会話が途絶えること]）気の抜けた営みと信仰の古着店から彼らを追い出して、かくて彼らが自らむしろ狂っていて病気だと思い、早速医者を呼ぶようになるという風に仕向けることにしよう。...いやまことにこれは穏やかな牧歌的夢想である。

しかし気体を満たして空中に飛ぶたびに、何かが生じたのである。空中を飛びながらワード⁽³⁾のように獄から獄を視察するというよりはすべての小さな獄の中で大きな獄の周りを旅すると、より良く人間達に働きかけるという手段、方法が見いだされたものである。それは奴等に私のバラストの若干の石を投げつけるということであつたり、あるいは降下する幽霊として鷹のように奴等の罪に襲いかかることであつたり、あるいは奴等の目には見えなくなり、このような空中高く、気圧の低い所に収まっていることであつたりする。

聖霊が天から下ってきた一昨日の聖霊降臨祭の初日に私はライブツィヒから天で赴き、昇った。教会の隣のペーター門の前で私は私の室素の翼を広げ — 幸い十五分で済ませた。というのは門の守衛と教会の守衛（寺男）とが協同して、警察に届けて、私が直接長い教会の窓の前で高く昇って、内部の者達の邪魔をするのを強く阻止しようとしていたか

らである。しかし私はすぐに閉鎖された市門の上に飛びすぎていった。門番は私が門を開けさせるのをひよっとしたら期待していたかもしれない。というのはヤヌスの門のように人々は教会で平和の礼拝が行われるときには、門を完全に閉めて ― かくて内部の聴衆とそれ以上に哀れな教理教師が聴覚で妨げられることがないようにし ― そして門が開けられるのは、馬車がやって来るときに限られるようにして、乗客が不便を感じないようにするという立派な仕組みがあるからである。 ― かくて警告と人々の侵入がスムーズに並んで継続することになる。

しかし君達天才よ、なぜ私はここでこの若干反天才的プライセ川ハンザ同盟のアテネに対して ― 残念ながらその平野は広がっていて私の視界から消えようとしないのであるが ― その交際のラック塗りの打ち出し細工について、また大言壮語者[鉄食い]の欠如と鉄剤愛飲者[*1]の過剰について、また私と君と決して言わずにフランス語を交えて私 et 君という商売精神について短く触れるのか。なぜこの下の平原に目を向けるのか。第一に哲学という中間の学[神の予知]のことであれ、詩の内声[中間の声]のことであれ、常に素敵な中道を保つ術を心得ている優雅な学者達が私を喜ばせるからであり[*2]、第二にそれでもこの町は日々楽しく暮らしていて、田舎に出掛けるからである。さもないと商業の枝には花よりも木が育つものである。

「しかし私は両腕を（私の内部の人間、新しいアダムには両腕が備わっていて）感謝を念じながら御身に、神々しい太陽よ、差しだして、御身により近くいて、人々から、つまりザクセンからもその他のすべてからも一層離れていることに感謝している。 ― 今晚下で眠るのであれば、死にたいところだ。 ― それでいて聖なるグスタヴ⁽⁴⁾よ、御身の眠る墓石の許で横になりたい、今日はこのヤコブの石枕⁽⁵⁾の許に降りたい」。 ―

リュツェン近郊の戦場で、グスタヴが血を流して昇天したとき投げ出したバラストと言える記念碑を見たとき、このことを書き付けた。 ― ー しかし風が私の駕籠かきとなつて、私は君達の雲の上で眠った。

私は私の気球船を ― どの船も鐘⁽⁶⁾のように、また赤道下の船員のように洗礼を受けたいと思うので ― ジーヒコーベルと洗礼名を付けた。

*1 彼は多分鉄剤治療のことを言っている。D.H.[編集者の筆]

*2 明らかにここでジャンノッツォはこの豊かな町に対する自分の不満とこの町についての個人的感慨を洩らしている。 ― 彼はここで格別うまくいっていないと容易に想像できる。しかし人々に ― 投げつけられる卵を人間はしばしば産むものである。ライプツィヒは（ひよっとしたら商業都市はそうなのかもしれないが、例えばハンブルク、ロンドン、それにベルギーの都市）貧乏人に対する豊かな慈善で際だっている。人々の慇懃さについての彼の非難もその半分は削ることができよう。これはベルリンの人々には関係ないであろうが。

第二航

第一航の終わり ― ひきがえる騎士 ― フィーアロイター侯国での蛙戦争と鼠戦争

気球船日誌では秩序がなければならない。私はまた始める。一昨日の昇天の日にはどうしても地上に降りることができなかった。絶えざる風のために私はザクセン上空をあちこち揺られていた。私あるいは地球の新しい衛星は下界の人々にはほぼ古い衛星[月]ほどの大きさに見えたことだろう。私はインク・ワイン[*1]の中に入れて用意した半熟の卵の前で食前の祈りを捧げた。一日中自分の考えたり見いだしたりするすべてのことに対して腹を立てることがないのであれば、ここ上空で楽しい生活を送ることができよう。すでに下界にいるとき、私は邪悪の三（私にとっては邪悪の七[切り札の七]）、つまり不正と自惚れについて考え、追い剥ぎやほら吹き達のおびたしい数を数え上げ、多くの国々や時代の中で奴等の好き放題にさせざるを得ず、ある者の棘を抜くことも、別の者の鶏冠を取ることもできず、頭を叩き割り、窓を打ち破ることもできずにいなければならないと思うと、しばしば数日間居間の中を歩き回って、拳を固める仕儀になるのであった。同志のグラウルよ、君は人間が虚しく二、三のノアの洪水、最後の審判、適正な硫黄池を願って叶わないとき、そして怠惰な犬のようにこう目撃せざるを得ないときの憤懣を知っているか、つまり無数の水蛭や針鼠、教会や国家の鷹どもが — すべての国々や部門、三つの時間区分[過去、現在、未来]の中で、罰せられないまま吸い取り、刺し、ぶつかり、むしり取っている様、 — 奴等が緑色の殿様蛙のように、生きた蝸牛の殻ごと消化して、家々や国々を消化している様、 — 奴等が（上述の獣どもが）ファラリスの雄牛⁽¹⁾のように人間の苦痛の叫び声も畜獣の咆哮に変えてしまう様を目撃せざるを得ないときのことだ。 — せめて一週間立派な力強い雷雨となって、人間どもの頭上に移って、時にこの頭を上から可愛がることができさえすれば、私は嘆かなくて済むだろう。

一昨日ダーズの市場村、半ダーズの小都市の上空を過ぎて、ガラスの床とイギリス製の軍事望遠鏡越しに下の庭や路地、窓辺でのコーラス付きの客演喜劇を覗き込んだとき、私は言った。お揃いの哀れな罪人[死刑囚]どもよ、私は豪雨となりたいところだ。 — グラウルよ、信じられないことだろう。一つの極小[十六折り判の]都市を眺めること、これはまあいい。しかし極小都市の連なり全体、一つの牡蠣養殖池を上から眺めること、これにはいらだつ。私は幾つかの矮小都市の二十二の庭園で、一度に無数の矮小都市民の膝かがめお辞儀、四肢のばたつき、犬と孔雀と狐の尾、羨望し、冷やかし、凝りすぎる様、皆が（まさに本当に嘆かわしいことであるが）大都市民達の要求や衣装、食器、家具を揃えている様を見たのであった。 — ここのある踊りの縦列では極小都市の女性達は鉛を含む肢体と観念を有しながら、しかし教養あるショールに包まれて、ギリシアのライオンの皮に浸かって、多くの女性が鶏[*2]や将校のように鶏冠[羽根飾り]で病的に飾り立てて、他の女性達は晩年に、青春時の記念のように色とりどりのドレスの裾を付けて、あたかも以前孔雀をこんがり焼くとき、羽根をむしり取らずに鉢に盛って出したような按配である。

一一 反対側の縦列は、どんな首都でも見られないような色男や悪漢達で、商業や軍事、法曹界の自己愛的門弟達で、彼らのファッションのパンの外側はすばやく焼けて、内側は重い生の柔らかいパンが残っていて、作法や上流界について話し、町の古い長い裾の世界を茶化している。髪粉を振りかけた華奢の青年貴族の一団の顔は申すまでもない。彼らは養兎園から白い頭の兎が顔を出すように、玉突き台や宮殿から覗いている。 — グラウルよ、この種の全く一杯のザクセン庭園、養兎園の上で、上品な長ズボンのサンキュロ

ットに種蒔きされている庭園の上で、私は怒って咄嗟に腕を突き出して、クサンティッペが玄関でソクラテスの上に腕を出す按配で、そして「さながらついでのように」下の行楽の一行に「効果的に[小便を]注いだ、許せ。このにわか雨によってしか私はザクセン選帝侯の大気圏では、驟雨[洗礼者]としての最初の客演を行うことができなかつた。

しかし不浄な地球全体がこのようなものである。いつも人は自らの町をある遠方の太陽の都市の支部、農舎として考えたがるものである。しかし地球上のすべての路地を通じて一度に見下し、見上げてみて、そして両半球上にいつも同じ日常性の共有牧場を見いだすと、これが有名な地球かという問が生ずることだろう。「下の痰壺、小便壺、これがその星だ」と私は私の前を飛びすぎながら私に自分の居場所を尋ねる熾天使に答えることだろう。

まさに次のことが私の二番目の地獄で「先に私の最初の地獄を述べたが、つまり私は、屈服するたびに空気ベッドのようにまた自ら上がってくる無数の阿呆を「一ヵ月の間ずっと自らに対して誓忠式の台を自ら築く数兆もの人々を「自分達がどれほど進んだか絶えず繰り返し告げる時打懐中時計を「千もの村々や裁判所、発行所、講義室、参事室、書き割り、プロンプターの潜む穴の中でのすべての鼓腸者どもを、彼らには套管針で強く刺してやることができずに、陽気に膨張するばかりなのであるが、つまり私はかくも多くの風袋を考えざるを得ないが、しかし多くは私から地球の直径ほど離れているので奴等に近づけないことが私の地獄[*3]なのである。「神よ、皆が卑下するたった一日の最後の審判の日があればいい「そうしたら喜んで私は飛び去ろう。

しかし私の別の飛行に戻ろう。昨日二日目の聖霊降臨祭に私はフィーアロイター小侯国[*4]の上空で目覚めて、ちょうどその中央都市、首都の上にやって来た。ここで私はコーヒーを飲むことに決めた。パリ門のちょっと手前で私は私の気球の両コック、軽い気体の排出用と重い気体の侵入用のコックをねじ開けた「そして見張りの内側に猛鳥のように降下した。しかしそのため見張りは愚かに野蛮になって、市門の教理教師を呼んで来て、そしてこの教師が、私は何者であり、更に仕事は何か、滞在する際の宿と日数を知り尽くそうとした、私は全く丁重に対応した。ぶしつけにお尋ねになることも、守衛が斜めの遮断棒を真っ直ぐにして、その前で憤然と歩哨にお立ちになることも結構でしょう「小さな侯国やその首都は、小さな宝石同様紛失しやすいものですから、「仮に私が門の外の馬車に座っていて、門を見ている場合の話です。しかし今はご覧の通り、門を通過して、すでに中に入っているのです、と。彼は全く譲歩せず、私も譲歩しなかった。私が投じた部隊は、私の周りに見張りの部隊の半ばを呼び寄せることになった、つまり本来の意味の近衛兵で、彼らは胡瓜を食うときの他は自分達の耳の前で世にも並外れた物音を立てたことがないのであった。グラウルよ、君はあるとき言ったね。自分は境界の紋章の所に立ったら、侯国全土の上に小便をして容易に立ち去る自信がある、それほど侯国は狭いものだ、と。私は自分の周りの陸軍に類似のことを理解させようとして、軍に尋ねたのであった。ここでは「ある町では盲門の前に生きた守衛を置くように「同様に本当の門の前に盲の守衛あるいは描かれた守衛を置くことはできないか、その守衛であれば、全く交代させる必要はないだろう、と。

そこで軍は私をもっと真剣に攻撃し始めたので、私は単に私の緑色の外套を少しばかり広げてみた、すると召集軍を ― ひきがえるで打ち負かすことになった。つまりフィーアロイター侯国全体では侯爵自身が設立したフランス騎士団あるいは新フランケン騎士団ほど声望の大きな騎士団はなくて、侯爵は自らその大頭目に収まっているのである。ドイツ・マイスター[騎士団]、あるいはドイツ貴顕[騎士団]の例に倣って侯爵は自らをフランケン・マイスター、騎士達はフランケン・貴顕と称している。彼らは（というのは侯爵も私をマルセイユでフランケン貴顕に命じなければならなかったからで）ボタン穴に緑のリボンで黄金のひきがえるを着用している。 ― それは単なるひきがえるではないはずで（バイオリンの弓の毛留ほどの大きさである）、 ― 多分そのひきがえるはフランスの百合⁽²⁾（伝説によればひきがえるの遅れ咲き）に至るものである。

会計局にいるのでなければ、 ― フィーアロイターの騎士団参謀は蛙騎士団あるいはひきがえる騎士団の発明で胴巻きを何インチほども更に大きく一杯にしたか、少しも言う必要はないだろう。 ―― 単に他国の肩書きのために他国に黄金の粉末を飛散させることはなかったからである。まず侯爵本人が、侯爵は思うに最良の、それ故最高価な肩書きを要求していいものであるが、 ― 自らある肩書き、例えば高価すぎる青いイギリスのガーター勲章を用意する代わりに、真の国家の瀉血用包帯、 ― 国内の製品を身にまとうことになり、これは一文もかからず、一言言えばよくて、かくて無料でひきがえる騎士団の騎士団長、あるいはフランケン騎士団長としてヨーロッパの前に仕上がって立っていることになるのである。それとも一年中肩書きや綬を全世界に、しばしば最大の阿呆や外国人に投げつけてきた貴顕が、自らを選んではいられないし、自らの綬で自らどのように称えているか示してはならないとでも言うのか。

第二に、人間は絹製の綬の緩い綱の上で踊るのを最も好むので、金属弦[綱]の張られるべき国々では、人間や人間のお金を荣誉で捉えるためにバーゼルの勲章の綬工場はどんなに沢山設立しても十分ではない。蛙のせいで私と私の不正は安全な尊重されるものとなって、その後旅館に落ち着き、そこで早速床屋と侍従に使いをやって、接見の許可を得ることにした。私と侯爵とはかつてマルセイユで寄席の書き割りで出会ったことがあり、旧知の仲であった。本当のことを言うと、私は宮中をげんなりさせて、その後で空中にまた戻るつもりであった。私は受け入れられた。しかし私は控えの間のフランケン騎士団の間に接見の旗も、接見の舵も用意せずに、毛袋も刀も着用せずに出頭したので、少しばかり背中と側面をじりじろ見られることになった。ようやくフランケンの頭目がその妻と共に現れた。私は過去に対する生きた約束手形のように紹介されたが、しかし格別の褒賞はなく引き受けられた。 ― かつては若々しく抱き寄せてくれた両腕は ― 一方の腕は重い王笏をしっかりと握るために、他方の腕は王座の天蓋の桁、アトラスとして ― 全く硬直してしまっていて、柔らかな両手ははなはだ硬皮となっていた。彼は両肘を、道しるべの標識同様、私の周りに回すことができなかった。私は彼をこっそりと若干の青春の祝典劇に引き戻した、特にマルセイユのお忍びの宿、本来本当の寄席であった宿に引き戻した。当時私は、ちょうど今（この何か聖書外典の時禱のときに）彼の国のすべての説教壇では正規の時禱として領主の安穏と徳操とが祈られ、とりわけ無事に帰ってきて欲しいと祈られているであろうと彼に思い出させては、幾つもの日曜日の午前中、彼が取り乱すようにしたのであった。 ― 彼はその後いつもその劇場の窓際に行っては物思いに耽っていた。

しかし今は彼は強いて微笑を浮かべて、話を打ち切った。妃殿下は気位高く、私の身体の荒涼たる佇まいに目を向けていた。私は、鶏冠と蹴爪を有する多くの宮廷雄鶏の中で単なる雌鳥として — つまり毛袋と刀を有せずに存在していたのであった。彼女は本来、儀式的金箔やオランダ金の金箔師といったところである。彼女の接見用語のフォン[貴族に付く]は彼女の先祖アダムを[貴族の]先祖をわずかししか有しないあるいは全く有しない食卓列席無資格者として — アダム前人は記録に留めがたいので — 彼女の食卓から追放していたことだろう。彼女は古代ローマ人から、奴隷とか（中世の言葉では）使用人は、主人と一緒に食事をしたら自由人になると知っていた。

とうとう宮廷は食堂あるいは沈黙の部屋へ行軍を始めた。我々侍従団、フランケン騎士団は — 大抵フロックコート着用時以外は何も食べてはならず、脇に刀を帯びて鉢へ向かう人々であるが — それに小国のすべての大臣達が楔形になって進んで行った。そして侯爵一家が軽快にその後に従った。 — 舞踏会の女王としての退屈が、背後や前方に見られ、客人達の間に陽気な主婦のように飛び回っていた。

四十四個の単語が食卓に供せられ、四万五千の溜め息が見られた — 私は最大の溜め息供給者としてその供給を数える暇があった。君達ドイツ人よ、なぜ君達はそんなにしゃべらないのか、殊に宮廷ではしゃべらないのか、その上フィーアロイター人ときたら。会話は目覚めであり、沈黙は眠りにすぎない。ナポリではこう経験する満足が得られるとすれば、つまりどの床屋や仕立屋も別人を伴って他人の客の許に行き、自分が髭を剃ったり、寸法を測ったりする間に、話し相手、会話の比武の相手を有することになるようにし —

そしてプロンプターさえも箱の中に一人の舌の避雷針、一緒に話す人[子音]を有するという満足が得られるとすれば、ドイツでの一般的な舌癌、口唇癌に対して — 口唇癌のみが人間の病気であるが — 何と書いていいかわからない、そしてまさにこのことがまたドイツ的なことであり、沈黙である。ドイツ人は自分の話が終わると、というのはイギリス人が印刷された新聞なしには朝食を摂らないように、いつでも人間は口頭の新聞なしでは食事を楽しまないからであるが、フランス人のようにいよいよ美学的哲学的談話に移るということではなくて、ドイツ人はそれですべてお仕舞いになってしまう。

ただ三人の大臣だけが — 大文字あるいは頭文字で記載するとすれば、座長はそう書くのであるが — （それが役目であって）、時折賢明な退屈な言語を話す度胸があった。高齢で高官の方々はいつでも退屈の役権、英知の[科白のない]端役にとりかかる。人々は鳥刺しが兎の皮で行うような具合にする。人々はそれを裏返してフクロウの頭にして（ミネルヴァの甲冑に載せる按配で）、それから軽率な鳥を捕まえるのである。

ジャンノッツォはこうした鳥どもの先頭を飛ぶのを好む。私は昔からのホテルでの冗談に帰ったのである。つまりあたかも命が消えるかのようなふりをして、食事の領事館に若干の活気をもたらそうとした。最初私は顔に若干のそれほどひどくない痙攣を走らせた。人々は注意深くそれを見守った。更に幾つかの激しい痙攣を続かせた — そしていつの間にか失神に陥った。私はいわば従者達の甲虫の群れにぶんぶんと取り巻かれた。私が安楽椅子に戻り、正気に帰ると、楽しいことに皆が話しているのであった。ただ私を座らせて貰って、皆を再発の不安から救い出す必要があった。さてまた倦怠が生じ、食事がつまらなくなると、私は背もたれに寄りかかって、顔に瀕死の疲れた縮小文字、頭文字を描いた。しかし表情に弱いジグザグを浮かべるだけで皆が元気になって、私をまた真っ直ぐに

座らしてくれるのであった。禿頭の廷臣達は — 重ねて私にお世辞を言ってくれたが — 私の擬装のみられた正餐ほどに面白いものはなかったと口々に言ってくれる。私自身はそもそも、空中より落下してきて、また私が飛び立つ様を見たいと思われていたので、皆に歓迎された。夕方新宮殿に — そう公園の劣等な食堂は古代神殿の逆⁽³⁾として呼ばれていたが — 私はポケットに何ものかを、つまり客人を『[オルレアンの]乙女』⁽⁴⁾や他のミュージズ同様に大いに夢中にさせるものを、戯れに登った教会の塔の中で入手したものを、有していた。それは二、三匹のコウモリであった。

その後、広間の蛙騎士団とコウモリの間で陸戦、空中戦が始まり、公の報告に値することになった、その報告を私は次の堂々たるタイトルの下、外国の列強宛に起草した。

フィーアロイターの新神殿での蛙とコウモリの戦争

悪漢のジャンノッツォがまさに温かいスープの皿を前に座って、他の皆も同じ状態であったときに、彼はこっそりと左手をポケットに忍ばせて、ハンカチというドミノ仮装⁽⁵⁾の下、秘かに（宮廷の人々はスプーンに目を向けていたので）コウモリを取り出して、食卓の下で放った。数秒後には楽しい戦トランプが始まって、次席宮廷女官がまず前哨、捨て石の兵としてこの飛ぶ竜どもが上に向かっていくのを目撃し、「何」とは呼ばずに、すぐそれと分かって、「へい」とだけ叫んで、「捨て石の」を省いたのであった。別のレディー達は二カ国語で「あれま」と叫び、 — 何人かの殿方は「くそ」と叫び、 — 大抵はこの両方を発した。この戦闘の雄叫びで大方の蛙騎士団は安楽椅子から飛び上がり、またその上に飛び乗って、宮廷の稽古用刀を引き抜いて、即刻コウモリに一撃をお見舞いしようとした。頬と腹とが宮廷の極で凍った水のように凸面になっていた重々しい縦隊は床で敵を待ち構えていて、腰の銃剣を用意していた。従者の召集部隊は興奮して走り回り、大抵の者はナプキンの旗を持って、ナプキンで皿を持ち、飛ぶ軍団を狙った。何人かの者は皿を大きく広げた半ポンド砲で狙った — ただその団長は、つまり老いた真面目な、座業のうちに白髪と化した執事は、驚きの余り半ば気を失って、分別もなく立っていて、両不吉な鳥に肉切りナイフのサーベルを弱々しく振り回していたが、有利な側での指令の合図には見えた。 — ただ総司令官のフランケン騎士の頭目は、得がたい勇気を持って（宮廷全体がここで後世に対する最良の保証人であるが）まだ全く落ちていて五回から六回スプーンでスープを食したが、すでにスープは舞踏会のスープとなって、一般に小競り合いが見られ、大臣達は立ち上がり、大抵の女性や青年貴族は逃げ去っていた。 — こうした勇気の男ならば、自分が蛙騎士団の司令官でなくても、彼に期待されるほどのことしかしなかったであろう、つまり彼はスプーンを置いて、手に切り分けナイフを持って、翼仕掛けとの熱い戦闘に赴いたのである。悪漢のジャンノッツォについてはそれでも善きことを知らせなければならず、彼はチェスの女王たる侯爵夫人を塔[飛車]として守り、夫人の前で椅子に乗って、一本のフォークでコウモリを防いだ。いやこの悪漢は大いなる英雄達の欄に記入されることになる、というのは白刃の最中に冗談を言って、戦闘を船突き合い等々と呼んで、自分の蛙勲章をほとんど気にかけていないことができたからである。

さて自ら近衛兵の歩兵達に赴いたフランケン騎士の頭目が蛙軍団の先頭に腰を据えようと、太鼓となったツイスカ⁽⁶⁾[ジシュカ]のような作用を軍に及ぼした。 — 比類のない格闘が生じた — 蛙騎士団はまとまって、ようやく空中戦が、これまで騎士達は翼ある

ものに圧倒されて劣勢にあったのであるが、まさに厳しくそして有利に始まった。――
まことに女達の現在の叫び声――撃剣のきらめき――旗やコウモリのざわめき――
蛙軍団の突撃――コウモリの飛行を鳥占者として見つめている三人の大臣達の佇立――
まだ揺らめいているナイフを持った茫然自失たる執事――こうしたことすべてが一つの芝居を形成していて、このような芝居は新宮殿ではこれに勝る健気なものも見られなかった一方、これに勝る恐ろしいものもこれまで見られなかったのであるが、しかしまあその結果は別であった。というのは騎士団の頭目は幸い、敵の右翼をその切り分けナイフで仕留めることができ、本当にこれを突き刺したからである。その後すぐに――同じ時悪漢のジャンノッツォが左翼のコウモリの右の翼を巧みに間合いを取ってフォークで突き刺して、すべての危機を克服したので――すべての宮廷の人々が一緒に勝利者とコウモリの許に寄って来て、誰もが勝利者に誕生日の接見のときのように祝辞を述べた。フォークの生きた捕虜とその番人は大して気に留められていないように見え、その鳥を有する上述の悪漢は接見に単に赤い鷲[勲章]を有するよう見えたと、しかし殿下は黒い鷲[勲章]を有するよう見えた。

有名なフィーアロイターの戦いの終わり

蛙騎士団劇の後は陽気さが食卓仲間の上に長い曙光のように残っていた。彼らはその上夕焼けを所望した、つまり夜中の私の旅立ちである。それ故よくあるように私は皆から敬意を払われた。私はしばしば「尊敬おく能わざる立派な一行」を眺めた。彼らは雄鶏のように鳴くから、あるいは五つのカード術を心得ているから、あるいは半ば人間の分別を持つ一匹のむく犬を有するから、立派な人々であったのであるが、かくて私の最良の両球、頭の球と胸の球が、単に飛行船の球で持ち上げられることになった。――お礼に私は宮廷の人々に私の上昇後一時間注目して欲しい、私は上の星空の下、三回新神殿の周りを回り、下降すると述べた。

私は旅館に行って、上昇し、去った。

- *1 Vin tinto、アルガルヴェの最良のワイン、ほとんどインクのように黒い。
- *2 パラス博士によると鶏の頭の鶏冠はカリエスによって生ずる。
- *3 ジャンノッツォが荒れることになるこの数え上げで他の者達は心静かになる。その相手から浮き袋や浮き足[遊泳足]を奪い取ることのできない一軍の自惚れた[膨らんだ]者達という観念は、自分の吹き込む風で帆かけて行くそこらの自慢屋のそれぞれを、それに他人の吐き出す息で生きている虚栄者のそれぞれを、むしろ我々にとって一人の阿呆としてはるかに我慢のできる者にしてくれる。D.H.
- *4 本当の名前は、仮に検閲が星印をその代わりに付けないならば*****である。

第三航

魚のエデン ― サトゥルヌスの国 ― 小村ドルフ

地上の真の天国を有するのは多分海の魚を措いてないだろうと私はよく言ったものだ。私が海の魚、例えば鮫であれば、北極の冷たい天国の下に出現したり、冷たい地域の前を泳ぎ過ぎたり、ほどよい地域の前や赤道下に留まったり、人間のノルマン人のように人間を襲ったりして — それから世界周遊を続けていこう。 — 私はどこでも食べ物を見つけられることだろう、つまり海中の住人どもで、棒鱈どもだ。凍えるところや汗かくところに来て、鰭の下にはほどよい気候があって、そこにもぐればいい。何という立派な自由な広大な帝国があって、そこに我々鮫や他の魚は、若干の打ち上げられた大陸や島々の隣にあった、浮かぶ島々は少ないけれども、稲光も洪水もなく、旱天も不作もなく、疫病もなく住んでいることか。

昨日の夜、私は空中で、ほとんどこのような海中の魚のような気分になって新宮殿から出てきた。下界の牢獄の靄に比べて何という清々しい自由な大気か。こちらはざわめく夜の大気の海で、下界はじめじめした蟹の穴である。私はこの奥の窓を新鮮な風に向かって開けて、喜んで小さな郵便ラップを吹いた。私が立ち去った下の海の底では一人の盗人が教会に忍び入り — そこから遠からぬ地で一人の僧侶が僧院から盗人のようにこっそり出てきて — 森には密猟者達が走り — 畑では盗人の獣に番人達が向かって行き — 更には旅人や — 感傷家達等々が見られる。下々の民が私にとって何の関係があるか。私は就寝した。

すでにソシュール⁽¹⁾が上空での眠さについてこぼしている。私の高さでは眠気は更に募る。すでにサトゥルヌスの国の上空に来たとき、私はようやく目覚めた。本当にサトゥルヌスの黄金時代がまだ保たれているので、この国はその素敵な名前に値している。宮廷、宮廷説教家、それに会計局は侯爵に様々な誕生日にそのことを告げている、彼らはこの国のことを侯爵よりも多く旅して知っているからである。かつてヘシオドスが書いているようなサトゥルヌスの五年間が地上に存在するとすれば — そう彼らは言って、昔の賛美者の本を開けるのであるが、 — 至福の人間達が耕作をしないで、黄金も肉食もなく暮らす五年間が存在すれば、それはここ我々の国に隠されている、と。どこに労多い土地の耕作があるかと彼らは問う、土地はそのすべての恵みを自発的に生み出して、その恵みは勿論誰もが味わうわけにはいかない。ほとんど家畜小屋がない国ほどに血が流されず、肉が食されない国があるか。 — そして黄金に関しては、これはまさに黄金時代には単に名のみであったと証明されているのであるが、我々は真正な紙幣[書類]を手にしていて、黄金のアリバイを記録している。というのは合金されずに国内で流通している鉛は、まさにサトゥルヌス[土星]の真の記念貨幣、戴冠式貨幣であって、土星を化学者達は一致してこの金属の記号⁽²⁾に利用しているからである。他の国々では、しばしば政府は土星の下にある幸運な政府と呼ばれる。サトゥルヌスは、自分の領民ではないけれども、その年金皇子達を愛する余り食べようとするからである。

昼に私はサトゥルヌスの村ドルフ[村]で私と（勿論十分に貧弱なものであるが）村全体とに二ターラーと四十八と八分の五クロイツァー出して、食事を供した。村中の者がこのように豊かな者の慈善にびっくりしてやって来た — 金を含むパクトルス⁽³⁾川はいつもはその発生の地の下界からのみ流れてくるというのに、私はヴィート・ルンケル伯爵がニーダーイーゼンブルク・グレンツァウの自分の持分のために大審院税[*1]として支払った分を贈ったからである — つまり二・五ターラーの素晴らしい貨幣の山、ただのアルプ

スの小貨幣⁽⁴⁾からなる山にびっくりして — 申し上げるが村中の者がそれにびっくりしたり、酩酊したりして半ば正気を失っていた。

夕方私はウィーンで食べた。

私は今日はもう何も書きたくない。

*1 ファブリ⁽⁵⁾の『すべての身分のための地理学』[1792]第一部、第一巻、五三八頁。

第四航

ウィーンの移送 — 調教馬 — フォン・ファーラント氏 — 感傷的な悪漢 — 劣等な円形建物の穴

ジーヒコーベル号は日の出前に陸から離れた、まずウィーンにいたのである。しかし忌々しい意地悪な南風のせいで、私は上の方でまさに「ウィーン⁽¹⁾の移送」[*1]つまり放浪者の詞華集と共に平行して行かざるを得なかった。オーストリアはこの地方公会議をバイエルン宛にし — この圏はこの自称受禄僧達の東インド商会あるいはヨーロッパ商会を臨時財産として受け入れ、シュヴァーベンへ案内し — シュヴァーベンは野火のようにその圏を自分らで分割し占領するこの使節を保持して、かくて後に植民者や密使が個別に捜し出され、吊されることになる。帝国の病原因のこの転移がここに至るかぎり、シュヴァーベンは、ベネディクト派のドイツとかイエズス会のドイツ云々といった教団地図に做って、放浪者のドイツとして地図に表記できよう。

風は移送よりももっと真っ直ぐに吹いたので、私は直に分岐してしまっ、ある郵便局長の許に行った。彼の息子はそのポストを継承するしか能がないのであった。彼は私に馬小屋のイギリス産の馬を見せ、触らせた。その馬は脱帽や死んだふり、接吻、お辞儀を理解していた。私は彼になぜその馬に自分の息子の教育を任せて、この狐を自分の家庭教師、行状教師、調教狐として騎乗することになるようにしていないのか尋ねた。この男は自分自身がさほど進んでいないのであった。さもなければ自分はいつでも死んだふりのできるこの曲馬、ミュージズの馬に乗って、ペスティッツ劇場の悲劇の稽古に出掛けて、俳優達がこの狐から生計のために死ぬ術を学ぶよう手配するのだがと言った。

その一日はそもそも一日を味わうに値しないものだった。その上夕方には夕方のせいで腹が立った。日没の直前に私はミュラーンツ[*2]の町が六マイルも離れていないのに気付いた。「自分はこのねぐらに泊まることができよう」と私は言った、「こんないい追い風を受けて向かって行けるのだから」。公園の近くに、公園を越えると町の中に入るのであったが、月光の中をフォン・ファーラント氏が（名前がすでに忌々しい）、全く黒に着飾った一人の女性と歩いていた。私は — 最も高い雲の上を飛んでいようと — 両腕の動きですぐにファーラントと分かった。彼はミュラーンツで美学の分野の検閲官をしていた。今日であっても彼には地獄の夜に出会って欲しいものである。君達か弱い女性よ、君達のうちの誰が、善良な老いた、いつも忠実な乙女のままのアブヴィル[*3]を公正さ故に除いて、その身に降り注ぐ最大の炎を、つまり詩的な炎をしのぐことができようか。君

達の蠟製の偽の胸の背後で — 現今象徴的に流行しているように — 似たような蠟製の心臓が鼓動していないか、それは寒気の中でだけ固く変わらずに姿をとどめているが、しかし男性の詩的な炎の前では溶け落ちるもので、先を天に向けてはいるが、基底面は地面に据えて養分を得ているのである。

フランスの官能的な正直な道楽者はかつて一年に三六五人の女を有したが、しかし次々に有したそうだ。しかし詩的なならず者（魂を車裂きにする者）は同じ時に三六五人の女を一緒に有して、同時の愛と称し、これについては J.P.がその『ヘスペルス』で無責任に軽く触れている。私ことジャンノツォ、フィーアロイターの蛙騎士、フランケン騎士は確かにかなりの点で、他人の背中に無数の点を傷付けるように、自分の胸に傷付けなければならないし、また私がパリやウィーンで出会った者のうち、私の墓に抵当権付きの保証を、つまり私が徳操の鑑であったと銘文を刻ませる者は誰もいないであろう。実際私はいつも罪を犯してきたし、それで消え失せろというわけである。しかし私は逆に決して、哀れな愚かな女性の心をエーテルで膨らませたことはなく、この球を自分の炎で高く飛ばしたり、低く飛ばしたり、最後に酷な切れ込みを入れて、長いこと引いたり、膨らんだり、泣いたり、迷ったり、ためらったりした後、私の足許に弱った皮[膚]となって崩れ落ち、自分や私にうんざりしてしまうようにしたことはない。 —

「しかし汝、ファーラント、ファーラントよ、汝は四つの町に八人の許嫁を有し、五番目の町で九人目の許嫁と結婚するのではないか。こんなに遅く、公園で黒いヴェールのフクロウの女性と何をしたいのか」と私は上方で言って（戦争用の望遠鏡で）彼の欲していることを見守った。

私はやはり前もって知っていた。彼はポケットに一冊の本を収めていた。これと決めた一冊の長編小説で、多分フォイヒト・ヴァンゲン[湿った頬][*4]生まれのジャン・パウルの本である。Pagina jungit amicos.[書物は友達を結び付ける]。つまり涙の本からの一頁、あるいは二、三頁は恋人達とその体を接合する、あるいは媒酌人である。Assertit A, negat E, verum universaliter ambae.[Aは肯定し、Eは否認する。しかし一般的には両者なのだ（割り切れない、しかし論理学では全称肯定と全称否定)]。つまり彼は愛を肯い、彼女は愛を否認し、しかし両者は単にあてもなく漂い、まさに見下ろしている私のような状態になっていた。両者は私の追い風同様に円形建物に向かってるように見えた。その建物の中は上から大きな穴を通して見る他なかった。ファーラントの人差し指は、自然の本にとって写本余白の筆跡のようなものだった。彼の心は鶏の目のように美しい天候を感じ取っていて、彼の感情のマウトナー探査針で自然のすべての美しさの中に、星々や甲虫の中に分け入っていた。ファーラントは、彼の盗人の一味同様に、夕焼けや森のすべてを単に女性の心への魔法の根と考えていて、心というこの人間の錠前を開ける手段にしている。こいつらは地球や若干の天球や第二世界で愚かな納屋の小鳥たる女性のための罠をこしらえる。

美学専門のこの検閲官が円形建物への感傷旅行の途次にあるのが私には面白かった。私は上の微風に対して、その先引きの馬として櫂を用いて加勢した。検閲官はすでに海賊船の旗たる白いハンカチをひらひらさせて、眼球を拭いていた。黒服の女性も白いハンカチを広げて、同じように拭いていた。天よ、彼らを円形建物の中に追いやって、私をちょうどその穴の上に置いて欲しい。 — 美学専門のこれらの検閲官から不幸を、つまり不幸についての嘆きを取り上げてみるといい。すると彼らの幸せな愛は取り上げられてしまう

のだ。ぶなの実で育った豚のベーコンが燻製棒の許でそうなるように、この種の滴りは絶えず滴り落ちて、この滴りの落ち行く先の心臓を溶かしてしまう。私は、優しい音楽のせいで、今や全く興ざめして冷たくなってしまふ十五人ほどの男女の束を数え上げてみたことがある、彼らは単に最良のエロチックな苦悩が夙に台無しになってしまい、嘆きのエリアで悔やんで泣くに値するすべての損失という損失に気付いたからである。

ハンカチは — これは髭のある子供達のよだれ掛けであって — かつてこのような魚どもの間で私が見た最良の心の鱗である。少女というものは石灰のようなもので、フレスコ画家が濡れている間だけ作業し、描けるようなものである。なぜ私は悪魔かその祖母ではなくて — 火成論者たるには余りに情けないこのような水成論者を連れてきて、地獄で乾かそうとしないのか。

半月が空のモスクの中程にトルコの月のように懸かっていた。二人は自分達の方を見ずに、ただ月の方を見ていた。月は宝石の飾りのように二人の髪の上にあった。従って二人は眩んだ目で私を見て、ほんの百歩しか離れていない私の天体に気付かずにはいた。風もなく物音もせず、それで私はファーラントの言葉に聞き耳を立てることができた。彼はこう言った、「気高い方、法外な運命の圧力なんかありませんか。 — いや私はそれに獅子のように立ち向かいます、私の心があなたの心の許で鼓動しさえすれば」。この共同の鼓動は — 脱臼した接触をしなければ — ほとんどできないことだろう、二人の心臓のうち一方が右に飛び出してくる場合は別である。

最後に彼は月を眺めて、月に、 — あるいは周知の月の男に、それが月の下にいる男、つまり私のことでなければ、その男にこう尋ねた。 — 汝は（月、あるいは月の男、あるいは私）自分と共に夢中になり、苦悩し、変転するので、それでひょっとしたらかくも静かに神聖に輝いているのであろうか、と。「しかし私はこっそりと秘かに汝の神殿の中で汝を見つめたい、一緒に参りましょう、神聖な方」。こう言って、自ら円形建物の栓口から月を静かに眺める提案をして、黒装の女性と神殿へ入って行った。 — 私は上の方で付いて行った。

この年鑑を読むことになる然るべき水夫の方々にとって、気球船員の必要とする言い難い苦労は長々しく描写するに及ばないことだろう。少ない風や — 水平の距離 — 垂直の距離 — 二つの空気栓の開放 — 半ば沈みながら、半ば爆弾のように二つの距離の間で描くことになる弧 — これらをしっかり計算に入れて、最後に一気に（栓は全開されている）円形建物の穴に収まるようにするときの苦労のことである。畜生、私は勿論そう発して、停泊した。しかしこれ程忌々しいことはなかった。私は私の輿に乗ったまま入り口で引っ掛かってしまった。輿は両ドアの取っ手の真ん中に止まってしまい、私は開けることもできず、若干のバラストを投げ棄てて、汗の穴からまた浮かび上がることもできなかった。 — 私は私の気球をさながら聖ピエトロ教会の[二重]ドームのようにこの神殿の上に置いた。

とりわけ私は私のプロンプターの穴から静まりかえった二人に、二人が逃げ去る前に若干の破門の言葉を投げかけようと思って、輿の中で自分の気持ちを述べた。「美学分野の検閲官殿、ここに惨めな状態で貴方の上に浮かんでいる乗客は — 自分の精神が惨めというわけではなく、見張り台が惨めだというわけだが — 貴方のことを知っていて、上空で皆聞き耳を立てて聞いていた。貴方は偽善者だ。私の下の円形建物の中にいる黒い可

愛い鷺鳥を相手にするときにはそんなに跳ね回るものかい。心を盗人の親指のために、
— ペガソスをこの単純な野雁に対する獵馬のために — 素敵な夜を夜の罠のために、
星空を雲雀獵の鏡のために用いるのかい。鳥狙いの名手殿。君達悪漢は月を妖精達捕獲の
鉄罠として、虹を鳥罠として用意していないか。 — 当てこすりが散漫であるが、しか
し私は悪魔にその遣り方を尋ねているのであって、検閲官殿、倫理を尋ねているのではな
い。 — それに涙の大砲鑄造とくる、君達が千々に砕けていると描く自らの心は、かつ
ての先祖達のズボンのようなものだ。 — マグダラのマリアは罪を犯したが、しかし
その結果泣いた、しかし君達は泣いて、その結果罪を犯す。悪魔的なアンチテーゼである
が、しかし行為における対立だ。出来るものなら、忌々しい銃眼から、単に発砲するだけ
の銃眼から降りて行きたいものだ。 — 参上申し上げたい。 — なぜ下では誰も反
論しないのか — 静かな悪漢よ、汝はどこにいる」。 —

しかしたまたま視線を公園の方に注ぐと、言葉を浴びせられた二人はすでに私と私の吊
り説教壇から遠く離れて、月光に照らされた丘を越えていた。私はそれ故 — 一晩中説
教壇入り口に吊り下がっていたくなかったので、輿の窓を割って、屋根に這い出て、立腹
のために、さながら屋上に据えられた赤い雄鶏という按配であった。長いこと叫んで荒れ
狂った後、ようやく公園の管理人に見つかって、管理人は座っている私を見て笑い飛ばし、
下に連れて行ってくれた。

- *1 ウィーンから年に二回このようなやくざな群れは渡り鳥のように渡っていく。
- *2 地図で*****と言う。
- *3 *Semper fidelis*[常に忠実な]と、この町はその忠誠心のせいと呼ばれ、また乙女と呼ばれた。決して征服されなかったからである。
- *4 ジャンノッツォ工房の職人挨拶のこのような言葉遊び、あるいは遊びの言葉を私は決して高くは評価しない。彼が単に女性の読者に対して、また私が時折女性の読者のために立てた記念碑に対して攻撃している先の長い嘲弄的箇所全体を私は消しもした。D.H.

第五航

フォン・ゲーリシャー氏 — ミューランツ人 — 絞首台記念祭と記念演説の為のブ
ラン

船室の窓をガラス屋に送る必要がなければ、誰も一日でもミューランツ人の許に留まり
たいと思わないだろう。私はヨーロッパで少なくとも三十回会ったホテルでの知人ゲーリ
シャー氏の客人という榮譽に、他の十二人と同時に与ることになった。我々兩人ほど互い
に気を遣わない間柄はない。「ジャンノッツォはとても楽しい道化で、才能に欠けてもい
ない、しかし悪意があって、凶々しい」と彼は言った。私はフォン・ゲーリシャーは人間
の代表であると言う。多くの言語と知識を有する彼の頭脳から — 偉大な名前を有する
彼の系図から — 絵画の陳列室、音楽室、図書館、金庫から、人類のすべてのこうした
真珠から単にくるみ割りのようなすり切れた受け身の役を演ずるだけで、他の人々にただ

中身だけを渡すのであり、(本人のような者を除いては)何も生み出さない、作品も、幸運も、不運も、いたずらすらも生み出さない奴である。この生きたダッシュ[思索棒]を線を引いて消してしまえば、校正したことに気付かない、まだもっと長い線が残るからである。申したように、彼は人類の懐中鏡である。 — 天から明るく守護神が降りてくる、守護神が通ると雲は広く輝く。そしてエーテル的精霊が大地に触れる。すると万事が変わる — 岩々は裂けて、静かな偉大な形姿を見せる — カンバスや壁には遠くの神々やその天国が反映される — すべての物体が、弦や木材や黄金が鳴り響き、大気は歌に満ちる。 — しかし鈍感な人間の群れは放牧場から頭を不思議そうに少し持ち上げて、また背を曲げ、草を食み続ける。ただ少数の者が聖化されて、神々しく跪く。

ミューランツ人に関しては、この静かなコーラス、咀嚼セットを共同牧場から神が追い払うことはない。三ポンド以上間違うことなくこの人々をもっと詳しく査定してみたいと思うだろうか。私と一緒に今日ゲーリシャーが行った大舞踏会に行くといい。ミューランツの身分のある者は皆いた。勿論彼は — それが彼の価値ある唯一の所有する肩書きであるが、自分に古いドイツの書物のように肩書き[表題]がないことに価値を置いているのである。学的貴族というものがあるように、黄金による貴族があつて、これは貴族として食卓に列席できる者達に公の食席を設けることができる。

彼らは来て、見て、勝った — 食卓で期待していたことすべてに勝った。いやはや。啓蒙された十八世紀人というものがいて — 彼らは全くフリードリヒ二世に味方しており、節度ある自由、立派な気晴らしの読書、節度ある理神論に — そして節度ある哲学に賛成しており — はなはだ幽霊現象や陶酔、極端なことに反対であつて — 彼らが詩人を好んで読むのは商売の利となり、堅苦しさからリラックスするための文体論としてであつて — 彼らが小夜啼鳥を楽しむのは、イタリア人の楽しみ同様、焼き鳥としてであり、ミルテを、スペイン人のパン屋同様に、オープンで暖めたのであり — 彼らは偉大なスフィンクス[*1]を、我々に人生の謎を与えるスフィンクスを殺してしまったのであり、剥製の皮を持ち運んでいて、他の者が一つの謎を仮定すると一つの奇蹟と見なさざるを得なかったのである。 — 天才を我々は決して非難しない、ただ磨き上げる必要があると彼らは言っていた。 — 彼らの凍った精神が燃え上がるのは単に一つのことに対してであり、つまり肉体に対してである。肉体が堅固で現実であり、肉体が本来国家であり、宗教であり、芸術である。ベルリン月刊誌は肉体に仕えるべきである、と。 —

磨かれた日常性のこの安光りする鉛、この蒸留水、この美化された地酒は何と厭わしいことか。 — 私はいずれにせよ夙に長く長患いの人類を通り抜けてきて、心の厭人というよりははるかに頭の厭人となってしまった[*2]。結局どの頭も我々をその岸边と海底とで驚愕させ、震撼させてきたからである。

しかし君達一般ドイツ文庫的人間ときたら、君達コピーのコピー機械よ、自分の似姿以外は予感しないし、推測しない君達は何と幸せなことか。というのはデズリエール夫人⁽¹⁾がその牧歌ですでに人間よりも羊を幸せであると称えているとき、人間と羊の双方である者に至っては何と幸せに違いないことかということになるからである。

しかしミューランツ人には並外れた人間がないわけではなく、時々若干の月並みな人間が立ち上がっては、フィヒテ学派と共に月並みなことが多すぎると苦情を繰り返している。ゲーリシャーの舞踏会でも三人のこのようなティトゥスの[短髪の]頭の者達が跳ねて

いた。かくてピエモンテではピエモンテ人同様に[余計な]甲状腺種を有する犬が見られるし、アジアでは人間の痘痕を有する猿が見られる。

明日は 一 唯一の喜ばしいことだが 一 長い市民的、規範的、軍事的、貴族的行列をしてミュラーランツは百年前の都市権の[封土]授与を祝うことになっている。ドイツ人はその祝祭や行列、戴冠式、その他の祭事ほどに、より魂の抜けたもの、より退屈なもの、より冷淡なもの、より官庁的なもの、よりナイトガウン的なものは 一 その比較級を除くと 一 有しないので、私は真夜中遅く、今書いているように、若干腰を据えて、何か嘲笑的なものをまとめている。これを私は、明日わざと公衆に気球を上下させて操り、祭りに割り込んで、長い行列に対し、当局宛に投げ降ろすのである。次のような文面である。

ミュラーランツの絞首台記念祭への短いプラン

都市と絞首台は 一 地形的な意味ばかりでなく 一 接近しており、すべての刑法学者が絞首台を単に町の最も離れた入口、前哨と見なしている。その付け柱の三叉の戟は町の風紀の三項式の根であり、万事の基礎となる三人の国家審問官を形成している。

絞首台を見るものは喜ぶ、というのはこの三本の材木のテレグラフに従って、あるいは町のこの六角のビール看板に従って、早速町が続くと知っているからである。

それ故に 一 明日きっと歓呼の行列の上を飛ぶことになる全く余所者の男が、 一 下界の祝祭への関与を次のように表明しても悪くはあるまい、つまり自分は絞首台記念祭に際して、即ち祝祭都市のこの間近な梁の突出、異教徒の前庭の記念祭に際して、当局に記念として以下のような拙案を残し、投下するものである、と。

記念の台への行列は下の市庁舎で形成し、以下のような順で出発する。まず特別被告人達が行く、白い服で、本当の拷問脅迫を受けてこう言われるのである、これからお前らを吊す、と。最も年取った者を実際選んでもよかろう。 一 その背後に男女のすべての一般被告人達が続く。百年前から肖像画で吊された者達のデッサンが彼らの胸にメダルとして懸かっている。 一 これらに続くのは（彼らの名誉が傷付けられてはならないが）、曝し台にさらされたこれまでの端役達である。曝し台は最も偉い刑法学者達によっても、北の柱の位置に立つ記念のパンテオンに至るための単なる移動神殿、祭具室にしか見られなかったからである。

彼らのすぐ後ろには検事と弁護士が続き、手に長い巻紙を持っている。さながらこの貴人達が祭日に職責を果たすつもり、つまり告訴し、弁護するつもりであるかのようである。

端役達と弁護士達の上に三百もの要塞の荷車の砲列隊が、それぞれに百年もの間の犯罪記録を載せて行けば、単調さが破られることだろう。荷物車は 一 出自が分かるのであれば 一 その皮がかつてこの記念祭の道の上を引っ張られていった雌牛の子孫によって引かれたらいいだろう。

警察当局が今や行進して行く。 一

罪を犯した街路掃除夫⁽²⁾達が時々皆の間に入って、巧みに掃除する 一 彼らは祝祭を引き立たせようと思っている。

死罪審問官達の後には刑事担当官、高い仕事の大家[死刑執行人]、女傑[女性死刑執行人] 一 幾つかの古い証拠物件 一 盗人の親指[絞首刑者の親指] 一 砕けた椅子やベンチ 一 鉄槌、それにいやはや、他になお付属品として飾りとなるもの、取得できる

ものである。全部を挙げるとしたら、私は阿呆だろう。

死罪裁判従者達には踵を接して学僕が続き — これには聖職者が — これにはまた当局が — 最後には両脚を有して、絞首台記念祭の意味を解する者達が続く。 —

先の方で反撥する極、悪漢どもから成る記念祭随員の極に対して、後の方で引き付ける極、賭博者から成る極が照応して、それで（気取って言うことが許されるなら）長い記念祭の列が両端で磁性を帯びるならば、そして真ん中は中性であれば、理性的で対称的なことになろう。しかし賭博者達は真ん中から出ようとはしないだろう。

絶えず死刑執行を告げる鐘が鳴るが、しかしすべての鐘が鳴るわけではない。

行列が絞首台に着くと、花の鎖の列は小さな花輪となって絞首台を取り巻き、台を真ん中にして絶えず万歳の声が挙がる。町の軍隊は三回祝砲を放つ。上の三本の支柱の間では梯子の上すでに神父がいて、記念祭の人々を夙に待ち受けていて、町の人々に彼の真の榮譽となる次のような祝辞を述べる

「尊き記念祭の皆様。

私の立っている重要な場所が私の臨時説教のテーマです。私ども皆が集まったのは、私とその間に立っているこの三本の支柱を私どもの倫理の隅柱として、国家を支える女像柱として記念の式典で敬うためです。私ども皆にとって誠実さとか所有権の尊重というものはこのヘルメスの柱、このイスラエルの民の指導的雲の柱、炎の柱を日々眺めることによって何と容易なものになることでしょう。すべての町の教会は三つの塔を持つこの円形建物の支部教会にすぎないように見えます。この円形建物が内城のように町と町の一般的安全と徳操のために見張っています。妊婦のように盗もうという広範な欲望 — これは子供達や未開人によって私どもに引き継がれているものですが、これに対してはミイラ達の吊られる公的な場所が効き目があります。ミイラ達は宴会のときのエジプト人のミイラ達とは違って、私どもの戒律説教師、[フリーメーソンの]恐怖の兄弟となります。

いや、この記念祭の行列の先頭を歩む人々のように非常に堅い人々ですら、この公の礼拝堂に入り、敬虔な礼を行うと信心深い人々が変わるのです。この百年の間にここでその垂直な埋葬を求め見いだした贖罪の人々の名簿を後で私が読み上げますと、悪魔の許に行った者は七名としないことでしょう。他の者達は皆通常の刑事贖罪の後で — つまり特別聴取の告解、鞭打ち（他人の手によるものですが）、蠟燭責め（これも他人の手によるものですが）の後で — ここでこの刑事上の[痛々しい]伝道の中で全く改心し、生まれ変わり、即刻変わって、正しい狭い道に踏み込み、勿論数分で終わったのですが、祈祷の下、ロヨラ[*3]のように、全く宙に浮かんだのでした。 — かくて彼らは容易に神殿の門に法として貼られることになったのでした。

さてこの再生は、何の結果であれ — つまりすべての高みは山の高み同様に人間を浄化するという結果であれ、あるいは沐浴客の吊り下がる空気浴は湯の場合と同じく、内部の人間をも洗う[*4]という結果であれ、身分のある老いた罪人達にも同じように効き目があって、カプチン派の僧から綱を受け取ってここで成仏前に彼らをしっかりと据えて、さながら臨終前にカプチン派の帽子を被る按配にすれば、同様に改心することでしょう。彼らに対して私と共にこのことを願わない者がいまいしょうか。

国を支配するこの三叉の戟をご覧ください。そしてこの戟が百年間名誉を保たせている

ミューランツ人の中で殊に三つの階層、破産者、海賊出版者、賭博者を数え上げてみてください。この載のお蔭で、破産した会社は — これは普通は帝国法によると[*5]盗人に入っているのですが — 盗人のように街路にピストルを持って、また梯子に乗って窓際に立つ必要はなく（これはいつでも名誉と人生にとって極めて不適切であります）、そうではなく、家に留まって、ナイトガウンを着て、事務所で、極めて上品な安全な遣り方で魂の力を、つまり哲学が欲求力と呼んでいる魂の力を、全面的に展開できるのであり、会社は紙幣[書類]貴族同様、紙幣[書類]海賊によって皆の商売の友となるのです。盗人と呼ばずに人々はギリシア人と共に、響きの良さのせいで友と呼びます。しばらくすると破産した商売の友は、家々に侵入する代わりに、ただ家々を没落させ、多くの他人の店を壊す代わりに、単に自分の店を閉じます。さて彼は（国家としては、すでに古代ドイツ人とほとんどすべての未開人が国外での盗みを認めていたことに上機嫌で気付くことでしょう）国内の富籤同様に他人の金や財産を国内に集めていたのです。しばらくすると裁判所が彼のために和解教書[*6]を、さながら帰路の海賊認可状のように仕上げてくれて、それから — 今一度海へアルジェリア人として出帆するのは別にして — 最良の財産を有しながら皆に尊敬され家族と共に引退し、鰐のように田舎で掠奪物をむさぼります。それ故我らの中の破産者にとって絞首台が尊くない者があるでしょうか。

海賊出版者も絞首台の三つのヘラクレスの柱[ジブラルタル海峡の両端の山]を頼りにしています。この比較の第三項を取り壊すと、悪漢は女子供から逃げ、シュペサルトの森へ走り、大市の商人達を大市の本の代わりに待ち伏せします。いつもは盗みをしていたような — 何と多くの海賊出版者達がこれまで実直に、国家の庇護の下に、国家は彼らをロンドン周辺の秃鷹のように大事にするよう命じていて、単に自分達とその出版者である出版者の高笑いの法定相続を通じて — 相続と私はジプシー達と共に言いますが、ジプシー達は響きの良さのせいで盗みのことをそう呼びます、 — 自分達の家族を含めて立派に稼いできて、かくて彼らは単なる謝礼で建てたマイヤー⁽⁵⁾氏の邸宅[*7]の代わりに、もっと大きな、不法謝礼で建てられたトラットナー⁽⁶⁾氏の邸宅を路地に築くことができたのであります。何と多くの者が単にこのことを名誉心から、引き締まった垂直な綱に吊り下がって踊りたくない、私の申し上げている台の上でそうしたくないと思ってなしてきたことか申し上げます。

この長所は余り顕著なものではありません、ドイツの国家にとっては四人から七人の悪漢の処刑や逝去はたいしたことではないので — というのは印刷インクを四盗賊酔あるいは七盗賊酔[*8]に変えるような貴人の数はTからZまではほとんど挙がらないからで、 —
— すべての海賊行為の利点は、すべての読者が、トラットナーより全く別の意味の高貴な者達が、この葦から笛を作っているのだから、たいしたものではないと言えましょう。しかし重要なことは、まさに皆が共に盗んでいることです。

全面的剽窃者が謝礼や賞与を節約して得ている略奪をすべての購読者が自分達の間で分け合っていて、その盗賊の首領は剽窃者本人です。再印刷のそれぞれの購入者にはほんのわずかなグロッシュェンの相続分しか渡らないけれども — それでわずかな販売価格から彼らの名誉心にとってすべての恥辱の色合いが必ずしも消えるわけではなく、 —
かくて盗まれた財産は反復によって — 全図書が模刻版によって集められるならば — はなはだ増大します。この他にも自らの立派な魂を模刻された他人の立派な魂へと高貴

化するため接ぎ木するという目的の刻印がなされます。というのは人々は単に愛する倫理的な名誉ある人あるいは著者からのみ盗むからであります。ニトリではただ恋人から些細なもの、小さな装飾品を盗むようなものです。かくて文芸の月桂樹がパルナソス山でのように絞首台の支柱の下で育つことになります。

最後にこれらの上述の支柱の他に、私どもにかくも立派な賭博者を提供したもの、形成したものがあつたでしょうか。ドイツの歴史は私どもに、貴族はかつて「鞍や鎧」によって生きていて、つまり青空の下での盗賊行為によって生きていたと伝えています。帝国は盗賊行為を三つの支柱によって、室内[四つの支柱の間]での盗賊行為に限定しましたが、それはファラオとかヴァン・タン、クレプス[賭博]云々と呼ばれるものです。それ故単なる市民階級の人間は賭博を許されていないのです、盗賊の館の権利を有していなかったからです。スパーではユダヤ人でさえ、賭博場の元締め[銀行家]とか胴元になろうとする場合には、こっそりと自らミカエル騎士団員⁽⁷⁾に昇格する必要があります。はなはだ賭博や盗みの横行する大市の時期に絞首台を壊し、また賭博台を壊してしまえば、用済みの元締めは早速馬に乗って、間近の峡谷に入り、家畜商の金の胴巻きに手を伸ばすことでしょう。―― いや絞首台と名誉心を残し、カルタ遊びを残すことです。

そもそも ― まず長いこと分割して話す必要のないことですが ― 私の三つの支柱はその果実模様彫りと共に国家のすべての階に至ります。一般に人々は良心の呵責、良心の懷疑を有します ― 空腹と満腹が混在する統治形式で世を治めています ― すべての身分が有するものは少ないけれども、多くを欲します。―― それでも盗まれるものは少ないのです。というのはこれらの記憶の支柱があつて、それが一般的不如意から一般的徳操を形成しています。これらの支柱が我々の各人を全体では禁じられた木の養分の枝[生業]へ、貸借へ、清算へ、生計へ、官職や子供達や正義との小さな沿海貿易へ導きます。

― 人間の体同様にただ管からできていてる国家では、どの衰弱した体でもそうであるように、吸入する管が発散する管よりも一層強く働きます。それ故あらゆる金庫が見られず、町の金庫、救世主の金庫、連隊の金庫、税の金庫です ― 役人達は、生存の厳しい時代が来ると、神に名誉心を請います[*9]。 ― 正義の広い道が、ハンガリーの広い道路のように、実り豊かな土地に見られます ― 首都の猛禽は襲うためにもっと高く上がります。すべては栄え、世は正直で、満ち足りていて、絞首台は一般的な保護者となります。

絞首台には勿論時々何人かの悪漢が吊されます。下の今日の記念祭に同様な吊り下がりを目にするようなものです。しかし吊り下がりに対してこの絞首台の階段の魅力的面を示すこともできましょう。私は、すべてに対して慰めを述べるべきで、死者と喪主とが一人の人物を形成するこの場で悲しげな随伴者を眼前に有する聖職者として慰謝の説教をする義務があります。従つて、君達特別被告人や他の被告人よ ― かく述べて私は君達を慰めることにしますが、 ― 皆死ぬ定めである、従つていつかは、それ故この商業の友好島でも死ぬ定めであると考えなさい ― すでに君達以前にここで自らの錨、結末の装飾画となつていて、それにまた君達以降にそうなる途方もない団体を熟考しなさい ― いや生きたまま刺し殺されたり、膚を剥がれたり、油で煮られたりしたらもっとひどいことになるかと考慮しなさい ― 君達が差し出すのは君達の生命というよりは（生命は締め綱の後も続くのだから）君達の貧しさである、なぜなら国家は、上部エルザスのブロッツハ

イムでは、沃野伯爵候補の二人の同等に高貴な若者達の場合、まさに最も貧しい若者に花輪と記念硬貨を渡すように、二人の同等に偉大な候補者のうちまさに貧しい者をこの三本の記憶の支柱に選ぶものであるからと考えなさい — この件につきまさに慰めとなる絵を描いて（というのはヤング⁽⁸⁾が言っているように、死ではなくその絵と壮麗さが、つまり鐘の音や説教者や連れ出しがびっくりさせるものであるからで）、この件を穏やかに罰金遊びの罰とか単なる市民としての死[公権喪失]、宇宙的な日没、演説中断、沈む調子[の音楽]、カール五世のような見せかけの自己葬儀で、勿論カール五世と同じで結局本物に終わってしまう葬儀と呼びなさい — そして君達が更に他の弔辞から思い出される、私には長すぎる香油を塗るならば、例えば人生や吊り下がりの短さとか、試練の時とか、諸惑星の多さについて塗るならば — 君達は他の者達が（自分の場合であればなかなかできないことであろうが）君達を吊すことに悠然と耐えることでありましょう。

互いに、絞首台は生を保つが故に万歳と叫んだならば、この絞首台を去ることに致しましょう」。

その後人々はまた行進して戻って行く。 — 夜には極めて味わい深い町と絞首台の照明が見られる — 絞首刑税による質素なご馳走があり（その節約のために一人の悪漢が釈放される場合がある） — 貧しい者達には多く渡され — その際祝砲がなされ — 健康が祈念され — 夜遅くまで、いやもっと長く舞踏会があり、...忌々しい。全部述べなければならぬだろうか。

- *1 周知のようにエディプスは殺したその動物を一頭のロバに乗せた等々。
- *2 というのは心は無限であって、永遠に新しいからである。我々は最大の美や真理には飽きることがあって、享受することでその魅力や概略を台無しにすることがある。しかし立派な行為は古ぼけたものとか頻繁すぎると思われぬ。倫理的な魔力や享受には時間を感じられない。この心を勇気づける無変化は自由な心の果てのなさに基づいているだけでなく、我々の本性の独自の仕組みにも基づいていて、つまり我々は倫理的な美や自由、功績は単に我々の外部にのみ見だし、従って愛することができるのに対し、我々の内部には単に倫理的な真実や必然性を見だし、認めるのである。私はいつかこの、内部の人間全体と経歴を貫く差異について詳しく調べてみたい。A.d.H.
- *3 彼と他の人々について、彼らの体が信心の間空中に浮いたと語られている。
- *4 以前はそう信じられていて、それ故魂の湯治と呼ばれていた。
- *5 クヴィストルプ⁽⁴⁾の『刑事法』[1770]九五頁。
- *6 この教書は六%から七%の割合で盗んだ財産の所有を認めている。
- *7 哲学者のマイヤーはハレで一冊の本の見返りに家を一軒得た。
- *8 イタリアでは「四人の泥棒の酔」は「七人の泥棒の酔」と呼ばれる。
- *9 アウグスティヌスは祈った。私に純潔を与え給え、しかし今すぐではない。

第六航

世界劇場 — ブロッケン山 — ブロッケン年報への悪魔の印刷出版許可と序言 —

ソロのメニュー

今日私は早めにジーヒコーベル号を出帆できるようにして、退屈な記念祭の列の右側を飛んでいった。行列の前方と後方が青虫の足どりになると、私は錨を揚げて、気球船は五秒後に最高速度になった。私は記念祭のプランを私のハンモックから糸で垂らして、糸を長くしていった。ミューランツの歓声は消え — 町の人々はコーベル号を見つめ — 祝祭は好奇心に呑み込まれ — 私の短艇は高い青空の中に揺れて、私のプランは沈んで行った — 行列の青虫どもは前進して行ったが、頭で見上げていて、その中で吹奏したり歌ったりしている者達は譜面やテキストに悪態をついて、百度もそれらから外れていた — 感動の欠如とか目的に対する冷淡さ、私の昇天の後追い、その際のもどかしい足並みは惨めなものであった — 垂れて漂う記念祭プログラムはすべての人々の視線を引き付け、緊張させた — 私はそれを切り落とした — 人々がその周りに集まったとき、嵐が私をその外套に包み込んで、私をさらっていった。

三千五百フィート下に広い大地が私の下で駆けていた — 私は安定して漂っていると思った — 広い皿状の平野が見えたが、そこには山々や森林、修道院、市の内陣や塔、人為的廃墟やローマ人と盗賊貴族の真の廃墟、街路、獵師小屋、火薬庫、市庁舎、納骨堂が荒々しく密接に散乱していて、上方の分別ある男はこう考えざるを得なかった。これらは単にばらまかれた建築素材で、これらを後に立派な公園に並べ代えるのだ、と。

四方八方が果てしなく広がっている平野ではあらゆる様々な人生劇場が引き上げられたカーテンと共に演じられていた — ある者はここ私の下で国外追放され — 向こうでは脱獄する者があり、侯爵歓迎のために鐘が上の方まで響いてきて — こちらの燃えるような彩りの畑では刈り取りがなされ — あちらでは消防ポンプの試験がなされ — イギリスの騎士達は黄金の旗と鞍覆いで出掛けており — 九つの村の墓が彫り込まれて — 女達は途中礼拝堂の前で跪き — ヴァイマルの喜劇役者達の馬車がやって来て — 酔っぱらった花嫁介添人を連れた花嫁達の多くの嫁入り馬車 — スローガンと音楽のみられるパレード広場 — 茂みの背後では、そこに見える支柱一本の絞首⁽¹⁾台から判断すると或る者が深い真珠養殖の川で溺死している — 多くの馬車を乗せた長い渡し船が広い奔流を横切っており、私も上空で同じことをしているが、しかし渡し賃の必要はない — スレート屋根職人が町の塔に登り、そして感傷的な牧師の息子が[教会堂の]鐘塔の穴から覗いており、兩人とも（それを私は三千五百フィートの高さから観察することができる、薄い大気のせいですべてが間近に近寄って見えるからである）百フィート下の自分達の下にいる人々を感嘆して、昂揚した気持ちで見つめている。胸に印を付けた庭園泥棒の女達が曝し台に礼拝堂の聖女達のように囲まれて立っている — 跪いて、目隠しをされた或る者はその三色の記章のせいで肌に三つの弾を受けなければならない — 教会堂開基祭のために着飾った村があり多くのその為に必要な売り手と買い手がいる — 劣等な歌を伴うカトリックの巡礼 — 笑いながら騒いでいる一人の狂人は捕らえられなければならない — 五人の娘達がはなはだ手をもんでいる、なぜかは分からない — 百台を越える風車が嵐の中で腕木を揚げている — 花と咲く大地が輝き、太陽は川の中から反照し、下界の元気な蝶の姿は見えず、高い所の雲雀はかろうじて聞こえるだけで、あるいは空耳であろうか — 生命はこちらでは黙っており、偉大で、ほとんど脅している

— 何という強力で邪悪なあるいは善良な精神がこちらで、この静かな高みで世の営みを残忍ににやりと笑って見守っているのか、あるいは涙を浮かべて微笑しながら見守っているのか、獣の前足を広げているのか、あるいは両腕を広げているのか誰も分からないし、私はこの精神のことも気にかけない。...

今二羽の相争う秃鷹が風見鶏のように私の円形建物の気球船に止まって、巣くっている。私も気球船の綱に掴まって、私の輿の上に外部乗客[*1]として腰を据えた。しかし私はかくも荒々しい永遠の場面交替の中を五時間次から次へと宗教、州、帝国都市の上を飛び過ぎていったので、つまり諸民族の苗の上を、そのうちのある民族は花のように朝の五時に、別の民族は九時に、三番目の民族は昼の二時に目覚め、太陽に向かって開花し、あるいは愚かに眠り込むのであり — かくも長い人生の色彩ピアノの上ですべての暗い色彩や明るい色彩が私の眼前を跳ねていったとき、私は私のすべてをまとめて紡ぐ梭の上で、惨めな空しい憂鬱な気分になった。私の心臓大の苦痛の有毒な朝鮮朝顔が私の胸を傷付けた。私はくしゃみをして、泣き出したくなった — しかし泣かなかった。 — いや、いや、私の上の諸惑星の一連の主よ[ロザリオ]、私が慰められ、泣きたくなって、嗚呼かなたの世界よ、と見上げて言うであろうと思わないで欲しい。 — かなたの世界にジーヒコーベル号どもも周航して、その船長達も眼下のただ別様に脱臼した人物達について年鑑を十分に書き、地球に向かってこう言うことだろう、多分我々の家と似たようなものだ、と。

私のような人間は — 殊に嵐で首の静脈が長く締め付けられ、頭が酔って眠たくなっているときには — むしろ利口に自分の見張り小屋の中に降りて戻り、エーテルの酩酊を眠って味わい尽くすことになろう。しかし奇妙な起こされ方をした。フリゲート艦は岩にぶつかったのだ — 私の船室は黄金の炎で包まれた — 外は闇であった — 私はブロッケン山に打ち上げられていて、夜の黒い上げ潮が山に押し寄せていた、太陽の夕方の炎がその上に下界から射し込んでいた。

私は陸に飛び降り、私の不安定な短艇をブロッケン山の小屋に結び付けた。哲学者なら[*2]、なぜ私にとっては空中よりも固い陸地の方が同じ高さでも崇高に見えたのか説明して欲しい。小屋で私はブロッケン年報⁽²⁾の忘れ去られた四つ折り判を見つけた。この判は人間の虚栄心や偽善、空虚さで再び私をいつもの憤怒と反吐の状態にして、かくて私は夜遅くなって表題紙の空いた裏面に悪魔の名前の序言を書く気になった。悪魔というのは、生前には単に匿名で学的研究所で働きたいと思っているけれども、学的ドイツの弁護人、養育人として、また偉大な多作家として認定された功績を得ている或る大学人のことである。

ブロッケン年報に寄せる悪魔の印刷出版許可と序言

検閲官としてただ保証しておかなければならないが、何人かの著者によるこの旅行記、ブロッケン年報という名の本には我が上司ベルゼブブの名誉と関心に反するようなものは見られない、単なる詩的志操を現実の志操と見なすような不当なことをしようとしなければ見られないのである。個人的学者、序言者として私は何人かの同僚の悪魔に、この記念帳、警句集に対し好意的観点に立って欲しいと願う。我々の多くの者にとって — 必ずしも最低の者にとってではないが — まさに我々の教会国家、我々の尼僧院、祭壇、我

々の説教壇[*3]の間近で、理神論的、有神論的志操が草稿中で自由に表明されていること、神の崇拜についての文言や、情感の純粹さ、この世からの超越、要するにかのまだ相変わらず根絶されていない純粹主義者やカタリ派、宗教主義者という名前でより良く知られている者達の儀式ばった言葉が見られることに最初はいぶかしくまた苛立たしく思えるに違いない。しかし公正な者ならばこの歌の索引集で語っているのは明らかに詩人達、あるいは詩的な散文家であると考えよう。詩というものは自由で、単なる形式でなければならず、詩にとっては — 詩が幾人かの悪魔とは違って頭よりは心を素材に表現したいのであれば — どの情感をも、どんなに倫理的極まる情感でも表現することが許されなければならない。それ故単なる表現からその心を推し測るのは、つまり詩人を人間と区別しないのは不当なことではないか。はるかにより難しい場合でも心に何の影響も受けずに（リプシウスによれば）ペトロニウスの作品のような諸作品を読むとか（ベールによれば）それどころか書くこともできるからである。一体教養あるヨーロッパ人が、夜に見た夢を日中に実現しようとする北アメリカ人であるとも言うのか。

それでは — もしも空想と行為との間に幸い隔壁が確立されていないのであれば — どの場合がもっと恐ろしい状態であつたらうかということになれば、それは神学者達の場合で、もし彼らがポンポニウス・ラエトウスとエモン・ドゥ・ラ・フォス[*4]が古代の著者達に対する賛嘆の念から遂には本当の異教徒に転じて、神々に供犠するようになったのと同じ理由で、聖書と聖書の人物の永遠の読書と賛辞のせいで、そして初期キリスト教徒達との（教会史を介して）日々の交際を通じて、結局自分達が説教壇や写字台で織りつつ暮らしている志操に自らかぶれてしまい、かくて何世紀も離れている最初のキリスト教世界と共に帰路に就き始めて皆をびっくりさせるという危機に陥った場合である。しかし事はもっとうまく経過した。積義家達や教会史家達の独自の性格は自らを確立する術を心得ていて、これまでのところそもそも初期のキリスト者は一匹のアルプスの山羊同様まれにしか出現していないのである。

我々の眼前の歌の索引の共同執筆女性達に話を戻すと、彼らの大抵は — この上方で何を感じ、歌おうとも — またハルバーシュタットの町に降りると、再び正気に戻って、アンタイオス⁽⁵⁾同様に上の大気の中ではすっかり枯れて、縮んでしまう彼らの哀れな老いたアダムに地上で陽気に餌を与えるようになるというのが私の最も素晴らしい経験の一つである。山上の説教のモルガナの妖精は、高貴な旅人達が我らの反キリスト界[*5]に散って、我らが彼らに世俗の諸帝国を山頂におけるよりも深みの中ではるかに魅力的に示すことができるならば、下界ではすっかり四散してしまう。実際悪魔どもは、自分達の養子とも言える人間達に襲いかかる前に、そして単に二、三の者が戯れについて崇高な情感にも挑戦しようとするからといって、人間どもを徳操のピューリタン主義者と見なす前に、もっと反省すべきであろう。まことに不当なことである。崇高な情感がだからといってその男に永遠に食い込むだろうか。そやつはその情感を湿疹や瘤のように持ってハルバーシュタットの町やロシア人やプロイセン人の間をうるさく回るだろうか。少なくとも私は崇高さのこのような筋腫をこのような旅人の妓楼でも喫茶店でも、賭博台でも目にしたことはない。蛇は確かにしばしば脱皮する、しかし有効な毒牙を変えることはない。事情はこうである。人間どもは麝香猫の場合と同じである。麝香猫が、いつも人間からは評価されるけれども、自分達には厭わしい麝香を自分達の囊で育てるように、人間

どもはこっそりと自分達の心囊の中に圧迫し除かなければならない或る種の宗教の煮出し汁をため込むのである。オランダ人は三日ごとに囲っている猫の尻尾を少し持ち上げて、スプーンで貴重な香気とその汚物を取り出すのである。同様に時々詩人は劇場に、紙上に現れて、所謂徳操ある情感を分泌する、読者も一緒に分泌する。その後彼らは全く軽快になって、汲み出した後はどんな悪さもできるのである。暴君は前列の栈敷でコツェブ⁽⁷⁾風の涙を流し、好色漢は平土間で流す。その後両者は帰り、暴君は臣下達から、好色漢は自分の心の女王から全く別の涙を絞り取る。天才達はそれ故忌々しいほどに元気で、他の者達は遅れてそうなる。

ここで私は周知の最重要の点[貞節]⁽⁸⁾について述べる。アリストテレスが叙事詩について、叙事詩の不活発な部分では、最も華麗な言葉の飾りが大事で、これは登場人物達や行動が活躍するところでは見られないと主張しているように、行動のないところでは一人生であれ、恋愛であれ、一最も豊かな詩的徳操的語法が許されるばかりでなく、必要でさえある。それから先に進んで行かなければならない。さて特に女性に関して、彼女達はアヌビスの神⁽⁹⁾のように半分は上部の神々に、半分は下部の神々に属していて、それ故彼女達にはこの神のように供犠されなければならない、つまり二重に、白い犬と黒い犬が一度に犠牲にされなければならない。彼女達の祭壇へ進む男は一つの心臓をその上に置かなければならないが、心臓の中では、正しい混合計算によれば、放埒さと感傷性が両心室にうまく分割されているそうである。感傷の大部分は山上で調達できよう。

これらのわずかばかりのしばしば脱線する反省と共にブロッケン⁽¹⁰⁾の美しさについての現今のブロッケン公会議文書と証言録を悪魔達に渡そうと思う。しばしば文体が最良のものではないとしても、悪魔達自身が、異教徒の神託やキリスト教徒の魔女達により立派な文体を与えてこなかった、そこでは多くの嘘のせいでまた嘘の父親とまでは言えないとしても与えてこなかったことを考えて欲しい。この土地台帳、在庫品台帳の報告者、乗客名簿記入者については何も記さない、彼ら自身何も言っていないし、言わなかったからである。ブロッケンの小屋にて。

一人の悪魔

私は今や悲しい荒々しい気分でブロッケン山に出てきた。星々は空に懸かって燃え、陰気な山脈の周りでほの白く輝いていた。古代からの霧が広がっていた。私は霧の中、下の広い平野に単に無実の者をかみ砕く無数の[火刑の]薪の山が燃え上がるのを見た。私の周りでは高い岩の塊が崩れた巨人の城の方石のように横たわっていた。寒冷な地帯の花苔が大地の黴として古いむき出しの山頂を覆っていた。嵐が私と私の揺れる小舟の周りであえいで吹き、荒々しく星々の下へ抜けて、それらを揺するかに見えた。私の髪はたてがみのように逆立ったが、しかし私の内心は雄大で陰気であった。そして私は悪魔が出現したらいいと願った、私は悪魔のように崇高で冷淡であると感じた。しかし静けさの中で何と人生は空ろに響いたことか。一 下界では後頭部に疲れた蠟の仮面が横になっていて、ここ上部では反省する仮面が首にあると私は言って、私は顔に手を当てて、顔を仮面のようには剥いで覗こうとした。真夜中に長い曙光が薄く兆して、喜ばせようとした。しかしこれがまた我々に短い喜びの朝と慰めを映し出していることに私は哄笑した。私は突然、全世界と自分の人生とが一对の夢となって滴り落ちたかのような感じがした。自我は自らに言

った、私はきっと悪魔だ、先にそうだと書かなかったか。 —

その時突然奇妙なものが出現して、私の全身を捉えた。白いひらひら舞う像が山を登ってきた。私から十五歩のところではそれは立ち止まった。目は閉じられていた、髪の毛は黒く、眉毛は剛毛で、鼻はわし鼻で大きく、腕は毛むくじゃらで、熊のような胸はむき出しで、 — そしてワイシャツを着た夢遊病者[*6]あった。仕舞には彼はシャツを両腕で前掛けのように魔女の踊りの広場で掴んで、自分で奇妙なメヌエットを踊り始めた。彼が反転すると、黒い蛇のような一本の弁髪が下に長く垂れていた。また振り向くと、跳ねて、優しく作り笑いをしようとした。私にとって彼は忌々しく、投げ落としたいところであった。最後に彼は両腕を高く上げて、走り去った。この人生の悲喜劇的模写、熱病時の像、私の思念の外見的猿真似は私を身震いさせた。

しかし私はもはやこの夢魔のように圧迫する山に留まっておれず、私の輿に乗って、輿を切り離し、広大な生き生きした夜の海に漂い出た。 —

- *1 馬車の天蓋の上に乗って行く人をイギリスではこう呼ぶ。
- *2 哲学者は答えている。それは彼がエレ尺としてのブロッケン山で高さを測ることができたが、しかし透明な空気では測ることができなかったからである、と。
- *3 悪魔は所謂悪魔の説教壇、魔女の会議等を考えている。
- *4 後者はルイ十二世下の教師であったが、その古典主義の異端のせいで仕舞には火刑に遭わざるを得なかった。サンフォア⁽⁶⁾の『パリ史論』
- *5 トリアの大司教管区の二十もの地方司祭宅はキリスト界と呼ばれる。
- *6 多分そこから四分の一マイル離れたところにあるブロッケンの旅館から出てきた者。

第七航

大いなる墳墓 — 白い海 — 匿名の樂園 — ロマンチックな出会い — 諸太陽を見る気球の通過

— しかし天と地の間で私は最も孤独であった。最後の生命のように全く一人っきりで私は眠れる国々の広大な埋葬場の上を、人々が眠りに就いて、眠りが仮死ではないかと待ち受けている地球の長い死体安置所を通過して飛んで行った。下の方で次々と続く長い雲は、暗闇の中で秘かに横たわっている邪悪な精神の冷たい息であった。すべての存在に対する憎しみが悪寒のように私に忍び寄ってきた。私は、自分はきっと邪悪な精神だとまた言った。そのとき二番目の嵐が最初の嵐から私を連れ去り、私を見知らぬ遠くの国々の上に投げ飛ばした。

突然私は点在する広葉樹に満ちた優美な平野の上に来た。全く、生命の猿ども、つまり肉体に覆われていて、それらは暖かい国々の午睡の者達のようにまどろんで四肢を伸ばしていた。火の横に彼らの服があったが — そのとき一人の男が、自分の腕に抱かされている死体から服を剥ぎ取っているのを見た。 — 地獄よ、これが汝の大地だ、埋葬されていない戦場であった — 私はならず者に石を投げた — 彼に空中から吠えた、悪魔

め、悪魔め、と。 — 私は氷のように冷たい天の中へとさっと持ち上げられた — 殺害の冥府は過ぎ去った、花と咲く葡萄畑が広がってきた。

しかし地上の蜚行は有毒な熱となって、私の心筋を萎えさせた。私は疲れて一層低く暖かい下の方に沈んで行って、憤怒と見張りにくたびれて、空しい目を瞼の下に忍ばせた。

何と奇妙に優しく現実の夢を見たことか。「神の町からはポンペイからのようにまず一本の道が発見される」。そう夢の中で叫び声がした。それから単に無意味な言葉が繰り返された。ポンペイ — ヘスペーリエン[西の国]、暖かい花の森 — 暖かい花の森 — そして悦楽の暗い波が私を襲ってきた。

明るい輝きで私は目覚めた。私はどこにいるのかと私は言った。私は暖かい風を受けて、果てしなく銀色の、余りに優美な泡へと打ち出される星々から合成されて波打つ海の上を滑っていった — 雪の霧のように柔らかくて白い海で、光の靄のようである — 私の小屋のすべての窓がほの白く輝いた — 私はすっかり照らし出された。 — 私は夜の大地の上を覆っている雲の中を航行していて、雲の潮の中では昇った月が白鳥のようにその輝く羽で煌々とすべての波の上に浮かんでいて、それから月は青空へと抜けた。

水鳥のようにかなり長くその白い面の上を漂うことをせず、私は気体栓を開けて、下のまどめて跳ねるナフタの源泉の明るい潮へと沈んでいった — 幸せに過ぎていった — 白い、胸中の暖かい夜の中を — 何という国が私の下に芽吹いているのか私は知らなかった — 私は更に低く銀色の蒸気の中へ掘り進んでいった — 二、三度庭園の花の香気が立ち上がってきた — あるときは狼笛が稲妻のように雲の間から聞こえ、私の目前で精霊のように空中で踊った。 — 長いこと静かであった — また組鐘が、つまり私の下の覆われた町から響いてきた — それから涼しくなった — 海は長い山々へと砕け、そして大きな裂け目が大地に見えた。 —

私は甲高い、じっと漂う雲雀達の許に下ってきて、仕舞には枝の小夜啼鳥の許に達し、眠れる花壇の間の見知らぬ大地に触れた — きづたの下には岩があって — 白いオレンジの花が見え、それを朝の風が果実の代わりに揺らしていた — 芝草の台座が、楽園の野に広がっていて — 相争う曙光と月光とが交互に交錯し、魔法の地に不思議な光を注いでいた — 遠方には別荘のポプラ並木が並んでいて、丸くて陽気な、葡萄で覆われた山の麓を帆船どもが飛び過ぎていった。いたるところ透明な栗の木の森が喜びの世界を表していた。私は小暗い楽園から、啞の子供からのように笑いかけられた。私の周りの未知のものはすべて、昔からのなつかしい子守唄に似ていて、人工庭園的な『農耕⁽¹⁾歌』には似ていなかった。 — かくも優美で新奇であった。 — 私はここからまた去りたい、この国がどう綴るか知らないまま去りたいと言った。 —

葡萄畑は炎のような朝の靄の下、ますます明るく鮮明になった。トルコ風な服を着た一人のモール人が緑の庭園の橋の上を走って行った。出会いは芝居の上のこととせず、芝居の出会いを自分に引き寄せるような女性との出会いを私は避けていたので、遠くの足音を避けて、小夜啼鳥の鳴く外国の茂みに入った。とうとう太陽がミューズの神のように、東に出現し、地球をその弦の楽器として手に取って、弦をすべて鳴らした。

私は別の人間となっていた、私は花々の露を愛しくむさぼるように吸い取った。私はイタリア語の詩句が元気よく歌われて過ぎて行くのを耳にした。大きな女性が、朝のように燃え立って、大胆な足どりで、黒い髪に黒い目であったが、周りを見渡ししながら、歌いな

がら橋にさしかかった。モール人を先に送り出した女性と見えた。私は輝かしいヒロインに向かって行った、彼女は早速待ち受けていた。私はまさに何という太陽のあらゆる魅力の若々しい輝きを目の当たりにしていたことか。私はイタリア語で、自分は今日ブロッケン山から来た、何でも話して欲しいが、ただ彼女の名前と私が目にしている土地の名前は教えなくて欲しい、と言った。彼女は推し測るように微笑しながら私を見つめ、特に私の緑色の、ローマ風にまとった外套を見つめた。「貴方は」と彼女はイタリア語で言った、「ローマ出身の画家ですか」 — 「ジャンノッツォです」と私は言った。「ジャンニーノ」と彼女は微笑んで言った。「その通り」と私は言って[*1]、彼女に私の気球船を知らせた。私は真面目に彼女にモール人を通じて朝食を頼んだ。本当にここでは彼女以外誰も目にしないし、耳にしないようにするためであった。彼女はそれを燈台に運ぶよう彼にフランス語で命じた。「早くなさい」と彼女は言った、「かしこまりましたとだけ言って」。

「貴方は気に入りました」（と彼女は燈台の外部にある回り階段を登りながら言った）
「貴方は詩を愛好されています。詩以外は何も美しくありません、青春も一つの詩です」。

— 私は詩の花からいつも浄血作用剤を煮詰めるような者達について、喜びの詩を単に葉のように文書や帳簿に挟み込むような者達についてただ若干の意地悪なことを言っただけであった。

上の燈台では広大な世界を覗くことができた。それは深く、山々をかかえる南東部に続いていて、多分スイスの山々であった。モール人は私にワインを持ってきた。テレーゼは

— 洗礼名を持って貰う必要があったので — 愛について、自分の花嫁介添人達について、絵画について、音楽について、少数の男達のように雄大に自由に語った。何という創造的な準備の整った時が近寄ってきたことか、その時は女性の大きな鈍い尼僧院を壊し、陰気なヴェールを美しい目から取り去るであろうものである。 — 彼女はしばしば北の方を眺めた、私はそれからまじまじと彼女を見つめた。何と美しく、黒い目か — 半ば穏やかな瞼の下に収まっていて — 黒い目の慣習に反して、ただ穏やかな輝きを帯びていて、その輝きは増えもせず沈みもせず、単に明るい露を時に薄くまとうだけであった。

— 彼女は率直に、北方の何に憧れて、よそ見しているのか打ち明けた — 彼女の恋人が今朝やって来るのだった。

「美しい方、心から愛することです」（と私は言った「言い難いほどに愛することです。でもその方の容姿を教えてください」。私は付け加えた、後で実の付いた橙の枝を折って、航行中その恋人を見つけたら、印にその枝を彼女に向かって投げ落とすことにしよう、と。彼女の神々しい目は、更に燃え上がることはなく、ただもっと湿っぽくなった。黒馬に乗った赤い服の青年で、白馬に乗った緑色の馬丁を従えていると彼女は描写してくれた。私はガスの詰まった幾つかの打金膜製の小球を下の方にたぐり寄せて、小球を風見鶏、照明弾として飛ばして、風状態の上方の風を調べてみた。幸い風は強い南風で、その若者の道の方へ向かわせるものだった。私は彼女にすべてを告げた。「それでは出発なさい」と彼女は言った。私の通報船は素早く出航の準備を整えて、欄干にただ小鎖でつながれて止まっていた。私の心は、美人とロマンチックな朝の輝きに包まれて酔い、漂っていた。「ジャンニーノ、本当に用心なさい」と彼女は言った。私は気位高く作動している[ベニスの]総督の船ブチントーロに乗り込み、彼女に小鎖をほどいてもらった。私は彼女の胸から三本の薔薇を抜いて、お辞儀した女性の上にお辞儀して、豊饒な立派な唇から炎の接吻を奪

うと、空へと舞い上がっていった。「さようなら、愛しい人」と彼女は後から叫んだ。「さようなら、最愛の人」と私は下に向かって叫んだ。

神々しい朝よ、神々しい女性よ。私はすでに空中の冷たい季節の中に漂っていて、ガラス越しに北の方を眺めていた。しかし何も発見できなかった。テレーザは燈台のところに大理石の女神のように立っていた。しかし彼女のために高みから枝の落ちることはなかった。

熱い唇に彼女の新鮮な薔薇を挿み、燃え上がるような両眼に望遠鏡を当てて、私は山々と奔流の上を越えて飛んでいった。 — 遂に、花と咲く女性が見張っている目にとって単なる白い影となったとき、私は同時に私から何マイルも離れて、丘の上の赤い服の人間とその横で草を食んでいる二頭の空の馬を発見した。私の目は湿っぽくなった。二人の離れた、互いに山々で見えない人間達に目を向けることができたからである。二人とも憧れ、夢想していた。男性は南の聖なる未来を求め、女性は北方での未来を求めていた。一方私は神のようにすべてが単に現在に過ぎなかった。私はこの日誌から一枚の紙をちぎって、そこに書いた。「急げ、若者よ。美しいテレーゼが汝を燈台で待っている」、そしてそれを橙の枝に結び、すでに長いこと大空の中の一つのますます早く移動する小雲に注目している彼の上を飛び過ぎるとき、枝を投げ降ろした。果実は翻る愛の紙片を垂直に落としていった。

私は振り返って見た — 燈台の美しいテレーゼは消えていた — 若者は丘を駆け下りて、頭をしばしば急ぎ足の好ましい小雲の方に向けていた。君達幸せな者達よ、愛することだ、愛することだ。 —

私の薔薇の日の蕾は更に開いていった。十時に私はリラルに降りていった。若い、数週間前に結婚したばかりの女性が私を古い友達のディーアンの許に案内した。彼はフルートの谷に涼んでいた。私どもはまた盛んに飲んだ。彼が私をかくも熱く見たことはなかった。「冬には」（と私は言った）「民衆は最も貧しい。ただ温かい精神のみが豊かな冬になる。しかしここは暑すぎる。私は上の上空で私のワインを冷やすことにする」。出発、出発と私は叫んで、華麗な庭園から飛び去った。この庭園についてはまだ我々の三文紀行作家の誰もインクで描いていない。

十二時に私はパイロイト近郊のファンテジーで食事のために下降した。花と咲く、音の響く、影の多い谷よ。 — 春の夢の揺り籠よ。月光の霊の島よ。汝の両親、つまり山々が、汝を覗き込んでいるが、その花輪の中の子供同様に魅力的だ。悦楽から悦楽へと進むがいい。

六時に私はザイファースドルフ⁽²⁾の谷に味わい楽しむために下降した。すでに影のヨシヤファトの谷であった。夕方の光が山の周りを金鍍金された面取のように走っていた。静かな、豊かな谷よ。汝は、飾られた花嫁の胸のように、花々と丘とで心をしっかりと甘美に囲んでいる、そして心は素敵な牢獄の中より熱く鼓動する。進め、進め、南東の風がまさにヴェルリッツ⁽³⁾の上を飛んで行く。

太陽と共に私は移り変わる庭園に沈んでいった。眺めは変わってもまた庭園なのである。あたかも太陽はまさに昇るかに思われた。すべての神殿が朝日を受けているかのように輝いた — さわやかな露が地面にあふれた。そして雲雀の朝の歌声が周りに飛んでいた。

— 長い、陽に酔った眺望が青春の輝く競走場のように、希望の天の道のように走り過

ぎた — 一日の黄金時代、つまり朝が私の妄想に迎合するかに思われた。いや朝とか青春は夜なしには死者達の許から昇ることはない。長く整列させられた諸影が岸边に打ち上げられた夜の霊のように立っていて、すぐに、見捨てられていた世界を襲った。しかし私は私の太陽にまた憧れ、再び上昇して、太陽を追いかけて、太陽が最後の山々に沈む様を見ようとした。上の方で私は太陽を十回ほど、その度に一層速く、沈んでいくのを眺めた — 私は再三バラストを投げ棄てて、太陽の瀕死の顔に向かって飛んだ — 地面一面にすでに黒い眠りが横たわっていた — 私は大地に最後の石を投じた — すると天の下の低く消え去る太陽の顔がまことに遺憾そうに私を見つめていて、私は最後の喜びの酩酊を味わったかのようにであった[*2] — そしていつの間にか低い雲や山々に太陽は埋葬された。早速私の背後ではブロッケンが死せる婚礼日の最後の淡黄色の薔薇の花輪を投げ棄てて、世界を陰気に眺めていた。天は見ている間に一層星々の群れに白く覆われた。「テレーゼ」と私は叫んだ、「君の夕べは今や君の朝よりももっと明るく輝いている。 — 私の夕べは色褪せ、朝は過ぎ去った」。

*1 ジャンノッツォは大きなハンスの意味で、ジャンニーノはハンスちゃんの意味である。彼はわざとこの朝については或る種の曖昧さを投げかけているように見える。

*2 何という奇妙な予感か。D.H

第八航

牢獄 — 自己弁護 — シュペール — シャールヴェーバー — 電気の法的有益さ

朝の十時。「第八航」とただ私は書いて、分割する。というのは当方としては今あるところで — 昨日この時刻にはリルールで飲んでしたが、動きがとれずについて、ここでは悪魔の所とかを除いて、私の知るかぎりどこにも出掛けられないからである。勿論私は君達にそのことを語ろう — もっと気の利いたことが話せようか。 — かくも私は憤懣やるかたない。しかしなぜ私は昨日放埒に享受せず、ハイデルベルクの喜びの樽に入る代わりに、単に喜びの杯だけを自分に収めたのか。というのはそうできたはずだからである。私は少女達の学校教師達の指揮下にある子供達の舞踏会へ落下できなかつたらうか — 午睡のためエルベ川の島へ — 私の下の手押し車の音楽家フェーデルレ[*1]の許に — 森の高台の聖家族の許に行けなかつたらうか、そこでは多彩なショーが新緑の木々に揺れていて、老いた父親が煙草を吸い、詩人的な目をして春の世間を眺めていて、美しい娘がちらちら燃えるコーヒーの火の許で花咲いていて、母親が何人かの小さな腕白達を見張っていたのである。しかし私はアルカディア風なアルプスの牧人達の穏やかな人生の中へ私の人生の発酵を注ごうとは思わなかった。 — 私はどこにいるのか。 — 残念ながらここだろうか。私は昨日の夜、長いことさまよって飛び、最後には疲れて、地上の旅館に泊まろうと思った。残念ながらかじられた罌粟油ケーキ、つまり月は昇ろうとせず、沈降しようと思った町に関しては獣脂蠟燭の明かりしか分からなかった。私は従

ってゆっくりと上機嫌で沈んでいったが、自分が絞首台記念祭を残して去った忌々しいミュージランツの懐に入っていくのに気付かないでいた。私はただ静かに — 輿のガラスの床が何ものにもぶつからないように — 沈んで行き、しばしば沈みながら停滞した。かくて五階の明るい窓の前を通過して、その窓から検閲官のファーラントが一つのベッドの横で跪いているのが見えた。眠っている者の部分で見えたのは、拝跪している者が握っている白い小さな手だけであった。この化学者は女性達のダイヤモンドの燃えやすさについて実験を行っていた。私は容易に窓を（窓の万力で私を支えて）開けて、安楽椅子上の彼の靴下と他の彼のカルタの下部に属する衣服を取りだして、彼を世間の惨めなさらし者にしようとした。 — それは果たしてうまく行った — しかし私が彼の動産を輿に入れたとき、ベッドのダイヤモンドが叫んだ。「泥棒よ」（泥棒はそなたの横にいたのだ、愚かな宝石よ。 —）そして私の下では三人の夜警人が同じことを叫んだ。私はまだ三ポンドの石を残していたら、 — 夕陽へのセンチメンタルの眺望から残していたら、 — 私は上昇できたであろう。今や私はファーラントの遺産と共に三人の夜警人の腕と槍の中に落ちていった。

私はこれ以上怒って、私の夜の憤激を反芻しようとは思わない。君達に長々と、単に郵便ラッパで夜警人達になし得た私の行動や、新たな分担兵力の接近、私の怒りの拳の戦争、そして最後に市庁舎の牢獄への私の連行を詳しく描写して反芻しようとは思わない。

私がまだ逮捕されているというだけで君達にはうんざりではなかろうか。 — 私はここ上方のこの広間に閉じ込められた、下では、実直に結局私の後をやって来たウィーンの移送者達ですべて占拠されていたからである。広間のドアの前では愛敬ある儀仗兵、あるいは番人が私を見張っている。忌々しい。勿論とても滑稽なことである。しかしこれがまさに忌々しい。私の船、船具は、私の隣の部屋にしっかりと門をさされてあるのが見える。

今まさに十一時半にミュージランツの市参事会は私を会議に呼び寄せた。

私の血は煮えたぎった。しかし私は厳冬を投げ入れ、血を静めるつもりである。私は執政官とは冗談を言って遣り取りしよう。私はそもそも受難劇協会のように私の受難史のすべてを一つの茶番に変えることにしよう。購入者に林檎や胡椒菓子を照らし出す小さな明かりの前にかがんで座っている凍えた商売女のようなこうした哀れな啓蒙家ども、自然のこの農耕馬は、私が微笑んで悠然としていて、彼らの鼻面を引き回すと、どのように聞き入ることになるか。 — 彼らが私に宣誓を要求したら — 悪魔だけが彼らにそれを認めるだろうが — 上述の冷淡さを保って、宣誓の警告[本来は偽証の警告の意]を求めよう、そしてそれが終わったら、まだ何も効き目がないから、もっと強く自分に警告することにしよう、そして結局、私はもっと強い宣誓警告を自覚して、偽証の用意があることになる。いやはや、ここには冗談への四十もの道がある。私は一廉の名士である。「名士として」（私は全く弾を防いで言えよう）「注意致しますが、私は誓いを強いられるとき、ドアを閉めるよう願います。名士として私は以前から自宅拘留を期待していました、他の者ならば公的拘留となるところです。名士として私はすべての裁判から、立ったまま、座った会議への法的召喚を予期しており、留置所に座るという法的召喚とは区別して考えております。名士はいつでも口頭の代わりに文書で尋問されるものであると要求します[*2]。同様に聴取されるのではなく、読まれることを要求し、これ以上一言も言いません。もっと思いつくことはある。人間達の冗談を誰が予言できよう。 — 早速入場するとき

— 会議を前にして — あたかも軟骨魚の、つまり痩せた小使いの手に賄賂を贈るかのごとくにして、自分の手だけを差し出すことにする。素晴らしい、今時計が鳴る。 —

午後二時、三時、あるいは四時。哀れな計画という犬どもを連れた人間はくたばってしまえ — それにミュランツの羊の頭どもや皆がくたばってしまえ。ただ三千フィートの空中にいたときにのみまだ良い一日の数分間が味わえるものである。今はどんなに上の鳥やチゴハヤブサの間にいたいことか。 — 「さて彼は」と立派な読者界は考えることだろう、「いよいよきちんと自分の不運を巧みに、軟骨魚との握手に始まり、町の法律顧問シュペールの怒りの咆哮に至るまで語り始めて、我々を存分に楽しませてくれよう」。

— いや執筆界の高貴な読者の方々、諸君をこの本のパーティーに招くこと、止まり木の上の私への弩の射的へ招くことはほとんどまだ準備がなされていない。 — 勿論とまた人々はすぐに考えをめぐらすことだろう、この読書界では私が私の報告でミュランツの裁判官同様に怒らせてしまう人々が全くいないわけではない、と。 — いや、いや、私はこの件の忠実な報告をすることが私の義務と考える。

私が最後の審理として私のざりがにの鉄と共に現れたとき、会合はすでに長いこと開かれていた。死刑執行人のように正しく裁かず、不正に裁く町の法律顧問シュペールは、その顔は彼が法の秤に投げ入れた盗人の顔の硫黄 pasta であって、そこに見られる外貌から、彼が自分の裁く者達を自分を映す鏡から知っていることを示しており、かくてニュルンベルクでは豚とか牛はそれを屠る権利を有する家々に描かれているのである。シュペール氏は彼の息子の聖遺産喪失の訴えで始めて、証拠品の靴下と衣類の半分を目の前に置かせていた。「フォン・ファーラント氏が貴方の息子」と私は曖昧に叫んだ、というのは彼が上述の証拠品を自分の息子のものにして、かくて自分の — 娘の名誉を救おうという低劣な曖昧さを私は見て取ったからである。今やシュペールの頭は名誉毀損者や衣服盗人であってなっている橋頭となり、私の頭は先駆ける破城槌であった。想定される劣等さと侮辱

— これは冗談で取り扱うことができる — それと鼻先の現前する劣等さと侮辱は何か全く別物である。目前の劣等さを見るたびに私は人間に対する私の厭人症や激怒の血管が、これは時に昨日のような日には皮膚から消えるのであるが、更にその昔からの黒い血をかき立てて、膨らませるような思いがする。

その上更に二番目の参事官のシャルヴェーバーが入ってきて、 — これはミュランツの月刊誌の気位高い、大胆な共同執筆者、年鑑に関するカント主義者のエルランゲンの書評家⁽²⁾として知られる男であるが — 私を(絞首台記念祭の)町の誹謗者として、当地の特権的海賊出版者や二人の破産した商人の個人的中傷者として、最後に夜警者達に対する捕鯨砲射手、半ば死神として告訴した。私はもはや何も構わず、私のことすら案じなかった — なぜ人間はほんのささいなことに挑戦していいだけで、大いに何でも挑戦してはならないのだろうか。 — 私は、すでに一度私のことを書評したことのある小参事官に向かって言った。「当地の十二月号やエルランゲン文芸新聞紙上では貴方は趣味と諷刺の忠実な宮中内璽鍵保管者[*3]として声高く話し、口笛吹いてもよろしい、いずれにせよ篩い製作者は同時に太鼓も作るものである。しかし敵のシャルヴェーバー殿、貴方が真の諷刺にもっと役立つとすれば、その対象としてであって、その裁判官としてではない[*4]。せいぜい裁くとすれば、ここでのように名前をサインする場合ではなく、名前を秘匿しなければならない場合のときだ。シャルヴェーバー殿、貴方は何を欲しているのか、

あるいは他人は諷刺で何を言いたいのか、もっと早く貴方が分かるように神がもっと才知を貴方に授けていたらと願うものだ。いやはや、諷刺の炎は、単に何人かの悪漢や海賊出版者や破産者の名前の羅列で燃え終わろうとするのであれば、その神聖さが汚れるものではなかろうか。いや、芸術というものは個々人を単に色彩粒として使うのであって、原像としては使わない。私が今日の諷刺を描く場合でさえ、私は単に虚構の名前の代わりとして貴方の名前を記すのだ⁽³⁾」。

しかしこの憤怒はこの阿呆達の気に入ってしまった。彼らは記録に取りかかって、私を、獵師がまず走らせておいてから、仕留めの印を付ける余りに近くを跳ねる兔のようなものと見なしていた。シャルヴェーバーは微笑みながら私の名前と身分を尋ねた — 私はただ貴族のジャンノッツォと名乗って、主張し続けた。「私は」（と私は言った）「一人でも聖職祿資格、帯刀資格があるのであれば、喜んで突き刺してご覧に入れよう」。今や私の返事にはお構いなく、記録の喚起者は恥ずかしげもなく進行していった。例えばこう私が答えると、つまり私はファーラントの着脱を単に人相書としてつかみ、これを広告新聞に知らせようとしたのだと答えると、参事官はこう尋ねるのだった。「私は普段誰に盗品を売っていたのか」と。

どんなに打たれ叩かれても後足で立ち上がる市場の馬の姿が私の歯ぎしりする魂を解放した。騎士的な動物だと私は考えた、低級な犬は鞭打たれるとわめいて、尾を振り、仕えるというのに、汝は黙して、血を流し、ただ穏やかなままでいる。私は — もはや冗談ではなく、これも呪わしいのだが — 本当に文書での返事という名士としての特権を使用する段になると、馬のように黙った。

しかし今や私はここに一穴の逃げ場もなく、忌まわしい人生という長い展望と共に、殊に率直な性格というのに、拘留されている。

硫黄の洞穴や犬の洞窟⁽⁴⁾では、かがみ込むと窒息する。裁判所や他の宮廷では、立ち上がると窒息する。

その翌日。私は昨日と同じ状態であった。今日展開されることは、単に私が屠殺予定の七面鳥のようにいら立つであろうということだけであった。移住禁止令は私の非常小屋のすべての壁に打ち付けられていた。私が仮に守衛を倒しても、昇交点の入り口に立つことになり、私を裁判所の小使いどもが連れ上げることだろう。窓からは — 三階分の高さを飛んで石の舗道に落ちることになる。私は今や不動の惑星、つまりジーヒコーベル号を隙間から百回覗いてみた。これに達することができれば — これはドアに火を放たないかぎり全く不可能なことで、ほとんどそうしなくなったのであるが、 — コーベル号に窓の内側で半分、外側で半分ガスを入れて、逃げることだろう。

すべての困窮は、それに対して四肢を少しも動かさない限り、夢魔として岩のように重く胸にのしかかるものである。それに反抗する動きがあると、夢魔は止む。このような困窮時にはまた別の困窮しか思い浮かばない。脚が煉獄にあると、目は地獄を見つめる。かくて例えば私がやきたいもなく襲われてしまった思いは、自分は — アエリアヌスとかパウサニアスといった惨めな作家達が自分達の頭と呼ぶ雪だるま、カボチャに常緑の花輪を被っているのに — 将来も『アルトナの郵便騎者』⁽⁵⁾同様ほとんど不滅とはいえないもので終わるだろうという思いである。 — 一 — ただ未来が現在の助手として私を痛めつけた。一八七四年と一八八二年に金星はまた太陽を抜けていく。それなのにその経過を観

察するのはおまえには全く不可能なのだ、と私は言った。

しかし夜の十一時に、平日並のこの町にとってはいかにも立派すぎて崇高すぎる荘厳な雷雨がやって来て、神々しい考えが浮かんだ。つまり雷が軍太鼓をすさまじく打ち鳴らしている間に、ドアに対して爆破材のように全身でダッシュして、ぶつかって見るという考えである。私は真っ先に駆けた — 私は稲光のたびに大地を震動させ始めて — 守衛は私の音を雷に数えて、その嵐の歌を歌っていた — そして最後に上方回音が響き渡った。しかし今や我がおはじき[急速気球]の素早い半分の充填 — 守衛達の臆病、私は勿論一気に作業している間奴等にほとんど手加減しないつもりであった — 気球を窓の外に出したときの調子のでない継続充填 — 嵐の到来 — 稲妻の照明 — 見上げている夜警人の告知祭 — 牢獄への突入 — 切り離す際の地獄 — 初動 — 銃身からの小さめの衛星や化粧弾の接近 — まだ酩酊はしていない曲芸師の酔って、次々に屋根の上を行くふらつき — 家財を投下しての上昇 — そして滴り飛散する厚い雲の中への侵入 — こうしたことすべては単に、轟音の燃え上がるトゥーロ⁽⁶⁾ンから脱出した人々にとってのみ、安全な港への地獄の道を少しばかりまた思い出させるものであろう。

しかし私はほとんどまた冗談を体験したいと思っている、というのはそれは冗談ではなく、何か本当のことであったからである。

*1 ドイツを旅する芸術家で、彼は自分の押す手押し車でイエニツェリの音楽を奏する。
D.H.

*2 ホンメル⁽¹⁾の観察 668

*3 周知のようにイギリス宮廷でのある官職。D.H.

*4 この小参事官とその書評が虚構であるかそうでないか、私は決定できない。私はこの文芸新聞を十分きちんと読んでおらず、クラブで偶然手にしたようなものであるからである。

第九航

大火災 — 城塞 — ブランシャール⁽¹⁾ — 舞台測定器 — ロジーツァ

大地は今や私にとって不気味な海の動物で一杯の海底となって、その海底では、新しい家財を購入しなければならないけれども、自分のこの鐘形潜水器でもはや下降しなくなかった。ただ一度だけ、新鮮な石を購入するために播種された畑に着陸した。私は非常に高く昇って、カッセル・ヘッセン[*1]を航行するときには、単にその巨大な像[マイクロメガス]⁽²⁾、ヘラクレス像を見ることができただけで、人間も家畜も農耕も見えなかった。顔を描こうと思うときペルネティは六フィートの視界を設定している、それで私の筆にとってもまさに比例して私の製図用ペンからちょうどの遠地点に大地はある。

私の知らないある小都市で明るい正午に一軒の家が燃え上がっているのに、見物人はただ火事を論評するだけで消火せずに立っていて、何の火事の警鐘も鳴らさなかったのは[*2]私の大地への愛を更に強めるものではなかった。火事はすでに近くの[新築の]骨組み

をかじり、燃え上がっていた。この骨組みの持ち主は気の毒でならなかった。走路の入り口でのこの強大な停滞は走路の終着でのいびつな結果よりも私には辛く思えたことだろう。

今や空の海賊船はブラーゼンシュタイン[膀胱結石]の城塞に向かっていた。私は守備隊に警告を発することにした。ちょうどその上に来たとき風の状態で一層低く降りて行き、マルセイユの歌を吹き鳴らした。いやはや、このとき帝国和平記録のこの城塞が戦場となった。武器を持てる者は皆野外に出てきて、そして城塞では城塞そのものの中へ攻め入り、頭上の敵を力強く受け止める万全の用意があることを示した。司令官は私に拡声器で、ブラーゼンシュタインの城塞にこれ以上近寄ってはならない、さもないと射撃を命じなければならぬと叫んだ。私は石に結び付けてフランス語での返事を投げ落とした。「司令官殿、私は貴方の義務を存じていますが、また私の義務も承知しています。我が乗船員達は最後の男に至るまで、貴方が我々に敵対する動きに出れば、戦います。貴方は私が返事を結び付けた石から、我々はカプリの鶉[ヴァハテル]司教職[*3]よりも多くのヴァハテル[*4]を勇敢な直射のために積み込んでいることをご理解頂けよう。一方貴方は貴方の大砲や臼砲を我々に垂直に向けて撃つことなどはできずに、単に小さな銃火に頼らざるを得ず、これでは飛鳥射撃よりは走獣射撃用となって、たいしたことはできません。しかし誓って申しますが、私の小船隊は貴方を攻撃もしないし、城塞に乗り込むことも、突撃することも予定していません。単に偵察船としてここに留まるつもりです。敬白等々。

ジャン・ジャン

ジーヒコーベル号の市民船長

私は司令官が参謀と短い軍事会議を開くのを見た。最後にまた拡声器の声を聞いた。城塞の返事は、私はならず者であり、これ以上長く監視せずに、私を早速片付けたいということだった。私は石を通して返事した。「司令官殿、三十分ほど決定的な返事のために願ひ出るものです。敬白等々」。その間私はさながら私の前で捧げ銃をしているかのような上方を向いた銃身と共に常駐の夏の軍を構成する皆が下に立っているのを眺めるつもりだった。私は以下のものを起草した。「ならず者とは、国際法も偉大な国民もその船長に馴染みのない肩書きです。貴殿が私にその肩書きを添えたということは全ヨーロッパが証人です。偉大な、そして洗練された国民が貴方のブラーゼンシュタインを皇帝に動産抵当として要求し、それから磨きをかけるとしたら、それは貴方の不作法のせいです。城塞は私を恐れているのを見てとれます。ゲーツェの『⁽⁴⁾毎日の死の考察』を貴殿の守備隊に配ればいいのです。この考察は元気をくれます。兵士はこの中から常にこう自分に言う勇敢になります」(今や私は下を見た。守備隊は彼らを妨げている手紙執筆中のコーベル号をずっと見守っていた)『「私はうまくいくように常に私の最期を考えることにしよう。どの弾も、どの槍も私に叫んで欲しい、汝に当たるぞ、と。私は死ぬ定め四肢を見たら、何と容易に射飛ばされることかと自戒することにしよう。兵士よ、死を想うことだ』

― 申しましたようにこれは元気がでます。しかし私の岩礁艦隊に関しましては一文も緊急貨幣を鑄造する必要はありません。貴方のブラーゼンシュタイン全体を十分正確に観察し描いた後、私は出航します、敬白等々」。

私は手紙の石あるいは手紙の鶉を鶉の一群と共に落下させた。そして軍艦のコーベル号

は一段と高く昇って去った。守備隊全員が決然と後から銃を發した。 —

自然の神殿は静かな巨人像が一杯に陣を張っている。しかし人間はその上を小さく卑小に這い登っている。人間はこの神殿では、キリスト教の神殿の中のローマ時代の略奪されたユダヤ人のようなもので、単に改宗を逃れるために、くしゃみしたり、咳をしたり、掻いたりしている。しかしなぜ私は飛行全体の不運に見舞われて、北東の風が吹いて私をスイスへ連れ去ることがないのであろう。

この高貴な神聖な一帯を私はほとんどの者に、いや決して、ちょうど本物の蛙のように薄い大気の中で膨れて飛来してくる蛙、つまりあの惨めな空中の柱頭行者のブランシャールには恵みたくない。こやつは金のために大地の近くで沿海貿易を行った者で、今、より低い所の向かい風に乗ってこちらに飛んできたのである。私は空中戦の準備をして、鷹のようにその船めがけて行ったが、しかしそれは漏れ出してゆっくりと沈んでいった。この罪人は首の骨はほとんど計算に入れなくても、折ることになるかもしれないものを多く有していた。一度この気球乗りを空気銃で狙ってみたら面白いだろう。

ラオホの喜劇劇場を去るとき、私はその壁際の劇時計しか目にしなかったのを神に感謝した。ギリシアの祭日には水時計が（アリストテレス⁽⁵⁾によれば）競演する舞台作品に関してその上演の時間を割り当てたように、ポータブルではなく、持ち運ぶ水[小便]時計、つまりラオホの紳士達が劇場の壁に背を曲げて立っていた。そして場面の長さはその列の長さで容易に測ることができた。

ひどく遅くなって私はロジーツァのユダヤ人通りに（ユダヤ人路地ではない）降下した。単に私のブランコを休ませるためだった。しかし夕方なお私は亭主と喧嘩せざるを得なかった。亭主は私がどの門を通して来たか知りたがって、後で通告したいのであった、門手形と宿泊帳をつきあわせるからというのである。私は何の門も通って来なかったの、彼は私を公的に調査させて、私が国王をだましていないか、知ろうとした。 — 翌日私と一つの凧が、これは一人の少年が私の脇役、枢機卿の使者として上げたもので — 並んで昇っていった。通りはおよそ五フィートの高さの見物するロジーツァ人の頭部の溶岩層で覆われ、それがずっと流れて行った。ロジーツァはいつものように私の心を私の昔からの友人達や — その自由な精神 — その社交的な調子で取り込もうとしていた。しかし南南西の風が吹いて、私は人の住む陸地に飽いて、空虚な純粋な海に憧れた。

*1 彼が名前の順を変えているのは何のつもりか判然としない、同様に彼が先の方で明らかにベルリンのことを話しているのにロジーツァという名前にしているのも判然としない。ロジーツァはシュタイアーマルクのツィラー郡にある土地の名である。D.H.

*2 水路陸路でのすべての旅行記はこのような奇妙な逸話に満ちている。明らかに小都市では火事があったのに、前もって侯爵家に法に則ってそのことが告げられない限り、その前に火事の警報も準備もなされなかったのである。さもないと太鼓の直接の結果は、殊に夜の場合侯爵家がびっくりすることになるからであろう。しかしこうした遅れた警報でも侯爵家の恐れは取り除かれるのではなく、単に先延ばしされるだけであるので、侯爵家には — 殊に最初の眠りの場合 — 災難のすべてを隠しておいて、すべてを単にこっそりと消して、ベッドからベッドに手で秘かに起こして人々を集めるのがひょっとしたらも

っと合理的かもしれない。特に言うと、侯爵家は宮殿が燃えないかぎり、どれほどそれに興味があるか私には分からないからである。D.H.

*3 鶉司教職という名は、毎年二回渡って行く鶉が大いに実入りがいいので、そう呼ばれる。

*4 三ポンドの手榴弾。

第十航

ウルリヒスシュラクの町 — ファン・デア・ハフト氏 — 国家は産業事務所 — 一本のための服装制限

この自我の道具箱、この肉体においては、たとえ大気の湖の純粋な湖空気を吸い込もうとも、常にターラーの貨幣を必要とするものである。バルト海へ運んで行く南南西の風に乗ってまさにウルリヒスシュラクを越えて何と堂々たる気球乗りではないか、しかしこれは残念ながらこの町にまさに一号手形を呈示できる大伯父を有しない場合の話である。この鬱陶しい、抉るような、仕事の晒布工場で蒸気を上げている町 — その路地全体が一本の骨、一本の銀の棒をかじり、削っている所 — 喜びには無感覚で、耳に鉛を入れられた馬のように熱く駆けて行き、一つの鉛球によって脳室が押さえられ — — この勤勉な町、人間の酪農業は幸いなことに、私の大伯父を住まわせており、ファン・デア・ハフト氏で、彼は高貴な銀行家で、金から大したものを作らず、単にまた金を作り出していて、喜劇ポスターの「随意に」を「喜んで受理」に翻訳するもので、それ故最も零細な者よりも出さない。

しかし私はすんでのところ封鎖されたユダヤ人路地に — 人間の孵化し、ざわめく群れ袋に — 侵入するところであった。幸い二人のユダヤ人[*1]が、手に手を取って吹奏し、歌っていて、交互に補っていたが、私を二重ソナタと二重感嘆符とで脇へと歌いながら吹奏しながら押しやってくれた。フェヒター区で私はフィールフラー
ス[鯨食]亭へ泊まった。翌朝私は、私の伯父の住むフラネッカーに手形を持って行った。

そこは私の空想を魔術的に美しいオランダの地に移した。そこは確かに所有者達は不純なのであるが、しかし所有物は極めて清潔で、家の女中は私が新しく洗った廊下を靴を履いたまま歩いて行こうとすると、私を止めて、私に言った。私は馬乗りにならねばならず、自分が部屋の御主人まで案内します、と。私はこのロシナンテの末裔に鎧も手綱もなしに滑稽なケンタウロスとなって乗り、私の父方の親戚の部屋の戸の前まで行き、降りた。年老いて、微笑を浮かべた、丸い、放射状に線の入った、厚い白身の中の黄身のように鬢の中に浮かぶ小さな顔が、小さな体の上に鎮座していて、大いに丁重に私の手から一号手形を取って、私に尋ねた — 私は名乗っていなかった、 — 「支払い是指図人宛なのか」と。「私はジャンノッツォ氏本人で、貴方は私の大伯父です」と私は言った。彼は驚きもせず、その又甥を歓迎して、すぐに答えた。普通の手形はこちらでは三日の猶予日と十四日の慣例期限の後に支払われる、しかし自分は（彼は私が自分の客であろうと考えて）若干の割引もせず今日のうちにも「満足の行くようにする」つもりである、と。私が勿論、自分は鯨食亭に泊まると答えたとき、彼は残念がった。

一覽払いの間、私は部屋の中で、二枚の毛織りの敷物の十字の歩道[模様]と広い石[模様]の上をあちこち歩き、羊毛の歩道を越えて新緑の木に出会えないのを残念に思った。私は金を懐中にし、手形を渡すのをためらった。私が不思議に思うのは、人間達の一般的な正直さである。人間は互いにきちんと信用していないかのように見えるけれども 一人間達にとっては言葉や文書はまだ支払いの抵当権のある保証ではないように見えるのだから、 一 それでも私がしばしば目撃したのは、一方の者は他方の者とその良心に資本を時折三、四分間あるいはそれ以上、文書を交換せずに任せるということであつた。人間達がもっと正直でないということであれば、こう要求せざるを得ないだろう、つまり個人的な手形を支払うような人は、片方の手でその手形を取り返しながらか、別の手で金を渡して欲しい、さもないと支払われないまま紙片を怒って食い破ることになるから、と。我々は互いにこうした信頼によって尊重している。勿論高貴な人々は 一 例えば私の大伯父は 一 定められた金を払うとき 一 金は毒に似て、毒同様大量になると危険で、ほんの少量のとき薬用となるから 一 香料品商人のようにこの毒の金属あるいは金属の毒を当局の許可や証明書に応じてのみ払うようにするのである。しかしこれは善良な心である。別な者は大量のために毒に当たらないようにすべきである。

私はまた騎乗して玄関に出て、そして明日の記念宴会あるいは五年[手形決済]饗宴に招待された。というのは五年ごとに彼は饗宴を行うからである。 一一 今そのことを記すことにする。又甥自身はその父方の親戚から 一 殊にその食卓から戻ってきて 一 幾つかのことを大目に見て、その吝嗇をできるかぎり糊塗するとしても、又甥ということでも免じて欲しい。というのはますます深く、冷たい高齢の中に航行していく老人というのは、北方に出て行く船にはなほだ似ていて、これは暑い国々へ出掛ける船よりも常に多くの蓄えを積み込まなければならぬからである。世紀全体が酸っぱさと冷たさの最良の両薬剤を掘り求めているだろうか。それは実に石灰と燃素である。この両者が化学者によれば幸い黄金の構成要素そのものである。白髪の者よりも酸っぱくて冷たい者がいるだろうか。

詩の場合のように素材よりも形式に、中身よりもスプーンや鉢に対して招待される高価なご馳走というものがある。私とウルリヒスシュラクの商人達は伯父によって最も洗練された磁器、五枚の立派な銀の皿を前にして座り、最後には可愛い黄金のデザートセットが置かれた。テーブルクロスよりももっと食卓の祈りは長かった。商人は世慣れた紳士同様神という言葉をししばしば使うことを恥じない。 一 いや、私は利益に目の眩んだ偽善者ども、その鉾山や富籤[*2]で神を名親に頼んで、あたかも侯爵に頼むようなもので、かくて神が正直に名親代をおむつに入れてくれるように計る人間どもに歯ざしりする 一 奴等は至聖の者に対して、我々が称号所有者の参事官に対してするように、いつもその称号を称えて取り入り、物乞いをしようとする。私が親愛なる神であれば、鯨船で出港する前に説教を聞き歌を聞き、鯨のことを嘆き悼むオランダ人に私の尻尾を捕まえられたくない。矛盾と狂気、食欲、陰謀の最大の寄せ集めが人間の印刷物の祈りである 一 単に、汝のみが、神聖なるフェヌロン⁽²⁾よ、祈ることができた。汝は神を愛していたから。

一人のウルリヒスシュラク人が職人達の悪習について苦情を述べて、「ハウゼン教授が、すでに中規模の町では 一 例えば我々の町のようなところでは」と言いつつ 一 「単に休業の月曜日のせいで一年に正味一三五四一ターラー十六グルデンが失われていると証明した」と教えた。この調子を聞いて私はどう反応するか。 一 「皆さん」(と私

は始めた)「これはまず単に国家破産源泉の一つにすぎず、それ以上ではありません。しかし周囲には源泉が雄山羊のように跳ねています。健康の他に無駄に浪費されているのはその代用品の時間です。一つの国家にとって睡眠は何と恐ろしい額に達することでしょう、夜警人以上に長く眠ってはならないと厳しい睡眠勅令で容易に定めてしまえばいいのです。 — 我々が — 日中に日曜日を祝うのは、我々は他の民族のように夜教会に行けるわけで、暗いからといって敬虔さが、睡眠が足りないからといって懺悔が台無しになるわけではないので、これまた年に一三五四一ターラー十六グルデンを棄てていることになりませんか。かくてまた些細なこととして費用算定から排除してはならないものは、国家が毎年二人の人間の許で失っているもの、つまり髭剃りで、髭が伸びれば国も伸び栄えるわけで — 次に雷雨[こんちくしょう]、ただ祈祷書を手に取ればいいのです — 更に立ったままの食前の祈り、これは座って静かに噛みながらもできましょうから — それに余所者の通行人、この人達を市民は窓から見送りますが、町で何も食わずにただ通過するだけの馬鹿どもは、町の周辺を馬で行けばいいのです — わけても左手や両足での一般的な暇つぶしやのらくら、こうしたものすべてです。ニコライ⁽³⁾がこうしたことすべてに対して何と言うか、私は知りたいものです。両手を使う少数の紡績工を除いて — あるいは、自らの手[自筆]ではなく、自らの足で立派な韻脚を書く不具者とか — 足で盗みそれに長い指や盗人の親指の他に更に長い盗人の足指を有し、別の意味で[騎乗ではない]徒歩の盗賊である未開人を除くと、まさに人間の四分の三の部分は何もしません。人間は怠け者を一杯かかえています。いやはや。上の手と下の足は対の職人芸を同時にできないのでしょうか。下の両足で自分の芸を行っているダンス教師は同時に上の小バイオリンでの最高の演奏者となりえないのでしょうか。上の方から順に理髪師、織物職人、羊毛梳櫛人、造型家であるような人は、同時に下の方から順に飛脚、足での手伝い人、踏車人、オルガンの鞆踏人となりえないでしょうか。 — まことに国家はこうしたすべての食事休暇、祈祷休暇、懺悔休暇、手足休暇を厳しく刈り込むことによって、きちんとした偉大な刑務所[やすりかけの家]、強制労働所[仕事の家]となるよう加工され、引き上げられることでしょう。いつでも勤勉な座業肉、手作業肉で詰め込まれ、皆がその中で、汗をかきながら、咳をしながら、霰弾を放ちながら、掃除しながら、怒りながら、よそ見さえすることなく、悦楽や愛情や天国や地獄を気に病むこともないのです。 — ウルリヒスシュラークの方々、貴方達はほとんどきれいに相応しい人々です」。

私は早速彼らの許を去ることにしよう。私はまずただこのような仕事の家は本当に一万の悪魔の許に行けばいい、そして地獄(このような煉獄)に行けばいいと願い、その前にその家の下で爆破のためにちょっとした坑道を作りたいと願うものである。

「金に関しましては」(と私は続けた)「この内部の人間の心に関しましては、数年前から、金をむさぼり食い、浴びるほどに飲んでいる諸国家を遺憾に思うものです。最良の国家でさえその城塞の民にただコーヒー[の水]を断っているだけです。しかしなぜコーヒーがその代理人を下院に送るのを許しているのでしょうか、つまりチコリー[代用コーヒー]、柏の実、カブラ、それに悪魔[畜生]です。なぜ人々は — 同じ理由が叫び声を上げているというのに — 至福の説教に対してただ一つの源泉だけをふさいでいるのでしょうか。なぜ紅茶やワイン、肉、ビール、焼き菓子はかくも自由に許されているのです。同様に果物や野菜、すべてのただ美味しいものだけが許されています。健康なパンがあれば養って

いけるというのに。こうしたものすべては外国へ輸出すればいいのです。ちょっとしたペニヒの金が国内に入ってきます。— こうしたことをすればすべての商品が、オランダ人の許のフランス語の本のように、単に発送され、出版されることになり、少しも消費される必要はないということになります。— ウルリヒスシュラークの方々。そうなると国家は一つの大きな、輝く銀器用戸棚となって、すべての臣下は国王にとって国王が困ったとき使用できる貴重品とならないでしょうか。—

享樂する人間は確かに私の心を魅了しない、享樂は利己的な自己を剥き出しにするからである。しかし喜んでいる人間は私を喜ばせる、歡喜というのはすべての天上の音が鳴り響き、飛ぶことのできる純なエーテルであるからである。エルヴェシウス夫人⁽⁴⁾は、ただ胃が静まるように粥の川があればと願っている。誰がその両岸に住むだろうか。明らかにタヒチ人、ギリシア人、イタリア人、ヒンズー人で、この人々をグリーンランド人やフェゴ島人、その他の塔の番人が極地の両飢餓の塔から眺めることになろう。

ファン・デア・ハフトや他のハフト家の人々は。— 二、三人の小売業の人々を除いて。— 私の原則を、熟考されてはいるが、しかしほとんど厳格すぎて、実行しがたいと考えた。— 大伯父は食後。— 彼は老いた頭に二と三分の一杯のワインを収めていて。— 好意的に呼び寄せて、内々で遠慮なく、一体私が気球船に乗って何を狙っているのか打ち明けるよう頼んだ。「私ですか」（と私は言った）「何も目指していません、冗談ですよ」。— 「真面目に、甥よ、いずれにせよ、高度の測定とか、天文学的あるいは気象学的実験とか雲の調査といったものを告白できよう。しかしこの労多い旅は実生活とは関わりがないのか」。— 「まことに、下界に飽いて、ただ気晴らしに空で暮らしています」。— 「そのために健康を冷たい薄い空気で害しているのか」。「靴屋だって、作家だって、座業者だって健康を害しています。全く健康でいるためには家畜のように、あるいは熊のように鹿のように生きなければなりませんから」。— 「雷に打たれたらどうする」。— 「そのことは私もしばしば考えました。そうなったら私はお仕舞いでしょう。しかし多分私はその前に目標を決めます。— 私の大伯父さんにそのことを言わない法がありますでしょうか。私は地理学的軍事的空のスパイとして旅しており、シュヴァーベンでフランスの兵役に就いて、弾に当たらないならば、運をためず所存です」。— 「それは結構、甥よ」とこの阿呆は言った。— 盲目の者達よ、胃に対しては。— 彼らはそれを許すことだろう。— 何でも犠牲にしていいのだ、年月であれ、血であれ、一片の徳操さえも犠牲にしていい。しかし心に対しては、人生の喜びに対しては、胃が祭壇で食しないまま残しておくものしか犠牲にしてはならないのだ。そして聖なる靈は君達にとっては主馬頭、料理人頭、世襲給仕頭、いや胃袋のボーイでしかない。去るがいい。私はまた昇るつもりだ。—

私は今日鯨食亭ではもはや航海誌に一行も書けない。しかしここに、私がサトゥルヌス侯爵の名前で（その国はすでに述べた）実働的書記としてまとめたこの場に相応しい奢侈禁止令を綴じ込むことにする。

我々の国のすべての居住する諸本に対する服装制限

斯く斯く然々の我々は我々の国々に蔓延する贅沢に気付いて極めて不機嫌である。すでに乞食達がカラフルな滑稽な服装で、あらゆる布地の貴重な切れ端を縫い合わせて、蛾の

ように遊歩する色彩ピラミッドとして贅を尽くしている。その身分には、優美女神や虫どものように一般的な身嗜みのスパルタ的ヴェールをまとうのが相応しいというのに。しかし勿論我々の国のスパルタ的国民服に関与しないのは、単に外国人の乞食どもにすぎないと期待したい。

しかし本に関しては、その服装の贅沢さは自明であると共に甚大である。かつては謙虚な司祭の職服と葬式用外套が徘徊していた聖職者的、敬虔な作品が、イギリス仕立ての洒落者のような服を着て、モールを付け、それでいて神について話している。 — 法学の民はかつては豚のように、つまりその革をまとして、あるいはまた羊の皮で歩いていた。あるいは木製の潜水服が法の制服で、その四つの蹄には鉄が打ち付けられていた。今や彼らは背革綴、ほろほろ鳥として飛び出してきて、それでも[貴族の]長いガウンの⁽⁵⁾人を演出しようとしている。昔ながらの[大型の]二つ折り本ではもはやない、二つ折り本の言葉を話してはいるけれども。

医師達は以前のような半喪服ではなく、大理石紋理紙である。 — 歴史本、哲学本は自分勝手な服を着ており — 他の作品は化粧着で仮綴じされている — 何人かの者はトルコ風に、あるいはトルコ紙で歩いている — 所謂月刊誌は肌の他は何もまとしていないが、しかし肌を多彩に入れ墨している。 — 多くの長編小説が奔放な衣装で、例えば金欄をまとしていて、それで常に外套やダスターコート、髪粉用化粧着を着用しなければならない。

極めて狼藉なのは新年用行商人、祝賀者、つまり年鑑である。これらの寄せ集めの子供らは、めったに何かまとまったものを着用しないその善良な困窮した両親を余り手本にせず、両親を恥じて、黄金のチョッキや、絹の服をまったり、あるいは（モロッコ革の）緋衣の枢機卿として登場し、黄金の鯉として指の間をすり抜けている。これらの被造物は正真正銘の甲殻類であって、いつも樹皮製の小屋や番小屋、駕籠、柔軟なコルセット、あるいは小さな自己書架[*3]に収まっていて、彼らの多彩な肩帯、綬の部分をつかむと、やっとなら彼らをその中から引き出せる。

斯く斯く然々の我々がもはや座視できないのは、かつて金泥書きやルブリカ書きが本に用いていた黄金や色彩を、今やよく蔵書家がするように、単に本の外部に張っておることであり、 — はなはだズボンや太鼓や石盤として人間の役に立ち得る立派な革を本の装丁にしていることであり、 — 最良の最強の紙が有益で愛国的な商品の代わりに本を包んでいることであり、その本自身がかの商品を包むのに相応しいというのに — そしてこうしたならず者がロンドンで見られるように流行しているということである。 — こんなことより今や我々によって定められるべきは、すべての本の仕立屋が、布の供給者ではなく、その綴じ針の許に留まって、いつも『製本屋への報告』で呼ばれているような製本屋ではなく、単に本綴じ屋となることである。すべての作品の国民服は自然であるべきで、新聞や分別ある月刊誌のような服であるべきである。つまり前扉[汚れたタイトル]が前方にあり、結末と尻当て皮（索引）は後方にある、それかせいぜい両方とも白い製本用紙あるいはシャツの類の紙である。

単に、宮廷のガウンでの接見に行きたいような作品のみが、あるいは所謂贈呈本のみが、通常の本の化粧をして、黄金の刺繍の服や上品な白い下着を着て登場すべきであり、宮廷製本家、本の衣装寮長官は専らそのことに留意しなければならない。というのはビーバー

達のうち一人きりの者どもは汚れて傷んだ皮を有するが、群れる者どもは上品な可愛い皮を有するというビーバーの逆が人間についても、本についても妥当するので、かくてまさに宮廷こそは、立派な本という上品な衣装が最も良く保存される場所になるからである。宮廷では殊に侯爵の紋章でカバーされ、誰も本の腹の美しい黄金に手を置かないのであり云々。

*

私は海に憧れた。すると見よ、今日にも私を海の砂漠の上に連れ出すような嵐が今外で生じている。

- *1 そのようにポーランドの Kowno でも (シュルツ⁽¹⁾によれば) 夜警人のペアが臆病心から一緒に歌い見張る。
- *2 両者ともゴットヒルフ[神のご加護を]、ゴッテス・ゾルゲ[神の配慮]等の名前を有する。D.H.
- *3 ケース。

第十一航

大海と太陽

北方では太陽がオークニー群島の背後で薄明かりを放っている — 右手では人間達の岸边が霧の中にかすんでいる — 魂達の静かな広い国として空虚な海が空虚な空の下に見えた — ひょっとしたら船は水鳥のように表面を渡っていったのかもしれない、しかしそれは余りに小さく白く、遠方というヴェールの下、進んでいった — 崇高な砂漠のような風景、汝を見ると心はより偉大に鼓動する — 汝も去っていく、青白い太陽よ、そして白い天使として極地の氷壁の静かな修道院の中に沈み、汝の花と咲く、波の上で金色に漂う花嫁衣装を引きずっていき、それに包まれる。薔薇の衣装の青白い太陽よ、汝は今どこにいる。汝は氷原の中で暖かい活気ある目となって微光を放つのだろうか。 — 私は下の暗い世界の冬を覗き込む。下の方は何と無言で果てのないことだろう。圧倒的な広大な不気味なものが千もの肢体となって動き、皺をつくり、そしてこの海の前ではその父親の空ほどに偉大なものは何もない。 — 偉大な息子よ、いつか汝の許に行ったら、汝は私を父親の許に連れて行くだろうか。 — 何という黄金の眺めか。夕焼けの中アウローラが輝く。海の冥界から黒い経帷子を素早く奪い去るものは何か。 — 人間達の国々が何と黄金の朝のように燃え上がるのか。汝、立派な愛しい太陽よ、かくも若々しく、薔薇のように赤く、汝はまたすぐに我々の許に来てくれようか。汝はまた、長い一日の間、人間達の庭や遊びの上を優しく移って行くつもりか。不死の太陽よ、昇って輝くがいい — 私はまだ冷たく青ざめて私の水平線上におり、更に下の暗い氷の許に行くことにする。しかし私もまた、神よ、太陽のように、より暖かく、より明るく昇り、汝の永遠の中でまた陽気な一日を巡ることになるだろうか。

第十二航

聖ゲルゲン⁽¹⁾大学 — 当地の哲学者と文献学者 — 偽りの木霊 — J.P.の貴重な断編

風があとわずか三日間南へ吹き続けるならば、私はひょっとしたらスイスに着くかもしれない。私が単に一日間私の気球商船で風評の市場、聖ゲルゲン大学[*1]に入学しても、何の害もなかった。降下しながら私は高い窓の前を飛び過ぎたが、窓越しに私は有名なドイツ疾走者ラングハインリヒ⁽²⁾が、彼は蝸牛のように通り過ぎる小都市にその旅行記のインクの粘液を残しているが、強張ってその安楽椅子に座っているのを見た。しかし私は — すでに彼は『一般ドイツ文庫』の前に戸口上部の装飾として立っているの、 — この速歩馬が描いて貰っていたのか、髭を剃らせていたのか知らない。ところで。なぜ人々はかくも多くの経済学者や文献学者、法学者の全紋章学的人物像棚をクリューニツ⁽³⁾百科辞典や一般ドイツ文庫等々の表題紙控えの間としてばらまいているのか。観相学者や画家はこのような勤勉な、しかし卑俗な顔とは余りかかわろうとはしない。いずれにせよ、あらゆる週ごとの市場でこのような観相学的商品はただで入手できるからである。愛好家や友好者は特に頭部を、重い巻抜きで、享受したいと思う。かくて例えば私はこのような頭部の一連のお供を大部な作品から切り取っていて、このお供を持ち歩いている。さて落ちて座すようなことになると — これは毎朝最初のブラック・コーヒーを飲んだ後に生ずるが、 — 私はこの頭[肖像画]を取りだして、この投影図をしっかりと自分の頭に叩き込んで、それから私として裏面にちょっとばかり記す。かくて私は永遠に諸頭部によって頭が明晰になり、洗練されて、それから潰し出された蜂蜜となって容易にこの世から出て行くことになる。

私は聖ゲルゲンの一人の天才の許にも走って行かなかった。私が目に見えないミミズの足の上にある所謂天才達の王座に引き付けられるようなことがあれば、私の気位がそれに敵対することだろう。私の気位も私もこの遊撃隊の利己的な呼吸や自慢、それどころか口頭の空虚さは数年前から承知しているのだから。彼らの中から汲み取るべきものは女系采邑、つまり肉体以上のものはない。しかし有名ではないけれども別の男からは、しばしば気の利いた言葉が汲み取られる。ちょうど単に有名でない者達のみが、彼らの文学的手紙の書評は友人の返事であるが、より良い手紙を書くようなものである。しかし私は聖ゲルゲンでかなり臨時聴講を行った。私が一日中喜んだのは、官立の教師達が文書証明力[*2]を有していて、彼らが全く証明できない事柄でも従って彼らの言を信じて良かったということである。哲学の三聴講室では私はもっと良く抽象した[排泄した]、つまり私の体のことである。食欲が増して、筋運動は殊に顔面で新鮮なものになった[*3] — これらすべては私がおも節度ある無害の洞察を行い、真理を求めること、三人の教職の端役達同様であることの最も信頼するに足る徴候であった。我々三段論法上の四つの格が強力で不自然な洞察によって仕事をしていたら、六つの自然でない事柄⁽⁵⁾[本能等]は得るところが多いというよりももっと苦しんだことだろう。そして我々は全く便秘になり、顔に皺が寄って、筋肉は弱まり、半ば解体して家に帰り着いたことだろう。なぜ郡医や町の医師は、胃の快適さ以上に長く深く哲学することがあってはならないと、単に自らに要求するだけで、哲学的助手達にも要求することをしないのか。ビセートル⁽⁶⁾の物静かな阿呆達は調子のい

い時間に麦藁の箱を編み上げる。空虚で堅固な語形はそのようなものであり、自分の筋肉や聴衆者に奪うよりももっと与えたいと思う哲学者は誰でもその語形を編み上げるだろう。

後でまた私は文献学者や歴史家、美学者達の許で臨時聴講した。年取った大学総長代理は彼が自らに投げかける滑稽な光で私の心を捉えた。彼は愛のオウィディウスを真面目にぶつぶつ言いながら読み終えたのだが — 古典の古い下着の青白い漂白職人として数十年異本や校訂の黴を刈り取りながら — その生涯の中で四人の福音史家の記す五人の女性執政官よりも他の愚かな乙女達のことは知らないできたのである。 — しかし遊女といっても単にバビロンの淫婦達しか、理想的な聖母といっても単に自分の主婦や行きずりの乳母しか知らない手堅い学校教師にとって、仮に編集者が彼に対して、若々しい、韻文や文書に記された恋人達で一杯の部屋を、耳の後ろに書評のペンを挿んでナイトガウンやナイトキャップを着用して用心しながら歩み、すべての部屋での一般的な拝跪や崇拜、愛の告白、口頭の燃える言葉、投げキスを正確に査定し、いわば毒味するように、そしてその後でそれについて目録を渡すように強いるとすれば、 — この老男性には何と無趣味に厭わしく思えることだろう — それは無理難題ではないか。 — なぜ学校教師に対して、自分は現実には避けてきた炎が、なお紙上に後になって置かれるのか。

ドイツの教壇ではまた、私がいつもドイツの本の中で忌々しいと思っているもの、つまり彼らの接続詞への愛着を見いだした。彼らは樽の形に順に箍を重ねて、それから一つの樽を得る。植字工はどの言葉の間にも所謂スペースを置く。ドイツ人は思考の間にも効果的なスペースを欲して、その為に言葉や総合文を入れる。自分の件を一気に吐き出すような者を、彼らは全く当惑してびっくりして見つめる。この者が更に話を進めて、まずきちんと下に降りたり上に登ったりしないで、また山頂から山頂へ飛ぶと、彼らはすぐにこの山頂飛翔者を見失ってしまい、むしろ帝国新報を楽しむことにする。そこでは最初から話を始める者はいず、もっとその先から始めるのである。しかしこの欠点は良い点もある。ドイツ人の作家とその粘土は、両方とも水を単に引き入れるだけで、通過させることをしないのだが、まさにそれ故泉となるのである。

私は宿で、ある有名なドイツ人の作家⁽⁷⁾が、その著作はそのフランス語の姓の長いドイツ語の翻訳[ラフォンテーヌ、泉]なのであるが、一全紙の草稿をまとっているのを見つけた。草稿の全く立派な箴言は線で削除されていた。私はそれを剥いで、第十二航の末尾に綴じ付けることにした[*4]。

最後に私は四人の聖ゲルゲン女性、女性教授達も聴講した。彼女達が聖ゲルゲンの教壇に下すアカデミックな裁判を聞くだけで私は大学というものは — 少なくともその平和的な同業者達の生活の面では — 例のかつては父親殺害者達を溺死させるのに用いた袋に似ていないでもないと納得できた。その袋の中には一羽の雄鶏と一匹の蛇、一頭の犬、それに一匹の猿（あるいは猿がいないときは一匹の猫）がその殺害者の他に同僚として一緒に入れられたのである。

私は退屈なラングハインリヒよりも三時間遅れて出発した。彼は座業界に自分の顔の肖像の他に、自分が馬をとめるのに相応しいと思う国々の肖像を手渡そうと計画していた。私は彼が下の広大な平原を進むのを目にした。彼の御者がたまたまデッサウ行進曲を吹いたとき、私は私の小ホルンを吹いて、山彦のようにその行進曲を弱く強く二十三回繰り返

した。ラングハインリヒは頭を突き出して、ただの平原を見渡した、この平原からは得体の知れない木霊の由来を聴覚的に説明できないのであった。しかし彼はその珍しい出来事を旅行記に記して、すべてが平原であるところでの二十三回の反復をどう考えたらいいのか — むしろこれは倫理的に信じられることであろうが — 物理学者に尋ねることにした。

以下は上述の草稿である。

*

誓って言うが、一人の侯爵にとって第一級にして最高位の忠実な、すべてを報告してくれる大使がとて必要で有益であるのは — 自国を措いて他にない。

*

女性が女性について話すときは、特に美しさにあっては分別を、分別にあっては美しさを顕彰する、孔雀にあっては声を、小夜啼鳥にあっては羽毛を顕彰する。

*

女性は舞台では泣くふりをする役のときの方が、泣かなければならない役のときよりも上手に演ずる。

*

人間はその意図をしくじるときほどに、その意図を容易にそして強く露呈することはない。

*

冗談は無尽蔵である。真面目はそうではない。

*

感傷的な偽善者に長い話をさせてはならない。長い話で軟弱になろうとするからである。話すときにのみ泣くことのできる人がいる。

*

果たす期限の定まっていない約束ほど守るのが難しく遅くなるものはない。それ故多くの者が友人にしばしば借りた金を返さない。

*

人は自分の失敗を、その失敗をすぐ後に後悔することでまた埋め合わせようとする。他人もまた自分の失敗を後悔して、そしてまた後悔で償おうとするとなぜ思わないのだろう。

*

秘密を守ることは、それがしばしば際限もないことになるので、それは難しいことにな

る。五十年も続く良き行為というのは人間にとっては余りに厄介である。

*

我々の欲望は、ポリープの腕のように、獲物と共に獲物を捉えた自らの腕も同時に飲み込む。

*

匂いの味に対する関係は、思い出の現在に対する関係に等しい。

*

青春の時に希望は虹であるが、老年では本物の虹の隣の幻の虹にすぎない。

*

改革者はいつも、時針を動かすためには単に分針を、しばしば六十分の一秒針を回せば良いということを忘れる。

*

最後の審判の日同様に詩は我々を変えるが、詩は我々を変えずに、我々を神々しいものにする。

*

ただ苦難のときにのみ人は自分の欠点を裁く、ただ暗闇の中でのみ大きな鏡の中の気泡を調べ、見いだすようなものである。

*1 これは**であるか***であるかだが、きっと*ではない。先の方で出てくる紀行家のラングハインリヒは私にはそれ以上に不明である。D.H.

*2 この証明力によれば文書集成の記録は、それが不完全であって、日付がなかったり、単なる写しであるとしても、単にそこにあるということで証拠力を有するのである。シュトゥルーベの『くつろぎ』[1765]。

*3 プラトナー⁽⁴⁾の人類学によると、洞察が適度であれば健康に上述の良き作用を及ぼす、また程度が大きくなれば邪悪な作用を及ぼす。

*4 奇妙なことである。その紙は、私が察するに、私の長老牧師の草稿からのものである。しかし彼が航海誌に綴じ付けるのは私には結構なことである。私が自分にどんなに厳しく検閲をし、他の者ならば印刷させるものを、いかに多く私が削除しているか、批評家達に対する少しばかりの証明となるからである。しかしこうした削除された草稿で（聞くところによると）立派な取引がなされていて、草稿がしばしば模倣者達によって求められているそうである。彼らは削除線を消して、原稿を新しい自らの仕事として、再び自らの原稿と巧みに混ぜ合わせて、再度植字工に渡すのだそうである。D.H.

第十三航

世紀のアトニー — バート・ヘレンライス — カンディードの尻 — 百姓の結婚式とその際の説教

私は真っ直ぐにスイスに山々に向かって飛んで行く。ただ敵対する党派のように出没する雷雲のせいで、私の気球はおびき寄せられては、しばしば大地と接するように強いられた。今朝私はバート・ヘレンライスに降下し、今そこに座している。ちょうど鉱泉を取り囲んでいた上流の病人達が杯を持って私に近寄ってきた。私は彼ら皆に対し冷淡に接して — 例えば反芻する家畜の群れの見物人と見なして — 私の気球を整えていた。様々な顔の可愛い集合。どの顔もその所有者にとって[本人にとって]小黒板として据えられていて、それはウィーンの中央病院の患者のベッドに掛けられている小黒板という按配で、そこには患者の浣腸や痙攣、咳、便秘、喉の渇きが記録されているのである。その大部分はその上奉仕する同胞ではなく支配する同胞で、この小大陸のどこかの小部分に自分達の病者の椅子、侯爵の椅子を設定していたのである。かくて看護人は長患いの者に、盲人は犬に、女性は男性に支配されることになる。というのは女達が男性化し、男達が女性化して以来、それはアーヘンの羊飼いの娘達が口笛を吹き、少年達は単に歌うだけのようなものであるが、この王朝以来女性は男性を支配するよりももっと自らを支配するようになっているからである。策謀と弱さは強さよりももっと好んで命じ、正義よりもっと容易に支配するのである。

問題は何かもっと苦しめているか、王冠の重さであるか眩しさであるか、王笏による手の胼胝であるか背中のみみず腫れであるかということであるが、しかし人間はそれでも舞踏会や宴会や射撃すらも、舞踏会の女王や宴会の王、犠牲祭の王、射撃大会の王を決めずには遂行することができない、副王は言うまでもないのである。近視眼の長首の者達は一人の国王の眉毛の動きに非を鳴らす、この動きが、陰気に下に行くか、陽気に上に行くかで、一つの世界を沈めたり昇らせたりする、と。しかしこれと同じ眉毛の動きの見られないような共和政体の土地を五フィートであれ歴史上存在するなら私に見せるがいい。どの大臣も、ローマやパリのどの総指揮官[ナポレオン]も眼窩の上に眉毛を有して、その毛のうち一本に深淵の上の国々が懸かっている[*1]。君達人間は、自らは卑小なものではなく、偶然の犠牲の動物ではないとも思っているのか。他人が丁重さから君達の名前で — 決心してくれたら神に千度も感謝するようなものではないと思っているのか。 — なぜ君達は習慣を、この意志喪失の代理人、武装者を、また風習、この不在の精神の後見人を、かくも尊重するのか。 — 溜まり水の池から新鮮な、いつも流れる川の水に投げ込まれたら、君達や蛙は死んでしまうのではないか。君達はせいぜい一人の独創者を我慢するだけで、リュウベックがただ一人のユダヤ人を我慢するようなもので、一方数百万の模倣者を許す。数百万の独創者を許し、わずかな模倣者を我慢することはしない。 — どの独創者もまさにその反対物を、つまり模倣者や猿どもを生み出すのではないか。それ故ドイツの批判的な森には卑俗な猿が — 豚の尾の猿が — 犬の頭[こうもり]が — 白い髭猿が — 黒い髭猿が — 翼状の髭の猿が — 帽子猿が — 青口猿が — 白口猿が — 手長猿が — 無数の狒狒が — 更に何匹かの尾長猿が座していないか。最後に、こぼれる人類は砂時計のように向きを変えさえすればまた動き出すので、人

類は積み上げられた、アメリカ向けの船の中の兵士達のように、同時に集団で転向しないだろうか。かくて改宗者というよりは一つの改革が生じていないだろうか。 — それ故私は、鞍にどっかり座って、曲げにくい長靴をはいたドイツ人が、私のかの大いに懸け離れた比喻に対しては、しっかり腰を据えているために、まことに嫌々ながらにしか付いてこなかったことに安堵するものである。

今は真夜中である。風の西よりの偏角がなかったならば、飛び立てていたろうに、私は発汗浴のヘレンライスで丸一日を台無しにしたのではないかと思わないで欲しい。特に私の気が安まるのは、私はひょっとしたら（私のこの敬虔な夢を許し給え）この発汗の湯治場を、つまりそこの貴族の部分で、通常以上の憤激や憤怒に陥らせたのではないかという希望を抱いている点である。

それを詳しく言うと結婚式の説教師としてである。つまり私は多くの昔からの知人を見いだした、ボヘミアの貴族であり、ベルリンのペピニエーレ公使館の伯爵であり、地方高級裁判所判事であり、星形勲章の馴染みのザウファウス[*2]である。グラウルよ、君に話しているのだ。

こちらには皆に称えられるカンディード侯爵夫人がいて、彼女のために毎日何か催されていた。いわんや誕生日ともなると尚更である。君に一般的尊敬の念の一例を挙げると、人々は当世の庭園のブランコをカンディードの尻と呼んでいる、彼女がそこに座って以来そう呼んでいると申しておく。それはフランス語での冗談に由来している。上述のザウファウスは、彼女がブランコで引き上げられて、飛んでしまったときに、とても上手な語呂合わせをしたのだ。彼女は間違っただけで起きた[おかんむりだ]が、しかし最初だけであった。[彼女は尻から最初に起きた]。そのことで別の者はブランコをヘレンライスのパリの尻[下着]と呼ぶことを思いついた。遂にはすべての貴族が容易に一致して、王妃とブランコを先の名称で永遠化することになった。侯爵夫人かあるいはその夫、あるいは天才がどこかのベンチや公園のアルプス等々で咳をしたり、くしゃみをしたり、つまずいたりしようものなら、アルプスはその件と自らを永遠化して、今やネポムツェナのあるいはネポムク等々の咳、くしゃみ等々と称することになる。例えばブリュッセルの公園でピョートル大帝がワインをたらふく飲んでひっくり返り、石製の水盤の中の水の中に落ちるとそれ以来その出来事あるいは事件は水盤に記されることになる。かくてライプツィヒではパウリヌム・ツヴィンガー[内庭]にテツェルの骨が、 — 以前こやつはパウリーネ教会に横たわっていたのだが — 見られる。これは勿論多くの商品を商う町にとって、その為の免罪を売るような男に無関心ではおれないことから生じている。

湯治の全貴族は、侯爵夫人の誕生日にボヘミアの百姓の結婚式を行い、彼女のために百姓の衣装で演ずることがその美しい夫人と誕生日に相応しいと考えた。私は結婚式の神父にしてもらった。私は私の緑の外套をニュルンベルクの結婚式用外套として使用することができた。行列が進んで行った — 何人かの百姓達は百合や天使であった — 百姓のカップルは勿論むしろ一繋ぎの干涸らびた梨に見えたが、脱皮期の蟹で、つまり外皮の甲冑の見せかけの下、卵のように柔らかな性質の者達であった — 王妃は嬉しくびっくりしたものの、何に仮装していか分からなかった。というのは仮装すると誰か分からなくなるからであった。ただザウファウスは思いついて、花嫁の父になった。百姓達は丁重で鈍重であった。宮廷のドイツ人は着替室をすでに冗談の舞台と考えるものである。長い放蕩

は単に女達をより賢くするだけで、男達はより愚かになる。若者達は火酒のようにほてっていて、その精は燃え出ている。彼らが顔にまだ保っているのは、ただ先の分別の肩書きと印だけで、ちょうど食卓の空いた瓶がその内容物の銀の勲章の鎖を有しているようなものである。しかし偉いさん達はどんなに劣等に違いないことか、自分達の進行する脱力の感情で改善することさえないのだから。

退屈な場面は恭しく、それどころか拍手を伴って演じられた。私はウィーンのスーパール亭やファーゼン亭、月光亭で — これらは居酒屋であるが — 何人かの「ホール教師、あるいはダンス教師」と知り合いになったが、亭主は客と踊り明かす彼らに毎夜四十クロイツァー支払うのである。私の湯治客の貴族はすでに宮廷で年金等々と引き換えにこうした喜びのダンスを学んでいた。

手始めにまず、私は自分は結婚式の説教師である、そろそろ話を始めたいと思うと述べた。私はカンディードの尻に上がって、そこに立って、自分の周りにはいる黄色の、萎れた、はれぼったい、惚れた、平板な似而非百姓の一同をほとんど皮肉に見渡して、舌の回るかぎり、シニクな湯治の無礼講でこのように話した。

「立派な村の皆様

私は今日は皆様と新婚のお二人にただ喜んで頂きたく存じ、最後にただもっと強く、普段軽視されている皆様の身分が高貴な身分に対して勝っている諸利点を指摘することにします。と申しますのは皆様はそれらを十分に評価していないからです。健康そのものの皆様は自分達が樹皮の下に何という木髄を有するか、自分達の枝に何という花をつけているか十分によく考えたことがありますか。まず皆様、自分達を見つめ、それから頭の中で自分達の知っているような町や湯治場でのお偉いさん達と一瞬でも自分達を比べて — その違いに気付いてみてください。何と彼らは惨めに脆弱で、くすんだ薔薇色、黄ばんだ葉の色に見えることでしょうか。私はしばしば彼らのために祈ります。何人かの者は、死刑執行人が正直に裁くように、徳操という立派な罪を犯し、例えば仕方なく不本意な節制を行います。モラリストとしては自発的な節制が望ましいのですが、ある者は一日中死んでいて、わずかに眠っているとき元気になります。大抵はぼんやりしています。

皆様、堅牢な無垢の農夫、ポヘミア人にとってこうしたことは自分達の住んでいる村とは全く異なるポヘミアの村です。皆様の健康な生命の明かりはまだ穏やかな春の息吹を吹き散らしたこともなく、より早く燃え尽きさせてもいません。皆様はあの立派な、大胆な、自由な、筋肉質の、胸板の厚い、根のしっかりした、眼光の鋭い未開人に近いのではないのでしょうか（ただ皆様の方がより教養があつて）そして自分達の正体が分かっていないのではないのでしょうか。

お聞きください — 高貴な者は皆様を妬視しています。まず皆様の罪を犯す力を、それから徳操への力を妬視しています。高貴な者は皆様の容易にのしてしまう — と同時に創り上げる強力な拳に目を留めて、そして自分達には何もないと考えます。いや高貴な者は皆様を健康な獣のように嫉妬していて、解剖学者によれば動物的尾の黄金の ABC であり骨端である人間の尾骨が更に伸びることを願っています。彼らは僧侶達のようにヨーロッパの最も肥沃な地に住んでいて、胸に「死を想え」を抱いています。申し上げますが、フランスの貴族が自分達の作品の正書法を植字工や校正者から好んで習うように、彼らは

自分達の人生の倫理的な正書法を満足してその聴在師や葬儀説教者から受け入れるでしょうが、ただその前にまことの不正書の人生を送ることが恵まれていさえすればの話なのです。

より小さなもの、皆様の徳操すらも偉いさんの嫉妬を免れません、良きボヘミアの方々。相変わらず徳操へのある種の情熱を失いたくなくて、蜘蛛や鼠が音楽に執心しているようにむしろ徳操に執心している哀れな金持ちや高貴な者達は、甲斐性がなくて、舞台や絵画、ロマンチックな書籍上でのこの優美女神達の観照に向かわざるを得ません。しかしかなうものならどんなに彼らは皆様同様に徳操を所有していたいことでしょうか。聴衆の皆様、皆様は自分達の有するものをほとんど知らないのです。一 病弱さは恐れを生みます、しかし恐れは、これはかつて神々を創造していたのですが、今では神的なものを否定します。なんとまあ情緒の弱虫が他人に対してというよりも自分に対して罪を犯すことか、反吐を催すほどに恐るべきものです。そしてこの弱虫が一つの自我を有することはまことに悲しく残念なことです。かくてまた身体的に失神している人々も括約筋の麻痺故に最良の状況にはなく、類似の状況にあります。それ故若干の身分にある人間はもはや決して明確に諾とか否とか言わず、口に出しません。そうではなく吹き出すのは（風が北東の風等を吹き出すようなもので）諾否諾、あるいは否諾否です。同様にまた何人かのドイツの学者はまず「勿論」と言い一それから「確かに」一それから「然るに」一それから「その限りで」一それから「それでも」一それから「にもかかわらず」一最後に「ひょっとしたら」と言います。一それ故偉いさん達は皆様の困窮にははなはだ厳しく冷淡なのです。病人というのは自分のベッドの外のどのような困窮にも冷淡なのです。

しかしより高貴な者に不公正であってはなりません。皆様が衣装を脱いだら、皆様はひょっとしたら貴族になった百姓として諺通りに最も厳しく苦しめるかもしれません。皆様は勿論芸術や詩よりも食事に味覚を有することでしょう。しかしまた皆様は貴族性と満足さに関して貴族を凌駕することになります。皆様は貴人ではなく一華人でもなく一（私の聖なる台ははなはだ揺れます）一貴頭でもなく一貴神[*3]でも一都市貴族でも一神貴族[*4]でもありません。しかし従者あるいは郎党一神の家人一半自由人一四分の三自由人一小農一小作人であり一忌々しいブランコです。一確かに皆様が貴族と共有するものはポーランドの貴族と共有する耕地の他にはありません。しかし皆様は湯治の客ではなく、健康な湯治の旅館の主人なのです。一皆様は、騎士の位ではなくても、百姓の位を授けられています。一皆様は最も美しい国妃の王笏の許に暮らしていて、今日は一組の婚礼日に王妃の誕生日を祝います。一皆様は（これをお考えください）勤勉で、頑丈で、若く、快活で、大胆で、堅固、肉付きがいい。一」

説教壇が揺れて、私はアーメンと言わずに飛び降りざるを得なかった。人々は笑い、少しも改善されなかった。私は前もって分かっていた。人々は私に感謝した、私はそのことは何も気にかけなかった。明日私はきっと旅立つ。風はもっと北よりになるだろう。深い退屈の念がよどんだ金属腐食剤と共に私の心の壺を満たした。これらのヘレンライス人と比べたら、粗野なウルリヒスシュラク人達をまた鼻根にせざるを得ない。何と惨めなことか。一

- *1 勿論一人の許での多数のこの従属は民主政体においてさえも、一時的なものであるが、見られる。(どの専制的な一者も単に一時的なものであるが)。しかしそれ故に実践的理性は、全く別の人間の国を要求し ー 従って準備している。 ー その国は一人を数えるとか五人までとか五百人まで数えるというのではなく、無限の数に至るまで数えるのであって、そこでは自らの理性の他に支配する理性はない。この倫理的国は単に倫理的構成員のみを前提とするが故に不可能となろうか。小人数ですでに現実のものであったことが、より多い数になると不可能になるだろうか。D.H.
- *2 私は知らない。D.H.
- *3 貴族の古い言葉。D.H.
- *4 都市貴族はかつてパトゥリーツィアと言った、神貴族は司教参事会員と言った。D.H.

第十四航 最後の航行

風はとても新鮮に真っ直ぐに吹いているので、私は一日中この上空で執筆し、食事をしていたら、夕方にはきつとうまくアルプスの一つの山に降りることができよう。私はそうする。私の船は普通の重たい糧食船である。飲み食いしているとしかし時間と共に人間と船が上がって行くことになる。

しかし私の内部には痛々しい夢の鬱陶しい雷雨がまだ残っている。私はその夢を見ながら、一晩中、熱く、滑りやすく、逆流するヴェスヴィオ火山の灰の上にいるかのように、堅牢な平たい地点に達しようと空しくもがいていた。私は夢を見たが、私の流血する胸の上には真っ黒な雄鶏⁽¹⁾がいて、ひっかいて、私の心臓を掻き出そうとしていた。更に、私の小さな郵便ラッパが四つの夢を通じて勢いよく苦しげに最もつんざく音色で叫んで、一つの夢がこっそりと「静かなもの」と呼んだ一つの熱い吐息によって淡紅色に燃え上がった。君すらも、親愛なるグラウルよ、目覚めの朝のこの亡霊どもの中に混じっていた。私は君に向かって行った。しかし君は振り返ることができずに、単に操り人形のように、腕を逆に回転させて、私を迎えて、私を温かく君の背中と弁髪とで抱きしめて、余り脈絡のない言葉を語った。「冗談は冗談 ー 人間はそんなもの ー ジャンノッツォ、私の許においで」。しかし君は私に君の周りで跳ねることをさせず、私をもっと強く抱きしめて、もっと大きな声で叫んだ。「ジャンノッツォ、どこにいるのだい、会えないのかい、君のことを本当に思っているのだ、哀れな奴」。

グラウルよ、君が手紙に書いたことを守っているのであれば、ひよっとしたらスイスで君に会えるかもしれない。

ちょうど私の下に各種の最新号の報知紙を見いだした。それらは私がどこにいるのか、路地の角の銘のように教えてくれる。ウィーン移送の何人かのコンサート団員がすでにソロ演奏家として森の中で働いていて、自分達の件を演奏している。つまり私はシュヴァーベン上空にいる。

葡萄畑は何と緑に茂っていることか。ネッカー川が何と輝いていることか。 ー しか

しますます私には、これらの平野をすでに昔夢の中で歩き回ったように思えてくる。

いや、その通りだ。今私はかの見知らぬ魔法の庭、かの朝の庭の上空を移って行く。ここでは偉大なテレーゼの黒い目が私の横で輝き、私が彼女の胸から薔薇を抜き取ったのだ。テレーゼ、ここでもう一度受け取るがいい、私は君の園に薔薇を投げ返す。しかし君は今燈台には立っていない。君の偉大な精神の翼が傷付くことが決してないように願いたい。

—

地平線上でぎざぎざの雷雲の火山状の半円が大きくなっていく。遠くの方で雷の音が聞こえる。氷河の上には昼の太陽の素敵な長い稲光が見える。私は雷雲より早くに山腹に降りたいと願う。

今西の方に大聖堂と、それに、思うにシュトラースブルクの遠隔通信機が見える。この死の人差し指はほとんど崇高で戦慄を覚える。それは運命の女神のようにその鋏を使う — それは人民の秤の指針であり、時の傾角と偏角のコンパスである。

雷はますます音高く、激しく近寄って来る、しかし白い雷雲の山並みはまだ低く空にかかっている。 — 何ということか。この雷は戦場からやって来ているのだ — 兵士の群れが丘の上を突進し — 農夫達が走り — 一つの村がかがり火のように燃え — ある庭では死んだ馬どもが見え、一人の子供がもぎ取られた一本の腕を持って去って行く。

さて私は燃え上がる地獄が駆り立てている平原と煙塊の方を見た。私は中に入りたかった。私の風は真っ直ぐに諸民族の暗く広い瀕死のベッドの上を吹いていった。私は発火された煙の中に下降して行き、惨めな人間のように憤慨しようと思った。 — 私は死がその屠畜を屠るときの鈍い斧の音だけを聞いた、その家畜の声は聞かなかった — 青空の周りには天の雷雨が静かに大地に懸かっている、それらが起き上がって共に戦いに赴くまで、準備を整えて見守っているようであった。 — 重く圧迫する盗賊よ、私の気球船の上で何をするつもりか。静かなアルプスから一人の子供をさらってきて[*1]、執政官達が牧人の国をそうしたように、ここでむさぼり食うつもりか。去るがいい、汝は昨夜私の心臓を求めた黒い雄鶏だ — 何と二分間のことで悲嘆が大きく育ったことか。

*

恐ろしい。 — 今や私は奴等を、人間どもを憎むことが許される。人間どもは滑稽な変わり者で、明るい時のフクロウ[知恵の鳥]であり、少しばかり暗闇を見だしさえすれば、すぐに食い破る猛鳥となる。何でも火薬で片付ける。ただ火薬で諸国の牢獄の空気を浄化する。火薬で、すさまじい悪徳でできた傷を更に広げ癒す。何世紀にもわたって所有欲がその銀精錬所で働く、そして遂にはおまえ達の心の毒罠には多くの砒素が付着していて、精錬所の煙と共に、生きて花咲くすべてが萎れて禿げたものにされてしまう。いやはや。今日では第二世界という宝石は何と貪欲に多くの魂の粗殻を吸い込んだことか。そして下の方では悪魔が立っていて、手足の小さな市場を人々（例えば侯爵や執政官）のために開いていた。こやつらは自分達の助かった手足への感謝のために、聖なる者達に奉納の[蠟製の]手足を捧げたいと思っているのである。

一陣の風で私は突然武器の輝く火事場の煙の中に投げ込まれた。私は気体の栓を抜き取って、蒸気の中へ沈んで行った。そこでは死神のバジリスクの目がその熱い銀の閃光を放ったり閉じたりしていた。 — 私は余り間近の低空にいて、銃剣のきらめき — 大砲

の炎の雨 — 大地の流血の雨 — 苦痛の声 — 出血で青ざめた姿の側にいたのではなかった — ただ穏やかな音楽、愛の溜め息と喜びの涙を告げる音楽は下界の嘆きの中では嘲笑のように響かざるを得ず、カルタウネ砲の軍隊のティンパニーは地響きを立てて柔らかな優しい音色に混じっていった。そして小さな大砲の太鼓の音の渦が続いた。 —

何とまあ。 — 苦痛は下界であちらこちらに見られ、そして足で我々の顔を踏みつけ、ただ瀕死の者達の下に死者を埋葬した — 私の心は震えた — そのとき善良な、罪のない馬どものいななきを耳にした — 今や私も憤激にとらわれた、というのも私も実際下界の者達の一人に他ならないからであり、そして自分の有するすべての石を憤慨して真っ直ぐに、格闘中の、邪悪な霊の地震によって互いに戦争の狂気へと揺り動かされている集団に向かって投げつけた。 — 罪のない馬には当たらないよう願うものである[*2]。

突然重量を失って、私は青空の中へ持ち上げられた。

何と静かに冷たく太陽はその寂とした空に、鬱陶しい地上の地獄を見下ろして、輝いていたことか。あたかも人間どもの戦火は太陽の偉大な目の前の病んで舞う火花にすぎないかのようである。私は振り返って戦闘の集雲の方を見た。すると私の目は怒って泣いた。光輝を見せる王冠のために気位高い凱旋門、勝利門として一緒にアーチを形成する諸民族の涙の滴を考えたからである。人類で最も劣等なもの、あるいは非人間的なものは、誰も、侯爵も、検閲も、たとえその検閲がとても専制的なものであれ、恥知らずなものであれ、戦争による辛辣この上ない非難を禁じていないことであり、それ故戦争の名誉と持続はより小さなものになっていないことである。

素晴らしい一日だ。明るくほの白く輝くスイスの山々がその谷や尖塔と共に私の前に迫ってきており、ライン川をふるい棄てている。しかし私の後ろでは素早く雷雲が空に広がっており、怒ったように黙っている。風は次第にゆっくりとなり、私をほとんど運ばない。

今や何も動かなくなった。何という世界を前にして私は静かに浮いていることか。私の前ではライン川が轟いている。私の背後では雷雨が轟いている — 神の町が無数の輝く塔と共に私の前に横たわっている — 遠くの低い所に永遠の神殿の上にあるかのように白く明るい神々の像があって、それに神々の高い王、つまりモンブランがそびえている。低い平原の上に投げ落とされたライン川が白い巨人の精としてまた昇って、神々しい虹をまとっていて、銀色に軽やかに漂っている。

これはどうしたことか。私の運命か — 黒い雄鶏が引っ掻いているのか。 — 私はもっと低く、素晴らしい、旧世界の上に休らう新世界の前に降下しようと思った。しかしできなかった。気体栓の間の接続が戦闘での急激な上昇でちぎれていた。雷雨に襲われる前に、風力でアルプスに達しないまでも、ただ気球を切り裂くことで切り抜けられよう。

今や一陣の風が神々しい光輝の間近に私を運んで行く。しかしすでに雲々が奔流よりも声高に働いていて、私の背後の黒い雲の蛇がとぐろを巻いて、しゅっと音を立て、東の私の傍らですでに玉虫色に光っている。日輪の馬車はすでに低く大地の塵の中にある。何と炎の黄金の鷲どもが至るところで舞って、太陽の周り、氷のドームの周りで、砕けたライン川の周りで、そして毒々しい雲の周りで舞って、翼を広げて緑のアルプスの山々で休まっていることか — 思うに私は今日死ぬ定めであろう。大いなる雷雨が私を掴まえることだろう。私の上の覆われし神よ、私は喜んで死ぬ。山々と太陽とドーム状の青空を目の前にして私の精神は喜んで閉じ込める小屋から去って、遠くの自由な神殿へ飛んで行く。

私は黄昏の時刻と山々の世界を今一度深くざわめく心に押し抱く。いつでも心臓は砕けるがいい。

何と素敵なことか。東では雷と奔流の音がし、それらの上には虹の代わりに一つの大きな静かな色彩の輪が、宝石からなる永遠の燃え上がるリングが懸かっている。 — 温かい穏やかな太陽が雷雨の尖塔から遠からぬ所がかすかに光っている。 — まだ金緑色のアルプスはその胸に陽を受けて、光と闇とがアルプスの山あり谷ありの世界の中で素晴らしく交錯して働いている。町は雲の下にあり、氷河は輝きに満ち、谷は靄に満ち、森は暗く、稲光と夕方の光、雪、雫、雲、虹とが同時に無限のサークルを形成している。

このとき太陽の前で雲に喉ができてあくびをした。なおも一人のアルプスホルンを持った牧人の姿を牛どもに混じって、緋色の山腹に目にした。牧人の音色はこちらまでは聞こえなかった。そして一人の牧人の少年が山羊の許で夕べの飲み物を飲んだ。 — 君達は何と静かに存在の嵐の中で暮らしていることか。 — 今や黒い雲が太陽をかじるようだ。

— 崇高な土地が巨大な塚の一つの墓地となり、ただ白く高い氷河の墓碑がなおも輝き続けている。

私はこの世界から去った — 無限の雷雨の雲がスイスと全体を覆った — 黒い棺掛けの許、下の地上では音高く雨が降っている — 長いこと稲妻はなく、恐ろしいほどためらっている。 — 星々が上空では湧き出てきて、あたかも星々のにぶい鏡像が銀色の小片として陰気な基底部分の上に漂っているかのように思われる。 — おや、風向きが変わって、私を黙した、一杯の地雷の上に、その火縄はすでにほの白く光っている地雷の上に駆り立てていくようである。何と陰気なことか。雲の下ではまだ山の尖端が穏やかな黄金の夕陽を受けている。

稲光はなく、ただ蒸し暑さがあるだけである — しかし私は雲が私を引き寄せているのに気付いた。今や突然見る間に二つ目の雷雲が私の上でそびえて、二つの黒雲が互いに轟き合って、その一つが私を掴む。今私にはそのことが分かる。

最後の落雷の瞬間まで私は執筆する、ひょっとしたら私の日記は散逸しないことだろう。

さてすでに雷雨の末端は互いに接して、轟き合っている。 — 何と蒸し暑いことか。

— 今や私のカロンの小舟はわきたつ煙雲の中にさらわれた。 — 私はもはや何も見えない — 人生とは何か — 下の臆病なうずくまる人間どもは今やきっと神に向かって祈りの歌を歌い、哀れな者どもはきっと私の死体を見て、皆に忠告することだろう —

何と上下に轟くことか — ヴェルリッツが私の最後の日となった、そのことを私は予感していた。 — いやはや。今日の夢は本当に私と私の最期をはっきり告げるものだった。この夢はまさに正夢となるはずのもので、今や私の小さな郵便ラップを憤然と雷雨の中に吹くことにしよう。下界で『ドン・ファン』の中で、モーツァルトが吹いているような按配で、そして大地の偽善者達に最後の審判が始まったと思ひ込ませよう。 —

さようなら、グラウル。多分君が私を胸に抱きしめることはないだろう。...

*

ジャンノッツォの友人（グラウルあるいはライブゲバー）は — 自分の心がまだ痛みの余り弱りすぎているというので — 私に、単に簡潔な言葉で、この偉大な心の青年の死について、次のような報告を寄越した。

「 ― しかし世間はこうしたことすべてを知る必要が全くありません。彼がジャンノッツォという名前であること、それだけで十分です。この最も昔からの友ではないけれども最も強靱な友は、私とは二回会っていますが、彼がそれに気付かなかったということ、これは奇妙な成り行きです。というのは私は、彼がブロッケン山でメヌエットを踊るのを目にしたあの夢遊病者に他ならないのですし、それにベルンへの途次 ― ベルンへ私は私の『フィヒテ哲学の鍵』を書いたのですが ― 彼が上でラッパを吹いたとき、ちょうど私はシャフハウゼンのラインの滝に立っていたのでした。雷雲はすさまじく大地の近くで荒れ狂い、ライン川と共に落下しました。実際私と他に何人かの者が上の陰鬱な雲塊の中から、奇妙なしかし不調和な、切れ切れの、つんざくような音色を耳にしたのでした。最後に雲塊をものすごい雷鳴が砕きました。私どもとさほど離れていないところの平原に切り裂かれた気球とその輿とが落下してきました。私はすぐに大切な友と分かりました。彼の右腕と彼の口とはもぎ取られ、ラッパは部分的に溶けて、高い眼窩の上にある彼の長く垂れる眉毛は燃え落ちて禿げており、彼の顔は怒ったように歪んでいました。しかし他の部分は無事でした。私は彼の夢で私が話したという分別ある言葉を模すばかりです。『ジャンノッツォ、どこにいるのだい、会えないのかい、君のことを本当に思っているのだ、哀れな奴』。

*1 スイスでしばしば子供をさらう禿鷹を彼は目にしているのである。D.H.

*2 ジャンノッツォよ、君が傷付けようとするときの原動力の狂気はまさに諸民族を互いに駆り立てているおぞましいものだ。

訳注

次の『ペスティッツのリアル新報』の告知

- (1) リアル新報、 Realblatt はこのタイトルで 1770 年から 84 年ウィーンで発行された新聞。
- (2) 画家フーバー、 Jean Huber、通称 Huber-Voltaire(1721-86) ヴォルテールの友人。彼の放恣な冗談は当時よく話題になった。
- (3) 注の所で、記述されている名前は皆ジャン・パウル作品の登場人物。例えばヴィクトルは『ヘスペルス』の主人公。フェンク博士は主に『見えないロジ』と『ヘスペルス』で登場。
- (4) 『学的報知』 Der Göttinger Gelehrte Anzeiger は 1753 年来発行。次の『学的ドイツ』はハンベルガーの四巻本『学的ドイツあるいは存命のドイツ人作家の辞典』を 1776 から 78 年に Joh. Georg Meusel(1743-1820) が新たに発行し、続刊としたもの。
- (5) 九月二日、 1792 年 9 月 2 日のフランスでの 9 月虐殺を念頭に置いたもの。ジャン・パウルの意見ではこれでフランス革命の理念が裏切られた。
- (6) 就任プログラム、『巨人』の第九周の中に記されている。
- (7) 島バラタリア、お伽噺の島。『ドン・キホーテ』ではサンチョ・パンサが代官を務めることになっている。
- (8) ラシーヌ、彼の諷刺的喜劇『訴訟狂』では小犬を巡る裁判が重要な役を果たしている。第 3 幕第 1 場以降参照。
- (9) Paul Scarron(1610-60)、フランスの叙情詩人、劇作家。『滑稽物語』等。マントノン夫人の最初の夫として著名。
- (10) パテルニアニ派、人間の卑俗な部分は悪魔によって作られているので、魂は肉の欠陥に対し無垢であると仮定する異端。
- (11) 一度述べたと思うが、「父親には時間がない。父親は一日中、より小さな芸術作品、例えば娘達への遺言を磨いているからである」。『ジャン・パウルの手紙とそれから先の履歴』、『ジャン・パウル中短編集 I』364 頁参照。
- (12) フラクセンフィンゲン、ジャン・パウルの『ヘスペルス』の舞台となっている小さな侯国。

一月一日

- (1) Giuseppe Toalde(1717-98)、イタリアの物理学者。四季に与える星座の影響を初めて調べた。

一月二日

- (1) 弁髪と三角帽は古い宮廷の衣装なのに対し、短髪と丸帽は当時の革新的ファッション。
- (2) プルートー、ジャン・パウルは冥府の神プルートーをギリシアの富の神プルースと混同している。この混同はよく見られる。
- (3) Pausan、アエリアヌスとルキアヌスによって伝えられている逸話。
- (4) 再生のとき、Johannes Gerhardus(1582-1637) や Bernard Connor の主張する説。それによると人間は髪や胃などなしにまた再生するそうである。

一月三日

(1)エノク、ノアの曾祖父エノクについては、彼は死なずに神によってエリアス同様に天へ連れ去られたという伝承がある。「創世記」第五章、第二十一―二十四節参照

一月四日

(1)Garlieb Merckel は一七九八年二巻本の『昔のリーフランド』を書いた。

(2)Adolph Modeer(1738-99)、スウェーデンの国民経済学者。自然科学者としては特に水滴の稠度について調べた。

(3)票と違って、「票は量るべきで、数えるべきではない」という文を暗示している。この文はシラーの『デメトリウス』第1幕第1場に由来するとされるが、ヴィーランド、リヒテンベルクにも見られ、夙にプリニウスにも見られる。

(4)切られたカルタ、切り裂かれたカルタの中に当時よく金貨が発送のために収められた。

一月五日

(1)古い無意味な薬剤の羅列はスターンの影響。『トリストラム・シャンディ』II. 20参照。

(2)ミイラから、ミイラの砕けた肢体からは以前薬物や黒い染料が取り出された。

一月六日

(1)ここではフェンク博士の『シェーラウ侯爵の亡き胃に対する弔辞』を記す予定であった。しかし検閲のため意を尽くせずに、『1801年のヴァイマル新年年報』に書き直して掲載し、後に小品として『カツェンベルガー博士の湯治旅行』(1809年)に収めた。

一月七日

(1)F.C.Hirsching、『ドイツの立派な図書館記述』四巻、1786-90。

(2)七年前、正しくは四年前、フーケルムにその頃虚構の著者 J.P.は登場。

(3)『フーケルムの地下世界』、P.Aringhi の著名な作品、Roma Subterranea、1651年を模したものの。

一月八日

(1)カンシュタイン聖書、敬虔主義者 Carl Hildebrand v. Canstein(1667-1719)によって普及のために作成された聖書。

(2)K.G.Woide : Notitia Codicis Alexandri(1788)、S.421。「実に大なるかな敬虔の奥義、キリストは肉にて顕され」、先行の「奥義」は中性名詞なので、男性名詞の関係代名詞の OC はキリストを指すと解される。⊕ C であれば明瞭に「神は肉にて顕され」となる。

(3)ザイラーの教理問答、『聖書の教理問答、Georg Friedrich Seiler のよる聖書の宗教と幸福の教えからの抜粋』(1789年初版)。ジャン・パウルは至る所で彼を軽蔑している。

(4)André Levret(1703-80)、フランスの医師。外科医、助産医としてとりわけ分娩鉗子の

改良に取り組んだ。

(5) 1795 年来 J.Th.B.Helfrecht はホーフのギムナジウムの校長として学校図書館の充実に務めた。

一月九日

(1) プラハの戦闘、著名な民謡、『プロイセンがプラハに進軍したとき』のことであろう。これは『少年の魔法の角笛』にも収められた。

(2) 教会法、Heinrich Arnold Lange 『新教の領主と臣下の教会法』1786 年第二巻 371 頁。

(3) Priscianus von Caesarea (紀元 500 年頃)、重要な文法家。『文法教程』。

(4) 『世界図絵』、Joh.Amos Comenius (1592-1670) による絵入りの教本。1658 年初版、十八世紀まで使用された。

一月十日

(1) モルグ広場、当時パリでは身元確認のためここで死体を保管した。

(2) William Pitt d.J. (1759-1806)、イギリスの政治家。1783 年から首相。独立戦争敗北後のイギリスの政治、経済の安定に努めた。

一月十一日

(1) Gerhard Johannes Vossius (1577-1649) はルカヌスに私淑していたが、このことをジャン・パウルは『見えないロジ』の第三号外でも紹介している。

一月十二日

(1) D.Michaelis (1717-91)、ヨーロッパ的名声の神学者、東洋学者。

(2) J.A.Ernesti (1707-81)、神学者、重要な文献学者。

(3) Plinius、彼は『博物誌』の三十七冊の本で、二千もの本から汲み尽くした自然誌についてまとめて提供した。彼の本はそれ故「貧者のための文庫」と呼ばれた。

(4) Joh.Gottfr.Eichhorn (1752-1827)、神学者、東洋学者。ミヒャエリスの弟子。『旧約聖書への案内』(1780-83)の中で述べている。

(5) アルドリウス、Prospero Aldorasio の Idengraphicus nuntius、ナポリ、1611 年。

(6) ホガース、若い頃ホガースはロンドンの場末でこっそりとスケッチを爪に描いて、モデルの反撃を避けたと言われる。

(7) J.J.Spieß、『ブランデンブルクの貨幣の楽しみ』、1768-74、5 分冊。

(8) Daniel Georg Morhof の Polyhistor (1668-1707) をジャン・パウルはよく引用している。

(9) Gian-Francesco Poggio Bracciolini (1380-1459)、イタリアの人文学者。教皇ヨハネス 23 世の書記としてコンスタンツ公会議に出席の途次、修道院の図書に古典ローマ文学を再発見した。

(10) Joh.Arndt (1555-1621)、『真のキリスト教』1605-1610 のことと思われる。

(11) Anne Lefèvre, Madame Dacier (1651-1720)、『アリストファネスのプルーツと雲』(1684 年) の序言でそう主張している。

(12) 『貨幣の聖書』、貨幣上の聖書の文を集めたもの。

(13) ヴッツ風な図書、周知のようにジャン・パウルの牧歌の主人公、学校教師ヴッツは、大市のカタログにある本のタイトルを利用して、自ら手書きの文庫を作った。

一月十三日

- (1)Matthieu von Schleunes、 『ヘスペルス』の登場人物、陰謀家。
- (2)Fr. Carl v. Moser(1723-98)、法学者、ダルムシュタットで大臣を務めた。
- (3)Salomon Geßner(1730-88)、スイスの詩人、銅版画家、出版者。その散文詩は十八世紀評価された。
- (4)J. Arnold Ebert(1723-95)、ヤングの『夜の想い』(1760年)を翻訳した。
- (5)Karl Wilh. Ramler(1725-98)、レッシングとニコライの友人。1785年ゲスナーの散文詩を下手法六脚韻の詩に翻案した。
- (6)背中ではない、フランスでは不敬罪を犯した者の肩に百合の焼き印が押された。

一月十四日

- (1)懸賞問題と予告、これはジャン・パウルの『悪魔の文書からの抜粋』の中の記述を利用したもの。
- (2)Joh. Salomon Semler(1725-91)、新教の神学者。

一月十五日

- (1)Gregoire Potemkin(1739-91)、エカテリーナ女帝が1787年コーカサスを訪れたとき、ポチョムキンが村々に立派な建物正面を素早く造らせて、裕福な状態にあると見せかけた。
- (2)Pierre Louis de Maupertuis(1698-1759)、フランスの物理学者、哲学者。『哲学書簡』の中でラテン語の学者の町を提案した。
- (3)ガリアの戦争、フランス革命戦争では1800年頃状況が厳しくなっていて、講和の際もっと譲歩を覚悟しなければならなかった。

一月二十日

- (1)遊びの物語、この物語はジャン・パウルが『再生』(1798年)で記したニュルンベルクへの旅を追っているかのように思われる。話し手のジャン・パウルとその妻ヘルミーネの周囲にジーベンケース、ナターリエ、学校参事官のシュティーフェル、それにニュルンベルクの伊達男 v. ケーケリッツ氏が同様に見られる。
- (2)René Rapin(1621-87)、フランスの詩人、作家。ルイ十四世やチュレンヌ等への賛辞集がある。
- (3)Edward Gibbon(1737-94)、イギリスの十八世紀の歴史家。『ローマ帝国衰亡史』(1776-88)。
- (4)Jaques Benigne Bossuet(1627-1704)、フランスの神学者、説教家。ここでは多くの「賛辞」の著者として言及されている。
- (5)Joh. Georg Meusel(1743-1820)、ハンベルガーの『学的ドイツ』を引き継ぎ、刊行した。
- (6)Gottlieb Benedikt v. Schirach(1743-1804)、ヘルムシュテットの倫理と政治学の教授。ブルタルコス『対比列伝』を翻訳した他、六巻本の『ドイツ人の伝記』を出版した。
- (7)Christian Heinr. Schimid(1746-1800)、『ミューズ年鑑』の創始者の一人。『詩人達の伝記』

二巻本 (1769-70)等。

(8)三人の季節の女神達、 Eunomia(エウノミア、法的秩序)、Dike(ディケー、正義)、Eirene(エイレーネー、平和)の三女神がヘシオドスでは名付けられている。

一月二十一日

(1)Benoit Joseph Labre(1748-83)、乞食として巡礼してローマで死亡。死後信者から多くの寄付がなされた。ジャン・パウルは Giuseppe Gorani(1740-1819)『イタリアの最も重要な諸国家における宮廷、政府、風俗についての秘密の批判的記録』(1793)から引用していると思われる。

(2)レッシング、俳優のグロスマンは 1789 年レッシングの記念碑のために金を集めようとして失敗した。

(3)James Thomson(1700-1748)、自然描写の詩『四季』(1730 年)は十八世紀ヨーロッパ文芸に影響を与えた。

(4)由来の詳細は不明。

(5)Jaques-Etienne それに Joseph-Michel の Montgolfier 兄弟は 1783 年気球船を造った。

一月二十二日

(1)シェーラウ、『見えないロッジ』の首都。

一月二十三日

(1)馬の入場許可代、馬車の旅行者は自分の通行税を支払う必要はなく、馬の税を共同で負担するだけであった。

(2)Joh. Bernh. Basedow(1723-90)、デッサウに有名な博愛校を設立した。彼は巧みにそのための寄付金を募った。

(3)Patrick Brydone、『シチリアとマルタを通過の旅』(1773 年)二分冊、第 24 の手紙参照。

(4)大学での新入りいじめは 1662 年帝国法によって禁止された。

(5)ローマの執政官 M. Attilius Regulus はカルタゴ人によって釘の張られた樽で責め殺されたとされる。

(6)ロレットの小家、ナザレの聖母マリアの生家は伝説によれば 1295 年天使達によってイタリアのロレットに運ばれた。

(7)Joh. G. Chr. Fick、『ドイツのあらゆる方面の旅行者のためのポケット版』(1794 それに 1795 年)。

一月二十四日

(1)カッツェンベルガー博士も同様に蜘蛛を食べる。

(2)David Garrick(1716-79)、重要なイギリスの俳優。シェークスピアの再認識に寄与した。

(3)Simonides von Keos(556-467)、ギリシアの哲学者、詩人。人間は本質の洞察には達しないという説をよく説いた。

(4)真空を恐れて、すでにラブレーが『ガルガンチュアとパンタグリユエル』I、5の

中でこの説を笑っている。

一月二十五日

- (1) Philip Herbert, Earl of Pembroke(1584-1650)、絵画の収集家。ヴァン・ダイクの後援者。
- (2) 聖なる願望、ジャン・パウルは教会統合のための聖なる団体(Pia corpora)と Philipp Jakob Spener の主著『聖なる願望』(Pia desiderata)1675年とを若干強引に結び付けている。
- (3) Epiphanius(403年死亡)、コンスタンツィアの主席大司教、ヒエロニムスの友人。『薬剂箱(Panarion)』の中で八十種類の異端とそれに対する対処法を書いている。
- (4) Nickel List(1656-99)、大胆な盗賊で生前から評判であった。長いこと追跡され、最後に車裂きにされた。
- (5) Eberhard David Hauber(1695-1765)、説教家、地理学者。『魔術文庫、肉体における悪魔の力に関する本や行動についての詳細な情報と判断』(1783-45)三巻。
- (6) 天地創造、1797年に出来たこの作品は1799年3月ウィーンで初演されると、評判になった。
- (7) イスメーネだけを愛した、シュリーベン伯爵の『大胆な恋人』(1768年)の冒頭の歌。
- (8) John Brown(1735-88)、医師。人間の健康は大気や睡眠等の刺激によると説き、この刺激の調整で治療しようとした。

一月三十一日

- (1) ヴィルギール、正しくはヴィーギル。しかし以前の暦にはよくヴィルギールと載っていて、中世の魔術師の影響が見られる。
- (2) 七つの最後の言葉、十字架上でイエスの最後の七つの言葉を暗示している。
- (3) 『一般ドイツ文庫』は1765-92年に刊行された106巻に21巻付録が付いている。それから1795年以降『新一般ドイツ文庫』として刊行され、これらも高価な付録に入るかもしれない。
- (4) その尻尾、1794年7月のロベスピエールの失脚後も彼に従った者達は「ロベスピエールの尻尾」と呼ばれた。
- (5) 二十巻、スターンやラブレーを模した法螺。
- (6) ジャン・パウルは一アルファベートを二十四全紙と考えている。普通は二十三全紙。
- (7) イエナ、この町は1799年ロマン派の中心地で、当時ジャン・パウルに敵対していた。
- (8) かの天使の翼、「エゼキエル書」第十章第十二節、「ケルビムの全身、すなわち背や両手、翼と車輪にはその周囲一面に目がつけられていた」。
- (9) この厳しい寒さの中、ベーレントによると1799年から1800年にかけてヴァイマルは寒波に襲われた。
- (10) ヴィルギールの墓、ペトラルカによって植えられたとされる月桂樹は、ジャン・パウルの抜粋によると、長いこと枯れたままで、人々は単に偽装の枝を折り取るだけである。

第二小巻序言

- (1) Bernard le Bovier Fontenelle(1657-1757)、フランスの詩人、『詩の対話』(1683年)で知られる。

- (2) プラトンの詩作、『饗宴』第十四から十六章。
- (3) ニコライ派、『ヨハネ黙示録』第二章第六節以下参照。ここではフリードリヒ・ニコライの啓蒙主義信奉者が考えられている。
- (4) Garlieb Merkel(1769-1850)、批評家、作家。コッツェブーと共に雑誌『大胆録』を出版し、そこでジャン・パウルやヴァイマルの古典主義、それにロマン派を攻撃した。

招待回状

第五項

- (1) 『学的報知』、1753 年来刊行。
- (2) シラーの言葉、『ヴァレンシュタインの死』I、4。
- (3) シラーの批判、『素朴な文芸と感傷的な文芸』参照。

第六項

- (1) 『蟹小本』、Christian G. Salzmann の 1792 年の教育学の論文。間違った教育方針が皮肉に列挙してある。
- (2) Tiberius Hemsterhuis(1685-1766)、重要なオランダの文献学者。

第七項

- (1) Christian Fürchtgott Gellert(1715-69)、情感的な詩人、作家。十八世紀半ばに人気があった。
- (2) Joh. Bapt. Alxinger(1755-97)、ウィーンの文学者、『ウィーン・ミューズ年鑑』の編集者。
- (3) Ludwig Heinrich v. Nikolay(1737-1820)、ヴィーラントの衣鉢を継ぐ法学者、機会詩作家。以上三人とも Adelung(1732-1806)の古い啓蒙主義的趣味を受け継いでいる。アーデルングは「ドイツ文芸の最盛期は 1760 年頃であった」と言った。

第八項

- (1) ボワロー、ジャン・パウルは『悪魔の文書』のある注で、『文学の年』によればボワローは子供時代七面鳥に肝心の箇所を傷付けられた。エルヴェシウスによればこの傷のせいで女性に対し彼は辛辣になったそうである」と述べている。
- (2) ヴォルテール、『パスカルの考えについての考察』
- (3) ある女性への書簡「1800 年 11 月 4 日、第 10 の書簡」、「日没と日の出の間にはいつも比較的長かったり短かったりする夜がある。しかしリヒターには、どこに夜が一分間だけ続く所があるか示して欲しいものだ」。
- (4) 五人の男達、ゲーテ、ティーク、シュレーゲル兄弟、ベルンハルディ。

第九項

- (1) ベーレントはゲーテの 1795 年『ホーレン』の第一書簡を推量している。
- (2) ヘルダーの画期的著作、『学問や芸術に関する批判的森あるいは考察』(1769 年)。
- (3) エピメニデスの洞穴、エピメニデスは古代の伝説によれば一世紀の間眠っていて、再び活力を増して目覚めたとされる。

(4)ハーマン、 後年のゲーテのように、ジャン・パウルは 1800 年頃盛んにハーマンについて言及している。

(5)啓蒙主義の哲学者 Christian Wolff は 1723 年ハレから追放された。1785 年からは古典主義文献学者の Friedrich August Wolf が就任した。

(6)山岳の長老、 十字軍の者達はアッバス朝の長をそう呼んだ。

第十二項

(1)かつての、 原語は cidevant で革命時称号を奪われた貴族のことを暗示している。

(2)猿は当時火で暖をとるが、薪を追加しないと思われていた。

(3)オランダの学者、Cornelis van Paw の『哲学研究』(1788 年)と思われる。

第十三項

(1)盗人の指、 絞首台の死体から切り取った親指は魔力を有すると信じられていた。

ジャンノッツォの航海日誌

第一航

(1)『然るべき船員のための年鑑』、 W. K. v. Wobeser の『エリーゼあるいは然るべき妻』のパロディー。

(2)前もって停泊する、 典拠としてベーレントは Faujas de St. Fond、1784『航空機による実験記述』179 頁を挙げている。そこでは上層と下層の相対立する気流の中に静かな層があり、そこを航行するといいと提案されている。

(3)John Howard(1726-90)、イギリスの博愛主義者。牢獄や病院の衛生状態の改善に取り組み、そのため各地を視察した。『イングランドとウェールズの牢獄の状態、幾つかの外国の牢獄の報告』(1777 年)。

(4)聖なるグスタヴ、 スウェーデンの Gustav Adolf。

(5)ヤコブの石枕、 「創世記」第二十八章第十節以下参照。

(6)Siechkobel、市門の前にある隔離された検閲所はそう呼ばれた。

第二航

(1)ファラリスの雄牛、 この伝説的クレタの暴君は、ペリロスの作った鉄の雄牛の中に犠牲者を入れて焼き殺したと言われる。悲鳴が牛の咆哮のように聞こえた。

(2)フランスの百合、 この誤った主張はまず Claude Facht の『騎士、紋章、軍使の起源』(1600)に見られる。

(3)古代神殿の逆、 サンサーシ宮殿ではフリードリヒ大王は Karl v. Gontard に「新宮殿」の側に所謂「古代神殿」を収集品のために作らせた。

(4)乙女、 ヴォルテールは 1755 年喜劇的叙事詩『オルレアンの乙女』を出版した。

(5)ドミノ仮装、 原語はコウモリ仮面。

(6)ツィスカ、 ボヘミアのフス教徒の指導者。死に際して、自分の肌を剥いで、軍太鼓として使うように命じた。

第三航

- (1) Horace-Bénoit de Saussure(1740-99)、重要なスイスの自然探求者で、何度かアルプスを歩き、四巻の本にまとめた。『アルプスの旅』(1779-96)。
- (2) 記号、鉛の化学記号は土星の天文学的記号に合う。
- (3) パトクルス川、リディアの川で古代豊富な金で有名であった。
- (4) アルプスの小貨幣、カール四世の下、1360年初めて西側のドイツにも導入された銀の小貨幣。
- (5) Joh. Ernst Fabri(1755-1825)、エルランゲンの地理学教授。

第四航

- (1) ウィーンの移送、J. L. v. Heßの『ドイツ、オランダ、フランスの飛行紀行』(七巻、1793年以降)を参考にしていると思われる。

第五航

- (1) Antoinette du Ligier, Madame des Houlières(1633-94)、「フランスの10人目のミューズ」と評されたフランスの詩人。その詩と牧歌は十八世紀にもてはやされた。
- (2) 街路掃除夫達、ウィーンやミュンヘン、その他の都市で犯罪者は街路掃除に従事した。
- (3) ヘルメスの柱、ギリシアではヘルメスは商人と路上の安全のための神として通りに柱が立てられた。同時にヘルメスはまた盗賊の神であった。
- (4) Joh. Christoph, Edler v. Quistorp(1737-95)、刑法学者。刑法の改善に尽力した。
- (5) Georg Friedr. Meier(1718-77)、博愛家、啓蒙主義哲学者。ハレ大学を拠点にした。
- (6) Joh. Thomas, Edler v. Trattner(1717-98)、悪評高いウィーンの高利貸出版者。その収入で自分の名を冠したTrattnerhofをウィーンに建てさせた。
- (7) ミカエル騎士団員、聖ミカエル騎士団は1469年フランスのルイ十一世の下で設立され、アンシャン・レジームまで声望があったが、革命の時に解散した。ベルギーの湯治場スパーではユダヤ人や詐欺師等も団員と称したことをジャン・パウルは、Weckherlinの『Grauem Ungeheuer とてつもないこと』1785年四巻から知っていた(ベーレントによる)。
- (8) Edward Young(1683-1765)、イギリスの詩人。『夜の想い』(1742-45)は著名。引用は「第四の夜」冒頭。

第六航

- (1) 絞首台、バイエルンの森やフィヒテル高地の真珠養殖の川では盗みの警告のために絞首台が立てられた。
- (2) ブロッケン年報、1791年『1753年から1790年のブロッケンの年報 あるいはこの期間に著名なこの山の記念帳に記入したすべての人名と添え書き、自然観察や報告、詩、それに機知的な、気まぐれな、滑稽な妙な思い付きを含むもの』、内容は必ずしもこのタイトルに合うものではない。ハイネの『ハルツ紀行』(1826年)の辛辣な意見参照。
- (3) Pierre Bayle(1647-1706)、『歴史批判辞典』1730年。
- (4) Pomponius Lätus(1427-97)、人文学者。古典古代を愛好して、ほとんどキリスト教から

離れるに至った。

(5)アンタイオス、 大地の息子。ヘラクレスはこの巨人を空中で絞殺しなければならなかった、大地に接触するたびにその母が彼に新たな活力を与えたからである。

(6)Germain-François Poullain de Saint Foix(1698-1776)、フランスの作家。彼の有名な『歴史エッセー』は五巻本で1754-57年刊行された。

(7)コッツェブー風、 August Wilh. v. Kotzebue(1761-1819)、軟弱ではあるが、しかし感情効果を巧みに計算した劇作家。

(8)アリストテレス、 『詩学』24。

(9)アヌビスの神、 このエジプトの死者の神は犬の頭をしている。一部は神的な由来、一部は魔術的な由来のせいであると解釈されてきた。

第七航

(1)農耕歌、 ヴェルギリウス作の *Georgica*。

(2)ザイファースドルフ、 ドレスデン近郊の森の多い谷。

(3)Wörlitz、 デッサウ近郊の宮殿と1796年から1802年に建設された公園。

第八航

(1)Karl Fer. Hommel(1722-81)法学者。『市井日常質問集ラプソディー』(1765年)。

(2)エルランゲンの書評家、 1801年1月2日エルランゲン文芸新聞の匿名の批評のこととベーレントは推察している。シャルロット・コルデについてのジャン・パウルの論文中のカント道徳哲学への批判が反論されている。

(3)「貴方の名前の代わりに虚構の名前を記す」と予想される場所である。しかしベーレントは意図的冗談と解している。

(4)犬の洞窟、 ナポリ郊外の所謂 *Grotta del Cane* を暗示している。この洞窟は古代から酸欠で知られていて、奴隷や犬を投げ込むとすぐに窒息死した。

(5)1740-90年にかけてアルトナで発行された雑誌は『帝国郵便騎者』というタイトルであった。

(6)フランスの港町トゥーロンは1793年12月革命軍の攻撃で荒廃した。

第九航

(1)François Blanchard(1738-1809)、フランスの物理学者、気球乗り。1786年初めて気球でドーヴァー海峡を渡った。

(2)ミクロメガス、 小さく大きいの意味、ヴォルテールはこのタイトルの小説(1752)を書いた。

(3)Antoine Joseph Pernety(1716-1801)、フリードリヒ二世の図書館司書、『絵画と彫刻、版画についての簡易辞典』(1758年)。

(4)Joh. Melchior Goeze(1717-86)、 『死と永遠についての毎日の有益な考察』(二分冊、1755)。

(5)アリストテレス、 『詩学』7。

第十航

- (1)Friedrich Schulz 『或るリーフランド[バルト・ドイツ]人の旅』第一冊、(1795)、20 頁以下。
- (2)François de Salignac de la Motte-Fénelon(1641-1715)、ルイ十四世の宮廷での皇子傅育官、説教師。『テレマックの冒険』(1695)。
- (3)Friedrich Nicolai(1733-1811)、啓蒙主義の『一般ドイツ文庫』を編集した。
- (4)Anne-Catherine Helvetius(1719-1800)、唯物主義者の哲学者のエルヴェシウスの妻。才知に富み、夫の死後はスイスの荘園で才人達と交わりながら暮らした。
- (5)長いガウンの人、十八世紀の終わり頃までフランスでは僧侶や貴族の長いガウンと軍人の短いガウンの区別があった。

第十二航

- (1)ゲルゲン、ゲッティンゲンのことと思われる。
- (2)十二巻の『ドイツとスイス紀行』(1788-96)の著者ニコライのことと思われる。
- (3)Joh. Georg Krünitz(1728-96)、『経済学的技術的百科辞典、あるいは国家や都市、家庭、農業における経済の一般的体系』(1773年、完結1858年) 242巻。
- (4)Ernst Platner(1744-1818)、医学者、人類学者、哲学者。ライプツィヒ大学で教え、学生のジャン・パウルに影響を与えた。『新人類学』第一巻(1790)、第1180節参照。
- (5)六つの自然でない事柄、『見えないロジ』の第一号外のジャン・パウル自身の注によると、1) 覚醒と睡眠、2) 飲食、3) 動作、4) 呼吸、5) 排泄、6) 情熱とされる。スターンも述べている、『トリストラム・シャンディ』IV、19。
- (6)Bicetre、ルイ十四世の下に建てられた病院、牢獄。特に精神病院として使われた。
- (7)作家、August Heinr. Julius Lafontaine(1758-1831)のこと。ジャン・パウルを模しているとよく批判された。ブレンターノの『ゴトヴィ』(1801)レーマー宛の第三の手紙によると、「しかし彼の頭とその臣下はかの泉のものではない、その泉はある種の泉のように水を、絶えず水を無数に長く短く(退屈に気晴らしに)放って、偉いご婦人やその子供達を喜ばせ、数多くの文学的庶民やその糸紡ぎの者達を喜ばせるのである」(ペーレントによる)。

第十四航

- (1)真っ黒な雄鶏、カルダーノはその『自伝』の第37章で、夜何度か夢の中で鶏が現れて、自分を脅したと述べている。

あとがき

今年ジャン・パウルの長編小説『巨人』の付録と称するものをリポジトリで発表することになった。一部はすでに古見日嘉訳『気球乗りジャン・パウル』として現代思潮社より一九六七年に刊行されている。『巨人』では文体上ジャン・パウルの好きな脱線、諷刺を抑える必要があり、その好みの諧謔、諷刺の部分を存分に展開したものとされる。テキストは主にハンザー版を使い、訳注もそれに依っている。書評等に関する諷刺など身に覚えがないわけではない気がする。いつものようにフランス語に関しては田中陽子氏、ラテン語に関しては高橋憲一氏、その他細かい箇所に関しては松尾誠之氏の助言を頂いた。諸氏に感謝申し上げます。

2011年9月

恒吉法海